

静薬学友會報

静岡県立大学薬学部同窓会報

2022年（令和4年）No. 90



白い水差し 藤井尚子（昭和40年卒）

特集 薬学を礎として～静薬の記憶～

創業92年 配置薬販売業 三洋薬品HBC(株)

学術系社員募集!

「あなたの資格、活かしませんか？」



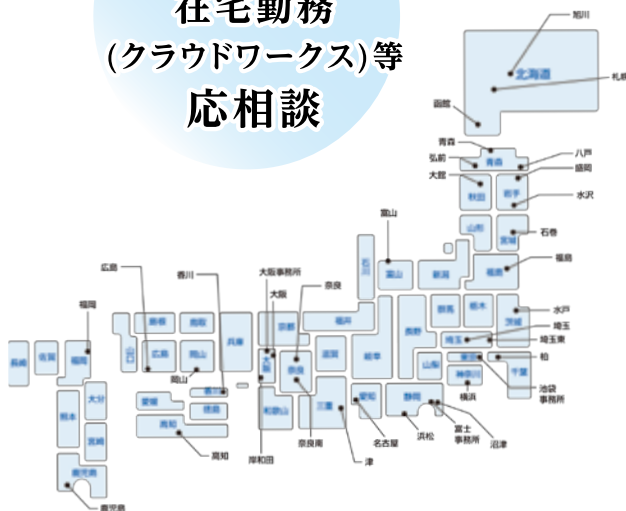
募集要項

- 応募資格 / 薬剤師・管理栄養士有資格者の方歓迎。
学術業務経験者は年齢25歳~68歳までブランクがある方も歓迎
- 業務内容 / 健康食品・化粧品の学術、Webカタログの文章作成、製品説明
- 勤務地 / 当社事業所【富士・池袋・大阪・米国ロサンゼルス】
- 待遇等 / 年収400~600万、時給1,200~2,000円

三洋薬品HBC株式会社は、92年の歴史を有する配置薬事業、創業28年のテレホンマーケティング事業、創業20年のEコマース事業、米国・中国に4拠点を有する海外事業が集結し、健康・美容に関する製品、サービス、情報をオムニチャネル・マルチメディアでお届けし、お客様の健康・美容生活に貢献できるCSRの高い企業、そして2030年には創業100周年を迎え、更にグローバルに展開する年商100億円企業を目指しております。

又サプリメントアドバイザー、医薬品登録販売士の認定・研修の資格ビジネスも行っています。 代表取締役 近藤 隆 (昭和46年 製薬科卒)

正社員・パート勤務
在宅勤務
(クラウドワークス)等
応相談



お問い合わせ先

TEL:0545-40-9000

三洋薬品HBC株式会社 総務課 内田、堀内まで

お客様のご要望にすばやくご対応するため、三洋薬品HBC株式会社のネットワークを活かし、全国36箇所の拠点に営業所を展開しています。



静薬学友会報

2022 No.90

目次

静薬学友会会長挨拶 安倍道治 2

特集『薬学を礎として～静薬の記憶～』

プラスチック海洋汚染への挑戦 植松正吾 3

心の持ちようで、人は支えてくれる 内藤隆文 4

変わらないことと、変わり続けることの重要性 瀧 優子 5

私の薬学者としての礎

～静岡県大で薬学の面白さ・魅力を学んで～ 長野一也 6

大学生活を有意義に 後藤純 7

地区同窓会だより

静岡県／関東／東海／関西／中国／九州・沖縄 8

薬学生涯研修講座報告 11

会員だより

薬学と私 中村芳正 12

大学だより

新任教授 滝田良 13

新任挨拶 三浦基靖 古庄仰 14

村上光 浜辺俊秀 15

退職に際して 山田浩 16

菅敏幸先生を偲んで 17

木村良平先生を偲んで 23

研究室だより

生化学 衛生分子毒性学 26

薬理学 医薬生命化学 27

身体運動科学 生体機能分子分析学 28

医薬品製造化学 生薬学 29

薬剤学 創剤科学 30

分子病態学 生体情報分子解析学 31

臨床薬剤学 臨床薬効解析学 32

医薬品情報解析学 実践薬学 33

医薬品化学 生命物理化学 34

医薬品創製化学 統合生理学 35

免疫微生物学 創薬探索センター 36

薬学キャリアデザイン近藤寄講座 薬学部教員の人事異動 37

科学英語 38

薬学部教室名および教員一覧 39

令和3年度成績優秀者賞・岩崎賞受賞

畑知利 菊間史也 40

永岡 菜中 尾初音 41

在学生だより 城泰暉 芹澤未来 42

渡辺日菜子 矢島聡 43

本部だより

理事会報告・総会報告 44

会計報告 50

叙勲 受章 52

関西地区同窓会総会開催のお知らせ 53

静薬学友会報への広告掲載について 54

お知らせ（地区同窓会のZoom利用について） 54

静薬学友会代議員・役員一覧 55

編集後記 56

訃報 56

正会員の皆様へ 会費納入のお願い 57

令和3年度会費納入者一覧 58

令和4年度 薬学生涯研修講座

白い水差し

この度、当会報誌の表紙絵の依頼を頂き、光栄で嬉しく思うと同時に、それに適う絵があるかどうか不安でした。取り敢えず、五年程前にいきがかりで作った画集を見て頂き、適当な絵があればということでお受けしました。選んで頂いた一作目はかなり以前に描いたものでちょっと意外に思えましたが、この絵について少し記憶を辿ってみました。一九八九年の作品となっていますが、モチーフに選んだ理由、テーマ等は、はっきり思い出せません。ただ当時、町の絵画教室に入ったのがきっかけで数年間二科展に出品していたのですが、マンネリになっていて自分を感ぜ迷っていた折、私の好きな絵を描かれる先生の勧めもあり、東光会理事長であった森田茂先生（茨城県出身、文化勲章受章）の個展を拝見し、東光展に出品することにしました。今までは異った何かを求めてキャンバスに對つたのでしよう。そして、この絵について今一つ思い出されたのは、前述の応募する中央展を変えた事による区切りの気持ちもあって、一九九〇年、つくばで一回目の個展を開きました。そこへ来て下さった三〇代と思われる男性の方が一枚の写真を手に「これだ、これだ！」とこの絵との再会を喜んでくれました。前年の公募展に出品した絵を会場で見ると写真に撮ったという事でしたが、広い会場で多くの作品の中から選んで頂けたのは何かしらのインパクトがあったのでしよう。今一度、絵（頂いた写真）を見直してみても、背景は眠らぬ東京をイメージしたものでしよう。すっかり日も暮れて家路を急ぐ車窓から見た夜景は立ち並ぶビルのレストランの窓から灯光があふれ、ネオンの輝く町が続いていた。当時の日本は高度成長期の名残りともバブル期のただ中で、改めて日本も私も元気だったのだなと思えました。

藤井尚子（旧姓宮崎）（昭和40年卒）

静薬学友会会長挨拶



一般社団法人静薬学友会 会長 静岡県立大学客員教授 安倍道治 (昭和46年卒)

学友会員の皆様におかれましては、日頃学友会の活動に対して、ご理解とご支援をいただきこの場をお借りしてお礼申し上げます。

未だ、コロナ禍が収束しない状況が続いており、会員の皆様におかれましては、何かと不自由かつ気分的にもすっきりしない日々を送られている方が多いことと思います。早いもので、新型コロナウイルスの感染者が日本で初めて確認されてから、2年半がたちました。約百年前の第一次世界大戦時に発生したスペイン風邪が3年程度で収束したことを考えれば、人流やワクチン開発などの状況は当時と異なるものの、コロナの感染もそろそろ収束に向かい、ウイルスそのものが季節性の風邪の一つとなり、過去の日常に戻れることを願っています。

さて、私が学友会の会長職を仰せつかったから、早いもので、2年が経過しました。コロナ禍の影響を受け、各種会議はZoomによるリモートでの開催が続いています。今年も、7名議員(37名の定数のうち学生代議員7名を除く30名)と役員(理事及び監事)が任期満了に伴う改選の年となり、代議員につきましては、全国11の地区ごとに割り当てられた定数に基づき、地区の同窓会からあらためて推薦届け出

の提出をいただき、5月に開催されました理事会において新たに代議員として選出されました。他方、役員については、6月に開催されました定時総会において、代議員による投票が実施され、19名の理事立候補者と2名の監事立候補者全員が選出されました。

また、総会終了直後には新たに選出された理事による臨時理事会が開催され、正副会長の選任投票が行われた結果、向こう2年間、副会長の高橋千恵子及び賀川義之ともども引き続き、理事会のリード役としてその任に当たることとなりました。

あらためて身の引き締まる思いです。両氏ともども学友会の発展に少しでも寄与できるよう微力ながら引き続き努力いたしますので、どうぞ、よろしくお願ひ申し上げます。

2期目を迎えるにあたり、以下の施策を重点的に推し進めることとしたいと考えています。

一つは、学生のキャリア形成への支援として実施している「近藤寄附講座」を次のステージに発展させたいと考えています。

本講座は1971年に卒業された近藤隆様からいただいた寄付金を基に3年前に講座を開設しました。講座の開設の目的は、各界で活躍する先輩諸氏

を講師として招き、生きた薬学を紹介すること、学生の将来の進路に対する早期意識付けを促すこととあります。講義自身は定着しつつあるものの、講座自身は、正規の講座ではありません。独立した講座に位置づけられるよう、さらに実績作りに努力をしていきたいと思っております。

二つ目は、春に開催されている就職説明会と学生祭である剣祭の機会を利用した、学生への就職相談・進路相談です。これまで、卒業生有志の協力をいただき、学生からの相談に応じてきました。このコロナの感染問題が発生するまでは、学生とは直接の対話を通じて、学生の抱える問題について学生に寄り添い、相談に応じてきたところでした。しかしながら、この2年間は、就職説明会にあつてはZoomによるリモートでの開催となったこともあり、対面相談の時と違って、学生からの相談件数は減少しています。

このような状況です。学生からの就職・進路相談については、寄附講座との連携を視野に見直しを図ることとし、学生有志との意見交換の機会やアンケート調査などを通じて、あらためて学生のニーズを把握したうえで、上記の定期的な開催とは別に、学生が希望するときに的確に対応できる仕組

みも検討していきたいと考えています。三つ目は、地区同窓会の活性化です。地区同窓会も他の会議体と同様、コロナ禍の影響を受けて活動は低迷しています。その中で、昨年は、池田潔中国地区代表のリーダーシップによりZoomを利用して唯一開催されていまして、この経験を活かし、当面対面に代わる新たな活動が行われるよう本部としても支援をしていきたいと考えています。

四つ目は、法人としての地域社会への貢献に向けた実績作りです。既に、ご案内のとおり、昨年7月に学友会の有志により地域医療に貢献することを目的とした運営管理会社が設立されました。学友会としては、当運営管理会社との協同事業を通じて少しでも社会に貢献できるよう、具体的に着手すべき事業について検討を重ねていく所です。本件もコロナ禍の影響等により、未だ、結論が得られていませんが、本年中には、事業の具体化を明らかにしたいと考えています。

以上、2期目を迎えるにあつて、所信を述べましたが、学友会員の皆様におかれましては、学友会の活動に対して、引き続きご理解とご支援をいただきたく、どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

特集 薬学を礎として、静薬の記憶

プラスチック

海洋汚染への挑戦

植松正吾

(昭和43年卒)



御免ください、昭和43年卒業の植松です。コロナのため、同期会が3年間延期になっています。皆様ごきげん如何ですか、来年こそは同期会が開けま

すよう期待しています。7月に4回目のワクチンを接種しました。モデルナアームと発熱で、キツイ2日間でした。終戦の年に生まれた出生率半分の学年です。戦後何もない状態から、インターネット、スマホの時代へ、楽しい人生を送っています。旧静岡薬科大学時代は、大きく人生が変化した時期です。敗戦から日本を復興する時期で、男子学生は工学部志望者が殆どでした。私もその一人で、電気少年から薬学生です。生薬教室の齋木先生の分類学は難敵難関でした、ハッチンソンとレンドル今でも耳に残っています。佐方先生の無機化学も登竜門で、参考書・千谷利三先生の無機化学の丸暗記。林英作先生の有機化学、(参考書・梅沢純夫、ワイザーワイザー、井本稔)、林栄一先生の薬理学と少しですが薬学に興味が湧いてきました。4年生の特別実習で、赤堀先生と風間先生に会い、 $F=ma$ 、 $V=IR$ の世界に戻ることが出来ました。量子力学、熱力学、統計力学、数学、界面化学の世界に導いて頂きました。田子の浦の海洋汚染に携わり、PCBの生分解と堆肥造り、中医学への挑戦と薬学とは異なる分野も挑戦させて頂きました。薬品物理化学教室の助手となり、40年も教員生活を送

り、学生さんの協力により、リン脂質の界面化学に挑戦しました、有難うございました。退職して12年経ちますが、プラスチックの生分解の仕事を継続しています。コンポスト (ISO14855-2)、土壌 (ISO17566)、メタン嫌気消化 (ISO13975) の環境下における、プラスチックの生分解試験法の開発に携わりました。現在は海洋におけるプラスチックの生分解速度測定法を開発しています。みなさまの協力で、ISO/AWI16623として新規案件になり、各国からのコメント88件に答えています。この年になりました、カッカしていますが、じっくり考える余裕もあります。やっと、今回もトンネルを抜けることが、出来そうです。プラスチックが微生物により水と炭酸ガスまたはメタンガスと水になる量を測定します。問題は、環境条件下ですので、測定期間は約1年になります。流量 $0.3ml/min$ で試験容器60個に送風し、ppm単位の二酸化炭素を測定します。この装置開発は、分析の宮原先生、分析センターの北村先生、成田先生の技術が支えられています。特に化学教室の遠藤先生のガラス細工は装置開発には必要な技術です。目的の物を作るために、手順を考え手際よく挑戦しないと、

やけどをして、途中で割れてしまいうす。手に火傷しながら、最後まで気を抜くことができません。使い勝手が悪いものは、捨てられて壊れます。赤堀先生には、「手を抜くな」、「甘ん」を教えて頂き、今年は、懸案であった、装置の自動化に挑戦します。やっと挑戦できる状態になりました。スタッフ、PC、センサー、コントローユニット、ガラス細工、壊れない程度の体力。机の横には、オシロスコープ、マルチメーター、発信機が並び中学時代の夢がなくなったようです。

薬品物理化学教室の卒業生の皆様へ、健康に気を付けて下さい。静岡にお越しの際には、同門会を開きましょう。コロナの対応は、薬学出身者として、残念に思います。無策な状態で、200年前と対策は同じです。保存性能の良い、生体条件に近いリン脂質と糖脂質のワクチン製剤の開発を望んでいます。

退職後、静岡在住の10人で毎月ウォーキングに行っています。70回を超えました。これも、静薬卒業生の名簿作成に携わり、同級生と連絡を保てたお陰です。あらためて、静薬同窓会のスタッフ皆様に感謝します。

Thank you!

心の持ちようで、人は支えてくれる

信州大学医学部附属病院薬剤部 教授・薬剤部長 内藤 隆 文

(平成9年卒)

新型コロナウイルス感染症の第5波の真っ只中の令和3年8月に信州大学病院に異動となり、あつという間に1年が過ぎました。隣県からの異動とはいえ、着任後、いまだに慣れない松本での日中と朝晩の寒暖差があるものの、仕事面では病院スタッフや地域の薬剤師会の方々に受け入れていただき、病院外へと活動範囲を広げています。2カ所の国立大学病院での勤務を経て、信州大学病院に着任しましたが、医療提供体制や地域医療のニーズなどこれまでの施設とは大きな違いがあります。歴史と伝統のある信州大学病院での薬剤部の運営に携わることになり、重責とともにやりがいを感じています。

私は薬剤師免許を取得後、大学院を経て、九州にある国立大学病院に薬剤師として就職しました。当時、国内の製薬企業には体力があり、同期の大学院生のはほとんどは医薬品開発に携わる製薬企業への就職を選択していました。修士論文の副査の教員に就職先を聞かれた時に病院薬剤師と答えたところ、首をかしげたことを覚えています(変

わり者と思われたかと)。薬剤師国家試験でも医療薬学の分野から出題されるところにも、静岡県立大学でも臨床講座が新設された時期でもあります。配属先の薬剤学教室での学術活動の中で生物薬剤学の臨床への外挿の難しさを実感する中で、臨床薬理学に携わることのできる大学病院に就職しました。病院薬剤師として入職した当時は、薬剤師の臨床業務に関連する診療報酬とその算定要件が大きく変わり、多くの医療機関で病棟業務中心の薬剤師配置がされました。それに伴い薬剤師が部外で他のメディカルスタッフと一緒に活動をする機会も増えました。病棟業務に関わる医師と学外活動や研究を行うなかで、多くの気付きや支えがありました。大学院生の研究生生活の中でも、人との繋がりから支えを受けながら活動範囲を広げており、就職してからも、そのような活動スタイルを継続できることが不思議に心地良く感じました。

追われています。病院薬剤師の中でも大学病院に勤務する薬剤師は忙しいといった印象を持たれます。大学病院に勤務する薬剤師は、日々の臨床業務の中でチーム医療への参加、人材育成や地域医療への関わり、研究活動などの仕事のやりがいを見つめます。日々の臨床業務に追われながらも、心の持ちようで、やりがいや目指すべき方向性を見いだすことができます。学生時代から現在に至るまで、育った場所には同期、先輩・後輩、教員、卒業生、同僚や他のメディカルスタッフを含め、支えてくれる存在がありました。「心の持ちようで、人は支えてくれる」といった考えを持つのは学生時代の経験によるものであり、用意された環境よりも人との出会いは重要なことと考えています。

これまでの学生生活や薬剤師人生の中で、周りの方々に育てていただいた



ストックホルムでの国際学会にて



変わらないことと、変わり続けることの重要性

グラクソ・スミスクライン株式会社 メディカル・開発本部 メディカルサイエンスリエゾン

瀧 優子

(平成16年卒)

私が大学を離れて10年が経過しましたが、世の中も私自身も色々な変化があった10年であったように思います。私自身は2009年から2012年8月まで薬物動態学分野（現薬剤学分野）にて勤務しておりましたが、アカデミアを離れる決断をし、医療用医薬品の広告代理店へ、メディカルコピーライターとして転職しました。

医療用医薬品の広告代理店では、製薬会社から依頼を受けて医師などの医療従事者への説明に使用するための様々な資料に加え、患者さん向けの疾患や治療の説明資料も作成しています。その中で、メディカルコピーライターの主な業務は、それぞれの資料が適切な内容となるように原稿を作成することです。そのためには疾患や薬に対する知識を基に、論文や承認申請資料を理解し、様々なルールに則った原稿を作成する必要があります。近年の医薬

品開発では免疫療法や核酸医薬品といった、自身が学生だった頃にはなかった新しい作用機序の薬剤も多くなっており、常に情報や知識のアップデートが求められます。また、スピードが求められる業務であっても、基礎となる知識や論文読解力があることで対応できる部分も大きく、情報を正しく伝えるというスキルを学ぶこともできました。

代理店業務を通じて、情報を適切な形で正しく伝えることや、それを通じて必要とする人に適切な治療を届ける一端を担うことに努めてきましたが、ライターとしてできることの限界を感じる出来事もありました。その最たるものがコロナウイルスの出現です。コロナウイルスによるパンデミックが発生すると、同時にインフォデミックと呼ばれる情報の氾濫が起きました。「分からない」ことが不安を招くこと

に加え、メディアに取り上げられる「専門家」の不確かな情報の氾濫や、それらの情報の科学的根拠の有無を確認することは一般的に難しいために、誤った情報に惑わされる方々も目にしてきました。そのような中で、薬学では基礎と臨床に関わる知識に加え、適切な情報検索の方法も学ぶため、いざとなれば自分で調べて確認するという手段を知っていることの強みも実感しました。このようなことは薬学を学ぶ上では基本的なことかもしれませんが、その基礎があるからこそ変化に対応できるのではないのでしょうか。

パンデミックやインフォデミックを経験し、もつと科学的な視点から医療や情報に関わりたいと考えるようになった結果、次のステップへ進むことを選び、6月より現職に就いています。本稿執筆時点では研修中の身ではありますが、MSLは医師をはじめとする

医療関係者の方々と科学的な対話を行い、自社製品の価値を最大化するという役割を担っています。MRとは役割が異なるため、薬を処方してもらうための情報ではなく、必要とされる情報を提供し、実臨床におけるアンメットニーズについてディスカッションする役割を担っており、これから自社製品の適正使用や新たなエビデンス構築に貢献できればと考えています。

この10年で自分自身の置かれている状況も変化しましたが、世の中の変化や自身の希望を叶えるために変化を恐れずにいられるのは、薬学の知識に加えて研究で身に付けた柔軟性が、私の中に確立された基礎としてあるからだと感じています。変わり続ける世の中で、自分を支える何かを身につける、あるいは自信を持って挑む、ということの重要性は、きつとこれからも変わらないのではないのでしょうか。



私の薬学者としての礎

「静岡県大で薬学の面白さ・魅力を学んで」

和歌山県立医科大学薬学部 教授 長 野 一 也

(平成17年卒)

私は、平成17年に静岡県立大学薬学部・薬品資源学研究室(薬資)を卒業し、大阪大学薬学研究所(阪大薬)で大学院を過ごしました。その後、医薬基盤研究所で研究員、阪大薬で准教授を経て、令和3年4月より、新設された和歌山県立医科大学薬学部(和医大薬)で、病態解析学研究室を主宰しています。

元々、父が昭和26年に3歳で脳腫瘍を患い、当時、北海道大学の和田 淳先生(カナダ・ブリティッシュコロンビア大学・教授)に命を助けられたこともあって、私は幼い時より自ずと医師を目指していました。しかし、高校で野球にあけくれた結果、成績は落ち込み、浪人しても合格できませんでした。その折に手を差し伸べてくれたのが本学でした。当時、恥ずかしながら、薬学という学問を全く理解していませんでした。しかし、本学が中期日程で、同級生も医学部志望者が多かったことなどから、どの先生も講義の最初は、薬学の魅力を伝える雑談から始まったことを覚えています。例えば、「医師は一生のうち何人助けられると思う

か?薬を創ることができれば、世界中の人々を助けられる」などの話でした。また、1年生から基礎実習が始まり、キャピラリーをひいたり、アスピリンを合成したりと、薬学部に入学した実感を早くから感じられたことも大きな点でした。和医大薬でも、1年時から基礎実習を始めており、その担当者として、当時を思い出しながら学生に薬学の面白さを伝えようと努めています。さらに、後輩の教育の一環になればとのこと、静薬学友会の高橋千恵子様が経営されているすばる薬局でアルバイトをさせていただき、免許を持つ前から、薬剤師という職業に接する機会を頂戴したことも貴重な経験でした。このような薬学に対する導きもあり、私は、在学当初より、薬学が薬学であるためのアイデンティティとは?医学に負けない薬学の強みとは?と疑問をもちながら学ぶことができました。現在も自問自答していますが、現状では、物質(医薬品、食品、化粧品、環境化学物質など)が、生体に投与/曝露された際の動態と応答を定量的に理解でき、することに強みを有していると考えてい

ます。その観点から、Drug Delivery System (DDS)という概念を知ったときには、薬学が果たすべき役割が大きく、本システムが完成したら、副作用がなくなると、胸を躍らせたことを覚えています。一方で、研究室配属は、くじ引きの悪戯もあって、DDSは研究できなかったものの、辻邦郎先生・糠谷東雄先生にご指導いただき、自ら見出した新規物質には名前をつけられると発破をかけられ、新規変異原物質の探索に情熱を注ぎました。結果は、単離・構造決定できたものの、変異原性のない外れ化合物でした。ただ、当時、伝えようとされていたことが年々重く理解できるようになっていきます。初めて学会発表の要旨を書いたとき、「なぜ、小説みたいな文章を書くのか?要旨は、科学的文章であって、自ら出した数字に自信がないから記載しないのか?」と批判を受け、当時は理解したようで理解していなかったと思います。このようなことが礎となっていて、現在、学生の指導にあたることでできています。もし、薬資に配属されていなければ?と考えると、アカ

デミアの道に進むこともなかっただろうと岐路の妙を感じます。また、大学院でDDSを学び、医薬基盤研究所で創薬標的の探索と抗体医薬の開発といった医療薬学の道を進みましたが、阪大薬に戻ってからは、衛生薬学領域の研究室で研究教育に従事しました。現在、病態解析学研究室という名称ながら、学内では衛生薬学の担当であり、回り回って、これから学生に、薬資の大先輩・若林敬二先生が発見された変異原物質「Jb1」を教えられることも妙で、縁を感じざるをえません。自らの希望という点では、叶っていませんが、その都度、様々な観点から薬学の面白さ・魅力をご教示いただき、私の薬学者としての礎になっています。和医大薬は、公立大学の薬学部で、本学とも共通点が多くございます。静岡県大の先生方やOB/OGからのご指導をもとに、新設の薬学部と共に私自身もさらに成長できるように努めて参る所存です。静薬学友会の皆様におかれましては、引き続き、ご指導ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。



大学生活を有意義に

REPOS(ルポ)／薬剤師・AEAJ認定アロマブレンドデザイナー

後藤 純

(平成28年卒)

卒業して6年が経過し、社会に出てもお大学生生活は非常に有意義な時間だったと感じており、この時間で得たものは今でも活かされている部分が多いため、ぜひ共有できたらと思います。

とにかく伝えたいことは、「大学生生活で好きなこと・やってみたいことに没頭すること」です。それは学業や研究、サークルやバイトなどなんでも構いません。これを伝えたい背景として、アカペラサークルに没頭したことで、

とある能力を身につけたからです。いざ始めてみると音量のバランスや発音・発声、リズムの取り方やアレンジした楽譜など全てが噛み合わないことと一体感のある楽しい音楽にならないことを痛感しました。メンバーが各課題に対して意見を出し合い、有名な海外グループや全国で有名なサークルの演奏を調査・解析したのちに、練習していくことでレベルアップしていったことを常に行いました。また、サーク

ル内での評価で慢心せず、多くの県外の審査制ライブにエントリーして、現在位置を把握するかつ参加することでのコネクションを作ること注力しました。この自己研鑽とグループでの取り組みを6年間繰り返したことで、最終的には最も積極的に取り組んだバンドでは50以上のライブに参加し、無名ながらも全国規模のコンテストに進出するなどがむしやらに取り組んだ時間は一生忘れないと思います。

この経験を踏まえ、「常に解析・分析から生まれた仮説から検証を回すP D C Aサイクルの実行力」を身につけました。この力は薬学に対する知識習得や研究にも必要であり、この活動があったからこそより探究心をもって薬学も深く学べたと感じています。就活でも「学生生活で注力したことは？」

という質問を必ず聞かれますが、これは自身で課題解決する力がある人材を必要としていることに紐づきます。何

かに没頭するだけで上手になる・解決したいなど突破すべき課題が生まれてくるはず。自由な時間を有効活用するべく、ぜひチャレンジしたいものはぜひトライしていきましょう。

卒業後は製薬メーカーの研究職↓薬剤師↓ベンチャー企業で事業開発と転職を重ね、薬剤師の存在価値に強く課題を感じ、ビジネスとして自身で動く力の習得を目的に動いていきました。特に、ベンチャー企業にてマーケティングやエンジニア、デザイナーなど医療とは遠い他職種のメンバーと出会い、一緒に仕事をしたことでより多方面の思考を身につけ、大きな財産となりました。この経験から職種関係なくエントリーできるインターンに参加し、少しでも多くの職種に触れることもぜひお勧めします。

現在では、さまざまな知見・経験を積み、県大で身につけた力と知識を掛け合わせ、「健康・薬の知識を持つて

いる薬剤師が薬とは違うもので健康を提供する」という目標を掲げ、フランスでは医療としても提供しているアロマセラピーに可能性をもち、体質や用途に合わせたオーダーメイドブレンドを提供する「REPOS」を展開しています。また、医療機関や歯科医院、薬局などの医療機関や介護施設など嗅覚でのイメージ改善目的にも活用して

いただいております。多くの種を蒔くことで花が咲く事業だと確信しており、P D C Aを回し、どうやったら効率よく展開でき、満足していただけるサービスを提供できるのか前を向いて進んでいこうと思います。薬剤師がより生活において身近な存在になるために、ポテンシャルを持つ人材が集まる県大から立ち上がるメンバーが増えることを強く願っています。

地区同窓会だより

静岡県地区

静岡県内の薬剤師を巡る近況について

代議員・地区同窓会代表 杉井邦好

(静岡県薬剤師会 専務理事)

(昭和55年卒)

新型コロナウイルス感染症への対応について
新型コロナウイルスワクチンについては4回
目の接種が始まっていますが、県内では
昨年の接種開始から令和4年5月まで
に延べ2万人の薬剤師が「ワクチン



予防接種研修会の様子



内田教授による講義

の調製・シリンジへの充填作業」、「予
診のサポート」に協力しています。こ
のような薬剤師の皆様が協力があつて
こそ、市町のワクチン接種が順調に行
われているものと思います。

また、静岡県内で経口治療薬等の調
剤に対応する薬局は、7月13日時点で、
ラゲブリオ対応薬局が899薬局、パ
キロピッドパック対応薬局が757薬
局あり、8月3日に静岡県内の陽性者
数がこれまでの最高の7,319人と
なる中、薬局の奮闘が続いています。

一日も早い新型コロナウイルス感染症
の終息を願うばかりです。

薬剤師のための予防接種研修会を実施！

薬剤師によるワクチンの接種につい
ては、「今後の接種の進捗状況を見つ
つ、必要に応じて検討」とされていま
す。

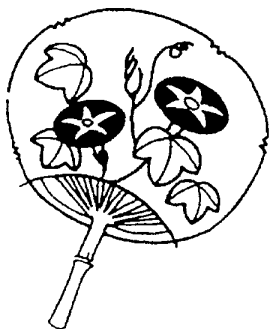
しかしながら、今後、社会的要請が
あつた場合にワクチン接種業務に対応
できるようにするため、静岡県薬剤師
会では、令和4年2月23日に静岡県立
大学薬学部との共催で「薬剤師のため
の予防接種研修会」を実施いたしまし
た。

当日は静岡県立大学薬学部の山田浩
教授、内田信也教授（H5学部卒）の
ご指導のもと、午前は座学（動画視
聴）、座学の確認テスト、午後は筋肉
注射シミュレーター「きんちゅうくん」
を使った実技で、計6時間近くの長時
間にわたるものでした。

安倍川花火大会が5年ぶりに開催！

安倍川花火大会は2018年と19年
は台風、20、21年は新型コロナの影響
で中止になっていましたが、今年は5
年ぶりに安倍川の河川敷を舞台に行わ
れました。花火は7月23日夜7時半か
ら打ち上げられ、およそ1万発の花火
が夏の夜空を彩りました。5年ぶりの
安倍川の花火を見て、多くの皆さんが

新型コロナの鎮静化の願いも込めて夜
空を彩る大輪を楽しんだのではないで
しょうか。



関東地区

地区同窓会のあり方を模索

代議員・地区同窓会代表 **本島 玲子**

(昭和58年卒)

関東地区の幹事会では、これからの2年間を「卒業生に役立つ地区同窓会活動とは何か」を考える期間にしようと思われ、意見交換を始めました。コロナ禍で、これまでのような、「総会・講演会・懇親会」の3点セットでのリアル開催が難しくなったことが契機になりました。一昨年はメール等でのやりとりで報告事項をまとめ、学友会のサイトと会報に内容を掲載しましたが、いまだ先行きの見えない状況の中、「従来の活動内容に縛られる必要はないのでは」との声が生まれました。Zoom などリモートでの活動手段が増え、例えば教育や講演は本部が担い、地区同窓会が協力するなど「本部と地区との役割分担が必要」との意見もあります。

現在は18人の幹事で運営しており、うち1名が学友会本部の理事、7名が代議員を務めているものの、県立大学の卒業生・修了生はわずか4名で他は薬科大学世代です。また、製薬企業出身者が多いことも特徴です。もう少し幅広い年代やバックグラウンドの構成でアイデアを出し合い、若手に引き継いでいくこと、「参加してちよつと

得をした気分になる」「その後の交流につながる」活動を行うことが課題です。

幹事の話を見ると、学年や教室(分野)によって、毎年泊まりでの同窓会がある学年等から、全く疎遠と言ってもいい学年等まで、卒業生どうしの交流の度合いもさまざまのようです。個人情報公開の公開には慎重を要する時代ですが、皆さまには少なくとも学友会のウェブ名簿に登録し、何らかの連絡手段がわかるようにしていただきますようお願い申し上げます。



東海地区

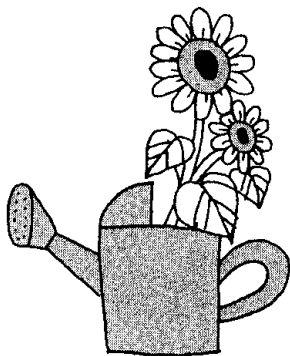
代議員・地区同窓会代表 **星野 有吾**

(平成13年卒)

静薬学友会員の皆様におかれましては、コロナの影響で様々にご苦労・ご活躍のことと思います。2022年6月19日(日曜日)に開催されました一般社団法人静薬学友会第5回定時総会にて代議員、また静薬学友会東海地区同窓会代表を仰せつかりました。今後4年間は他の代議員として松崎雅英、笠井智代、執行委員として前田徹を中心とした東海地区同窓会運営体制となります。これまで先輩方のご尽力で東海地区同窓会を大いに盛り上げていただきましたので、その意思を次世代に更に取り継いでいきたいと考えております。よろしくご指導ご鞭撻のほどお願いいたします。

この原稿を執筆時点で、感染の第7波が急速に拡大しており、収束の気配は全く感じられません。学術大会、研修会などZoom、Teamsなどリモートでの開催がされる中、現地に赴かなくても参加できる地理、時間的制約の無さという利点を感じつつも、実際にお会いする事で感じられる空気感は何事にもかえがたいと思えました。特に東海地区同窓会総会、薬剤師セミ

ナーは私が初めて参加させていただいた時にそのことを強く感じました。コロナの影響でここ2年間開催することができず、皆様と直接お会いする機会が無く寂しく思っております。地区同窓会の繋がり維持拡大、その意思を次世代に更に引き継いでいくという大きな課題に立ち向かうためにも収束を願うばかりです。次回の東海地区同窓会総会、薬剤師セミナーは未定ですが、開催されることになりましたら、是非ご参集いただきますようお願い申し上げます。その時には笑顔でお会いできることを楽しみにしつつ。日々の活動で感染に関する不安はあるとは思いますが、くれぐれもご自愛専一にてお過ごしくださいませ。



関西地区

代議員・地区同窓会代表 **松田 通明**

(平成29年卒)

静薬学友会員の皆様におかれましては、コロナ禍にあっても、お元気で活躍のこととお慶び申し上げます。また、平素は地区運営にご理解・ご協力を頂き、ありがとうございます。

はじめに、当地区の代議員についてご報告いたします。先日(第5回)の静薬学友会・定時総会にて代議員の任期満了に伴う改選が行われ、これまでの河本光宏さん(昭和57年卒)、松田に加え、新たに岩崎綾乃さん(平成4年卒)が務めさせて頂く事になりました。どうかよろしくお願いいたします。

当地区での活動については、新型コロナウイルス感染症の影響で一堂に会することが難しく、未だ対面での同窓会が開催できていない状況です。ただ、同窓生の皆様とのつながりをこれからも維持および発展させたく、Webを使った集会の実施などを考えています。なお、今後の地区活動の一助となればと考えますので、皆様のご連絡先(住所、email宛先)を学友会にご登録頂けましたら幸いです。どうかよろしくお願いいたします。

最後に、関西地区同窓生の皆様との連絡ツールの一つになればと考え、連

絡先(email)を記します。皆様のお声や連絡先情報などをお寄せいただければ幸いです。

連絡先：松田通明

E-mail: shizuyakukansai@gmail.com

(注: shizuyaku kansaiの間に、(ピリオド)が入っています)

なお、地区同窓会総会を来年度6月にオンライン形式で開催いたします。詳しくは、P53の案内をご覧ください。



中国地区

代議員・地区同窓会代表 **池田 潔**

(昭和54年卒)

静薬学友会会員の皆様には、益々ご健勝のこととお喜び申し上げます。

平素、支部会の運営にご協力頂き心より感謝申し上げます。

令和3年11月14日(日)、定例の中国地区同窓会総会(広島)を新型コロナウイルス感染症下の新たな試みとして、全国の地区同窓会に先駆けZoom形式で開催致しました。当日40名近い会員の皆様にZoomでご参加いただきました。

総会では、安倍道治会長(一般社団法人静薬学友会会長・昭和46年卒)による「静薬学友会の活動」、賀川義之薬学部長(静岡県立大学薬学部学部長・昭和58年卒)による「静岡県立大学の近況」が紹介されました。

講演会では、「新興ウイルス感染症と抗ウイルス薬」という演題で、鈴木隆先生(静岡県立大学薬学部生化学分野前教授・昭和54年卒)に新型コロナウイルスに関連してウイルスとは何か、インフルエンザウイルスやSARS-CoV-2の性状や感染機構、さらに抗ウイルス薬やワクチンについてご講演をいただきました。新型コロナウイルス禍、とてもタイムリーな講演で興味深く拝聴させていただきました。

今回Zoom開催を企画しましたが、利点は自宅から視聴できるので移動時間と経費を節約できること、反面、メール、インターネットに不慣れな方やネット環境が整わない会員への配慮が新たな課題となりました。さらに総会時の会員同士のリアルな交流が行えないことも残念でした。今後、対面とハイブリッドのお互いの利点を生かした併用が大事かと思えます。

現在、地区同窓会が抱える問題として、同窓会の認知度の向上、若手後継者への世代交代が近々の課題です。SNSを活用しながら同窓会の活動を知ってもらい、地元に根付いた志のある会員に加わってもらうことが地区同窓会の継続的発展のためには不可欠です。今回のZoom開催の試みが、新型コロナウイルス収束後を見据えた地区同窓会の参考になれば幸いです。

この度のZoom開催にあたり多大なご支援をいただいた安倍道治会長、賀川義之先生、講師の鈴木隆先生、そして本部および学友会事務局をはじめとした皆様に心より感謝申し上げます。今回の開催は、令和5年を予定しております。今回、ご参加いただけなかった支部会員の皆様には、是非、次回ご参加いただきますようお願い申し上げます。1日も早い新型コロナウイルスの収束と皆様のご健康を心より祈念しております。

九州・沖縄地区

地区同窓会幹事 橋本 治

(戸畑けんわ病院薬剤科)

(平成9年卒)

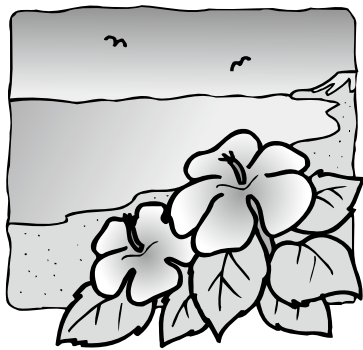
前回(平成元年10月)、地区同窓会
だよりの執筆の依頼を受けた際に、九
州支部同窓会を開く案内を記載しまし
た。

しかしながら、その年に開催するこ
とができないまま、翌年の1月16日に
日本初の新型コロナウイルス感染症が
確認され、この原稿を書いている現時
点では第7波の真っ只中です。

現在、北九州地区で病院勤務をして
いますが、この間コロナワクチンの調
製や、院内で新型コロナウイルス感染
症のクラスターが発生した際の治療薬
の手配、調製と日々の業務も一変して
います。地域の薬剤師が集まったの交
流(飲み会)や、学会での懇親会にも
全く参加できていない状況です。

このような状況下でもWEBでの研
修会や学会に参加し、薬剤師の活動発
表等を聴講すると自分もまだまだ頑張
らなければならぬと励みになります。
特に、トレーニングレポートを用いた、
シームレスな薬物療法が各地区での取
り組みが始まっており、患者中心、地
域中心の医療への取り組みにぜひ当院
でも取り組んでいきたいと考えていま

す。
新型コロナウイルス感染症が猛威を
振るっています。が、「やまない雨はな
い、明けない夜はない」との言葉を信
じ、落ち着いた際には、九州支部同窓
会を開催したいと思っています。九州
地区の皆様いましばらくお待ちくださ
い。



令和3年度薬学生涯研修講座報告

薬局認定制度と薬剤師の業務・資質向上に関する課題 - 連携薬局と薬剤師の卒後研修 -

主催/一般社団法人静薬学友会・静岡県立大学薬学部

2022年1月23日(日)令和3年度薬学生涯研修講座をオンラインにて開催しました。新型コロナウイルス感染症の流行状況から、急遽オンラインのみでの開催へと変更になりましたため、会場での受講を予定されていた皆様には、ご迷惑をお掛けいたしました。当日は、YouTube Liveでの配信となり100名以上の方に受講いただきました。



チャット 82

13:50 遠藤学 本日はご講演ありがとうございました。薬剤師の養成・資質向上に関連して、質問させていただきます。地域圏に追加300未満の病院薬剤師は過去10年と比較して増加してはいるが、いかに中小病院や精神科病院の薬剤師を育成し、資質向上を図るか今後の課題の一つであります。大学病院や大病院への診療報酬等での対応は進んでいますが、中小病院等へ薬剤師育成・資質向上への支援策等は、どのようにお考えでしょうか。

14:08 遠藤学 2つ目の質問です。電子処方箋は薬局⇒患者間だけではなく、現行のままで良いと考えが、無効の違う経営母体の薬局や、外来診療や入院等に医療機関間でアークをどう受け取るか、段階できるようにするかという点も薬学管理上、大きな課題と考えております。この点について、ご検討されていることがあれば、ご回答くださいますと幸いです。

チャットへようこそ！ご自身のプライバシーを守るとともに、YouTubeのコミュニティガイドラインを遵守することを思い出してください。

基調講演 薬局認定制度と薬剤師の養成及び資質向上に関する課題
厚生労働省医薬・生活衛生局総務課薬事企画官/
医薬情報室長 太田美紀 先生

一般講演 地域連携薬局の現状と課題
はやい薬局 永吉翼 先生 (平成12年卒)
専門医療機関連携薬局の現状と課題
すばる薬局 原山真理子 先生
薬剤師の卒後研修
静岡県立総合病院薬剤部 杉山理奈 先生

薬学生涯研修講座運営委員会 委員長 若林敬二

会員だより

薬学と私

中村芳正

(昭和46年卒)



静薬を同期に卒業した仲間とラインで楽しんでる。同期の安倍道治さんが静薬学友会会長に就任されたので、そのお祝いに同期として学友会報に投稿してはと提案があり、私に白羽の矢が立った。その理由は、今最も薬学から離れていて、時間がたっぷりある者がよいとのことらしい。人選ミスとは承知しているが、この機会に私の薬学との関わりを振り返ってみようと思う。

高校3年の時、どこの大学にいくのか以上どの学部に行くのがよいのか全く分からなかった。一応理科系ではあったが、多くの人が希望する工学部(特に電気、機械、土木)には全く興味がなく、将来大学に残って研究一筋あるいは高校の先生になるという理

部にも全く関心がなかった(自分の実力では端から無理と思っていたのかもしれないが)。悶々とした日々が続いたある秋の夜、風呂の中で何気なく薬学部が浮かんできた。風呂から出て、慌てていろいろな資料を調べ、薬学部は女性が多いため、男性用に製薬学科を増設している大学があることを知った(今ではこんなことはできないと思うが)。チャンスとは、女性に接するチャンスが多いという意味ではなく、社会に出る時男性としての存在感が高いだろうという意味である。あとは大学の選定であった。当時の静岡薬科大学は県立で、受験日程が国立一前期と二期校の間であり、受験しやすかった。そのためもあり倍率も20倍を超えていたように思う。同じように岐阜薬科大学もあったが、海が見えるという理由で静薬を選んだ。

運よく大学に入学することができ、気の合う友人もでき(今のライン仲間も含め)、クラブも中学時代に経験したバドミントン部で汗を流すことになった。4年になるときに教室を選ぶ際も、迷いなく自治会活動中に面識ができた薬剤学教室(当時)の村田敏郎先生の指導を受けることにした。修士課程に進むことは決めていたが、その先の進路は白紙であった。薬研部にも所属していたため、医薬分業にも関心があり、病院の薬剤部にも興味があっ

た。村田先生にお願いして、冬休みに国立名古屋病院の薬剤部に研修生として参加させていただいた。当時国立名古屋病院は薬剤師が薬局内だけにいるのではなく、病棟薬剤師として、病棟に積極的に出て行くことを進めていた先進的な病院であった。しかし私にとっては、やはり薬局内での日常的な業務に忙殺されているようにみえた。

結局、親の勧め(出身の香川県に近いという理由)もあり、四国にある製薬企業に勤めることになった。会社では、研究所、工場、品質管理部に所属し、知識として薬学部を出たことは大いに役立ったが、薬剤師免許は全く必要としなかった。ところが平成16年頃薬事法を大幅に変更し、医薬品の製造販売業という新しい概念を導入し、医薬品の品質と安全性に関する全責任を薬剤師である総括製造販売責任者に持たせることになった。当時私が品質保証を担当していたことや薬剤師であることのため、私とその任に当たることになった。この時初めて薬剤師免許証が必要となり、会社に置くことになった。私が薬剤師免許を使ったのはこの時だけであった。

会社を離れてからは、薬とは関係のない生活をするはずであった。ところが61歳の時、突然ネフローゼという病気に襲われた。尿たんぱく++で、腎生検の結果、微小変化型ネフローゼと診断され、即入院し、ステロイドの大量投与が続いた。幸いステロイドによく反応し、割と早く尿タンパクがマインナスになった。約3カ月の入院後、今までどんなに減量しようとしてもできなかつたのに、10kg以上痩せること

になった(筋肉がげっそり落ちる)。ステロイドを減量して最終的に0にすると2回再発した。医者からは、ステロイドをずっと飲まないといけないタイプですね、と言われた。これからもステロイドとともに生きて行こうと覚悟を決めている。ステロイドを発見し、この世に供給し続けてくれていた方々には本当に感謝している。学生時代、会社時代以上に、薬のありがたみを感じている。

今、お菓子作りにはまっている。小豆カステラに始まり、マドレーヌ、パウンドケーキ、マフィン、ガトーショコラ、チョコレートケーキ等。最近は何れも簡単に入手できるので、自分の好みのお菓子作りに挑戦できる。材料をきちんと量り、混ぜ合わせ、反応させる工程は、まさに薬学の実習で習った工程である。意外なところで、薬学が自分の人生を豊かにしてくれている。お菓子作りの工程ではいろいろな道具や器具を使用するが、私は自然に、洗浄して乾燥し、元あったところに戻す習慣があり、家人からも喜ばれている。教室で相本先生から、実験に使った道具や器具を洗って、乾燥させ、元の場所に戻すまでできて初めて終わったといえると厳しく指導されたためと思っている。これも静薬で学んだことであり、感謝している。

現在コロナ禍で中断しているが、46年卒は同期会を2年に1回、静岡県又は東京で開催している。後期高齢者になる前に一度集いあって、コロナ禍のことも含めておしゃべりしたいものである。その時は徳島から駆けつけようと思う。

大学だより

新任教授

この世にないものを生み出したい

医薬品製造化学分野 教授 滝田 良



この度、2022年7月1日付けで医薬品製造化学分野教授を拝命いたしました滝田良と申します。この場をお借りして自己紹介ならびにご挨拶を申し上げます。

わたしはいわゆる転勤族のサラリーマンの家庭に生まれました。札幌で生まれましたが記憶にはなく、少年期に最も印象にあるのは主に中学と高校（宮城県仙台第二高等学校）を過ごした仙台です。仙台へ移る際には転校

を経験し、新しい環境へのワクワクとともに、自身で初めて人見知りを実感しました。

東京大学入学後は薬学部へ進学しました。学部3年生の学生実習では、菅敏幸先生や真鍋敬先生にお世話になりました。4年生で配属になりました柴崎正勝先生の研究室では厳しいD2の先輩として濱島義隆先生が、隣の研究室にはスラッとしたバリバリの竹内英之先生がいらっしゃいました。こうしたご縁は、当時のほんとは過ぎていたわたしには微塵も想像し得ず、大変引き締まる思いです。

研究の専門は端的には「有機化学」です。研究生活においては、転勤族の血なのか、比較的多くの研究室・場所・分野を経験してまいりました。学生時代の東大薬・柴崎正勝先生の研究室では「反応開発」を中心とする触媒

的不斉反応の研究にて自身の礎を叩き込んでいただきました。その後、機能性分子の科学でトップランナーであるマサチューセッツ工科大学の Swager 教授の研究室にポスドクとして留学しました。「分子の機能」を主眼として、アクチュエータを志向した酸化還元によって構造変化を伴う分子の設計を行いました。

初めて助教として採用いただいた京都大学化学研究所附属元素科学国際研究センターでは、「遷移金属錯体化学」の分野に挑みました。これまでの経験を基に、ポリマーとして非常に大事なポリチオフェンを効率的に合成可能な直接的重合反応を開発しました。遷移金属元素をはじめとして「元素化学」を意識し始めた経験でした。

その後、東大薬や理化学研究所では、実験化学に加えて「計算化学」も取り入れて、さらに幅を広げた展開を目指しました。例えば、炭素原子一つ、ホウ素原子十一個からなるカルボランアニオンというクラスター分子のクロスカップリング反応を開発することで、イオン液晶などの分子機能を生み出すとともに、 σ - π 共役」という新たな物性の発見に至りました。

その後、2018年からは東大薬にてワンストップ創薬共用ファシリテイセンターという共用施設を担当しました。ここでは、センター長の村田茂穂先生や当時研究科長の一條秀憲先生をはじめとする薬学系各分野の皆さまか

らご指導をいただき、センターの運営を行いました。そのことは自身の研究にとっても、幅を広げる良い影響があったと考えています。例えば、学部からの同期である帝京大学濱弘太郎先生との共同研究で、長鎖脂肪酸の位置および数選択的な重水素化プロセスを開発しました。これを用いることで着目するリン脂質の網羅的解析が可能となり、生体内で代謝された酸化リン脂質の合成に関わるアシルトランスフェラーゼの同定を行いました。

「有機化学」と一言で言っても、実に広い化学（科学）から成り、もっともっと展開してきたいという野望を秘めています。わたし自身は有機化学の最大の魅力として「この世にないものを生み出せる」ことだと考えます。この静岡の地から、清々しい学生さんたちと楽しみながら、この世にない分子機能・物性・反応性を生み出し、ひいては健康長寿や人々の幸せにさまざまな貢献ができるよう取り組む所存です。皆さまのご指導を賜いましたら幸甚に存じます。

自身にとっては初めての静岡の地へ「転校」してまいりまして、新たな環境へのワクワクとともに少しの人見知りもごさいます。きっとコロナ禍はもうすぐ開けて新しい世界が始まると期待しながら、皆さまから研究のみならず色々な面でお気軽にお声がけいただければ大変嬉しく存じます。

新任挨拶

母校である静岡県立大学での新たなスタート

実践薬学分野 講師 三浦基靖

(平成24年卒)



令和四年四月一日付で薬学部実践薬学分野の講師に就任いたしました三浦基靖と申します。静岡学友会の皆様にはこの場を借りてご挨拶申し上げます。私は薬学部6年制の一期生として静岡県立大学薬学部に入りました。学部4年次より現所属先である実践薬学分野へ配属が決まり、CYP活性評価に着目した研究を行いました。その後浜松医科大学医学部附属病院薬剤部で薬剤師業務に従事しながら、調剤に関する薬剤師業務研究や集中治療患者を対象とした鎮静剤の血中濃度と臨床効果や有害作用の関連評価などの研究を行ってきました。さらに社会人大学院生として母校である静岡県立大学大学院博士課程において、並木徳之教授と内田信也教授の指導のもとCYPプローブ薬を用いたCYP活性及び薬物相互作用評価における臨床試験法に関

する研究を行いました。臨床現場のクリニカルケスタチオンの一つに薬効や副作用の個人差があります。私が行ってきた臨床試験を応用し、薬効・副作用の個人差要因及び相互作用の解明につなげていきたいと考えています。さらにグミ製剤や口腔内崩壊錠など製剤に関連した研究においても、臨床経験を生かし実施していきたいと思っております。個々の患者さんに合わせた最適な薬物治療実現に貢献していきたいと考えています。

また教育活動を通じて、学生が問題を自身で意識し、常に自分で考えることができる能力を身に付ける手助けをしていきたいと考えています。私が臨床で得た経験、患者さんや医療スタッフから学んだ事を伝え、自ら考え行動できる学生教育に貢献したいと思っております。また私自身も学生から信頼されるよう努めていきたいと思っております。

慣れないことも多く至らない点もあるかと思いますが、静岡県立大学薬学部、静岡学友会の益々の発展に貢献できるよう精進していく所存であります。皆様のご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

新任教員として

生体機能分子分析学分野 助教 古庄 仰



令和4年4月1日付で生体機能分子分析学分野に助教として着任いたしました古庄仰と申します。歴史と伝統のある静岡県立大学で教育、研究に携わる機会を与えていただき、大変光栄でございます。静薬学友会の諸先生方ならびに会員の皆様にはこの場をお借りしてご挨拶申し上げます。

私は地元である熊本の高校を卒業後、九州大学薬学部に進学して修士、博士号を取得しました。生まれてからずっと九州でしたので、知り合いのいない静岡の地に赴任することに不安を抱いておりましたが、先生方や学生に温かく受け入れていただき、充実した日々を過ごしております。静岡は温暖で自然が豊かであり、九州と味の違いを感じることもありますが、お茶や海の幸など美味しいものも沢山で、大変気に入っております。

大学在学中は、アミノ酸のキララ識

別定量を志向した精密分析法開発に取り組み、腎疾患の新規バイオマーカー探索を行ってきました。また、はやぶさ2プロジェクトに参加させていただき、小惑星リュウグウから採取した試料のアミノ酸分析を担当いたしました。こちらに着任してからもアミノ酸分析に関する研究に取り組んでおります。

分析化学は薬学のみならず幅広い医療領域で根幹をなす分野であり、分析技術の進歩が医療の発展に繋がると考えています。新たな分析法の開発や活用を通して患者さんや社会に利益を還元できるような努めてまいります。

大学教員としては駆け出しの未熟者で、日々教育の難しさを痛感しております。コロナ禍ではありますが、日頃から学生とのコミュニケーションを重視しています。対話の中で研究の楽しさを伝えると共に、学生の論理的思考力や問題解決能力を育み、社会に貢献し活躍する薬剤師・研究者の育成に精進する所存です。

至らぬ点も多々あるかと存じますが、静薬学友会の皆様にはご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

新任挨拶

草薙の夜の帳に包まれて

統合生理学分野 助教 村上 光



令和4年4月1日付で薬学部統合生理学分野助教として着任いたしました。村上光(あきら)と申します。静薬学友会の皆様におかれましては、この場をお借りしてご挨拶申し上げます。夜、薬学部棟を出て正門へ向かう際、清々しい空気の匂い、草薙の景色を全身で感じる度、赴任時の初心を忘れぬようにと決意する日々でございます。

私は、愛知県名古屋市中にて生まれ育ち、愛知県立旭丘高校(高校野球に没頭)を卒業後、京都大学工学部工業化学科に入学しました。大学時代は、幅広く化学を学ぶ中で、生化学に出会いました。これを契機に、生命現象を分子の言葉で記述することに憧れるようになり、大学院進学時には細胞生物学的の世界に飛び込みました。配属された研究室(同大学大学院工学研究科生

体認識化学分野)では恩師である梅田眞郷教授(現・京大名誉教授)から、研究に関する指導を受けるだけでなく、研究者として生きるための心構えを学ばせていただきました。学位取得後は、生命現象を詳細に観察する最先端の技術を学ぶため、東京大学大学院薬学系研究科 生体分析化学教室(船津高志教授)にて博士研究員として生物物理学に関する研鑽を積みました。これらの経験、また、その過程でお世話になった方々への感謝を胸に、静岡県立大学での教育・研究に邁進いたします。

これまでの研究では、生物の「環境温度への適応」に関する分子メカニズムの解明に取り組み、個々の細胞がエネルギー代謝を変化させることで自らの温度を調節することを明らかにして参りました。今後はこの知見から体温やエネルギー代謝に関わる疾患を理解し、さらにそれらに対する治療法を開発することで、静岡県立大学の目指す「健康長寿」に貢献する所存です。ご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

新任のご挨拶

分子病態学分野 助教 浜辺 俊秀



2022年4月より薬学部分子病態学分野 助教に着任いたしました。浜辺俊秀と申します。静岡市で生まれ育った身として、伝統ある静岡県立大学薬学部で研究・教育に携わる機会を頂けたことを大変嬉しく感じるとともに、より一層精進しなければならぬと感じております。

研究の道に進むきっかけとなったのは学部3年次の研究室選びでした。大静岡大学教育学部へ入学しました。しかし、教育実習後の研究室配属で分子生物学分野を選択したことで科学・研究の魅力を知ってしまい、そこから大きく方向転換し、研究者を志すことを決め、現在に至ります。

これまでの研究について簡単に紹介させていただきます。博士課程までは「個体が正しく機能するための形作り」に興味を持ち、発生システムの解明、

そのための技術開発をおこなってまいりました。特に金沢大学 医薬保健学総合研究科 博士後期課程では、河崎洋志教授のご指導の下、哺乳動物の大脳皮質の発生と進化について研究をしてきました。個体が正しく機能するための形作りについて研究を続ける中で、機能を失う際の形の変化にも興味を持ちました。そして、現在は発生システムの破綻による疾患の発症メカニズムを解明したいと考えています。所属する分子病態学分野では心不全発症の分子機構の解明と新規治療薬候補の探索をテーマに新たに研究をスタートさせています。

教員としてまだまだ日が浅く、何分未熟ですが、私が恩師の先生方から研究の楽しさを魅せられたように、薬学部の学生にも科学・研究の楽しさを伝え、新しい発見ができたときの喜びを共有したいと考えております。そして、共に研究を進めることで、学生が卒業後も様々な場所で活躍できるように、教育と研究に精進して参ります。静薬学友会の皆様方には、今後ともどうぞご指導ご鞭撻賜りますようお願い申し上げます。

退職に際して



在職17年間を振り返る

医薬品情報解析学分野 教授 山田 浩



今年2022（令和4）年3月に定年を迎えるにあたり執筆の機会をいただきましたので、研究室で歩んできた17年間を振り返ってみたいと思います。私が本学部に赴任した2005（平成17）年は薬学教育の大きな変革期であり、4年制のみの教育から（薬剤師養成のため臨床の実務実習に重きを置く）6年制教育が翌年から導入される激動の時期でありました。当研究室はその様な時期に、賀川義之教授が率い

る臨床薬剤学分野と伊藤邦彦教授が率いる臨床薬効解析学分野と共に、臨床系の3講座として誕生しました。新設の研究室だったため、講師の大門貴志先生（現 兵庫医科大学教授）と手探り状態で教育・研究に着手していったことを今では懐かしく思い出します。赴任当時の社会情勢を振り返りますと、1997（平成9）年の新GCP制定により我が国では、新薬開発における臨床試験（治験）を国際的レベルに引き上げるための様々な施策が始まった時期でもありました。静岡県も地方自治体ではいち早く2003（平成15）年からファルマバレー構想を立ち上げ、ファルマバレーセンターを中核とした静岡県治験ネットワークの推進を始めました。本学も治験を含め臨

床研究を担う人材の教育や養成に貢献すべく、当研究室がコーディネーターを勤め社会人に門戸を広げた大学院特論「CRC/CRA養成講座・創薬育薬基礎・応用特論」を毎年開講することになりました（今年度で19回目となります）。特論を開始した当初は静岡県理事の土居弘幸先生に開講のご挨拶をいただくなど、静岡県の強いご支援があったことを記憶しております。最近3年間は、新型コロナウイルス感染症の流行拡大の影響で社会人聴講生の募集が中止となつてしまい、残念に思っております。

研究室の学部生と大学院生においては、この17年間、多くのOB・OGを輩出し、病院・薬局を始め、製薬会社の統計解析・データマネジメント部門、行政機関等で幅広く活躍しています。最近、コロナ禍で人の交流が極端に減っておりますが、その様な折ふと研究室に顔を出し近況を語ってくれるOB・OGもいて、社会の中で元気に活躍している姿を聞くのは大変嬉しい限りです。研究面においては、静岡県立総合病院ほか、白十字会など多くの医療福祉機関との連携で多施設共同研究、企業

との共同研究等を実施してきました。特に緑茶の飲用やうがいによるインフルエンザ予防や認知機能への影響を検討した臨床研究は、中日新聞の第1面やNHKの「おはよう日本」などマスコミでも大きく取り上げられてきました。在職中、学会の開催も行わせていただきました。全国規模の学会では、第13回日本医薬品情報学会総会・学術大会の大会長を聖隷浜松病院薬剤部長の大貫よし子先生の実行委員長の下で、2010（平成22）年に開催させていただきました。この時に特別講演でお招きした先生は、現在コロナ禍の中、政府の新型コロナウイルス感染症対策専門家会議で国民の多くの方がご存知の尾身茂先生でした。また、2019（令和元）年には、第4回日本臨床薬理学会東海・北陸地方会の大会長を務めさせていただきました。

今から思えばあつと言う間に過ぎた17年間でしたが、本学部の発展に少しでも貢献できていれば幸いに思います。本年4月からは微力ながら特任教授として、教育・研究に携わらせていただきます。今後とも、どうぞよろしくご支援お願い申し上げます。

「菅敏幸先生を偲んで」
花になるより根になろう

菅敏幸教授の突然の逝去を悼んで



菅 敏 幸 先生

薬学部長

賀 川 義 之

(昭和58年卒)

令和3年7月26日月曜日、出勤前に濱島教授から自宅で電話を受けた私は当初、「学生」に何かの重大な問題や事件が起きたのかと推測した。まさか、現役の教員が突然亡くなるとは想いも及ばなかった。「菅先生が昨土曜夜に亡くなられた」と聞いて混乱した。

菅敏幸先生と私は2005年4月に本学に赴任した同期である。上足洗と東鷹匠の教員宿舎でも一時期一緒に過ごしていた。当時中学1年生の次女は登校する時に菅先生と

宿舎の玄関で会うと、「おはよう！」と大きな声で挨拶をしてもらっていた。一足先に私が東鷹匠宿舎に移ると、次女が寂しがった。理由を聞く、「(東鷹匠宿舎には)菅先生がいない」ということだった。朝、菅先生に挨拶をしてみると、転校直後で友人が少なく気持ちが落ち込む中、登校する元気をもらっていたそうだ。菅先生の放つ「元気の素」は、こんな風にも他者に好影響を与えていた。

菅先生には、仕事面でも色々とお世話になった。菅先生の医薬品製造化学研究室は、学外からの大学院志望者が多い研究室であり、菅先生の幅広い研究活動が他大学の学生にも浸透し、本学大学院受験へのモチ

ベーションに繋がっていた。静岡市のスーパーサイエンス・ハイスクールのサイエンスアドバイザーとして、高校生に科学の面白さを伝える活動に積極的に取り組んでいただいた。また、研究活動でストレスを感じている学生の駆込みみ存在でもあった。メンタルに疲れた学生の受け入れを菅先生にお願いすると、二つ返事で「いいよ」と言ってくれて、その後も温かい環境で親身になって指導され、学生の快復を支援していただいた。大学運営に関して、菅先生は全学の広報委員長等を務められ、薬学部で恐らく他学部の教員や事務職員に最も顔の知られた教員であり、薬学部の顔役的人物であった。谷田キャンパスから「草薙キャンパス」への名称変更において、消極的な大学当局に対して時には激しく迫るなど、広報委員長として主導的役割を果たされた。

考えてみれば、不思議なもので、菅先生は理学部出身の化学者、一方の私は病院薬剤師出身の実務家教員。コテコテの基礎研究者と実務家という間柄であったが、妙にうまが合った。うまが合ったのか、菅先生が私に合わせてくれたのかはわからないが、私としては菅先生との会話は心地よいものであった。菅先生の言葉には嫌みがないので、反発心の強い私でも素直に助言を受け入れることができた。薬剤師養成教育にも積極的に取り組んでいただき、実習施設の訪問先の薬剤師さんともすぐに打ち解けて仲良くなっているのも印象的であった。菅先生の研究業績や社会貢献、またバイタリティからも教授会メンバーの誰もが次の薬学部を背負う人物であると認識しており、菅先生の突然のご逝去は個人的にも非常に残念であり、その損失は有機化学領域や大学運営面に留まらず甚大である。

本年7月16日には、濱島教授や医薬品合成化学分野の教員のご尽力に加え、有機合成化学協会の協賛を得て、菅敏幸教授追悼シンポジウムが本学で開催された。新型コロナウイルス感染症蔓延下であったため、現地とオンラインのハイブリッド開催であったが、会場となった本学大講堂にはたくさんの方々が来ていただいた。このことも菅先生の遺影に接したいという強い思いを持った友人・知人・門下生の多さを示すものであった。

菅敏幸先生の突然の逝去を悔やむと共に、謹んでご冥福をお祈りします。

菅敏幸先生のご逝去を悼んで

静岡県立大学 名誉教授 野口博司

既に有機合成協会誌に追悼特集が編まれ、福山透先生の「折角助教にしてこき使おうと思っていたら、

静岡からのお声掛かりで去ってしまった。」と篤情溢れる追悼文を始め、人となりや意義ある御仕事まで網羅されております。

京大化研からお招きした先任の田中圭先生、満開の桜を看護学部への渡り廊下から眺めて「あく惚けますなあ」と一言。しかし同時に赴任された佐藤雅之先生と薬化・製造化学両講座協力して一冊の教科書を「あげる」という（一見当たり前な）教育体制の実現に立会った世代として一筆。

田中圭先生の急逝をうけて、さあどうしようとなったとき、「福山先生のところの良いのがある」と薦められました。教授選考は公募ですので、蓋を開けてみないと分かりません。今となつては時効ですが、彼の

応募書類、3回は直しました。彼の凄みは、翌晩修正版の来ることで、そんな人、実は滅多にいません。

さて選考は進んで、もの静かで年長の候補者とどちらに講座をお任せするか議論となりました。特に若く、元気の良さそうな菅先生では年長のスタッフ等とぶつかるだろうから避けた方がと言う意見が多い中、奥直人先生の含蓄ある御発言と、当時の学部長辻邦郎先生のお声掛かりで菅先生に流れができたように記憶しています。

面接で忘れられないことがふたつ。彼は、分子について何を教えるべきかと問われ「構造、機能、物性」と応じ、競争相手は「構造式、機能、物性」と答えました。些細なようですが、これを伝え聞いた京大の某先生が「嗚呼薬学の教育は理学に負け」と慨嘆されました。彼は理学部出身で相手は薬学。もう一つ、彼は

「いいですか。一番大変なのは沢山のサンプルを秤量してサンプル瓶に詰めることです。これを学生さんに懇願してやって貰わなければなりません。」と。当たり前前にみえることがどんなに大変で、それを自分が背負い込んでも「いけない」と腹に据えていると感心させられました。

研究には後輩の教員・部下から学生までこき使った筈ですが、パワーハラの話は聞いていません。彼が学生の「こころ」にどんなに鋭敏だったかということ。就職させた企業から「おまえの学生、反応知らないじゃないか」と言われれば血相を変え合成を体で覚えてもらおうと必死で尽力していました。もう一つ、後年、山中伸弥先生の講演が静岡グラウンシップで決まったものの県大の学生の多くが参加できないことが分かって彼は激怒し、渋る事務を押しに押し、薬学講座として大講堂における同時中継に漕ぎつけました。学生の気持ちを高めるためにはできる限り力を尽す、これは一貫されてきました。

講座の主として、彼は先ず先任教

授のやり残しを完成させ（浅川君が触れています）、標識化合物の供給、お茶やミカン果皮のポリフェノールを合成等学部内に、そして磯自慢の新規麴を使った発酵茶の研究、静大の河岸洋和先生との三員環化学の展開にと、学部から地域へ共同研究の輪を次々広げられていました。

様々な学内用務の折りには発酵茶を煎れて大きなヤカンに運んできて皆に振る舞って下さいました。ちなみに小生の出ない委員会では「お菓子あるんだろう」と小生の教授室に立ち寄って、「よく用意してあるよな」と言いながら、ヤカン片手に駄菓子を持って行かれました。

東鷹匠の官舎の近所に自宅を構えて、基本自転車通勤でしたが、折々夜が更けると、「乗せていって下さいよ」とリュック姿で現れ、小生の車に便乗してお喋りしながら帰ったものです。

菅先生の教育と研究は伝統ある静薬の名にはじめぬもので、今後さらに輝くものと信じておりましたのに、ただただ早すぎたとしか申せません。ご冥福をお祈りするばかりです。

教育者菅敏幸先生を偲んで

医薬品製造化学分野 准教授 吉村文彦

菅先生のご逝去の知らせを受けた時、わが耳を疑いました。この世を去られる前日まで元気にディスカッションして頂き、先生の大きな声と私には、まさに晴天の霹靂の出来事でした。

私が菅先生と初めてお会いしたのは、1996年7月に伊王島で開催された天然物談話会（＝若手の勉強会）の時でした（奇遇にも後に菅研のスタッフとなる脇本敏幸先生ともこの時知り合いました）。それ以来、一見強面でありながら（当時の姿）、学会など折に触れて気さくに話しかけてくださり、ご助言を頂きました。そして2017年5月に菅研究室の准教授として着任させて頂くことになり、教員としての立場で菅先生から多くの貴重なご指導を頂くことができました。

菅先生は、含窒素天然有機化合物や食品有効成分の全合成（化学合成）、第二級アミンの合成法の開発（いわゆるノシルストラテジー）で

著名な研究者です。菅研の教員として過ごした4年の間で、私は先生から厳しい研究者の姿はもちろんのこと、先生の教育観と教育者としての素晴らしさを学ぶことができました。

菅先生は研究室に配属された学生一人一人の気質・性格を細かく把握されていて、個々に合ったご指導をされていきました。また、気さくな人柄で学生たちと研究の話から日常の出来事まで常にコミュニケーションを取っておられました。先生の人柄に触れて研究室を巣立っていった学生は、100名を大きく超えます。学生への研究指導に関しては、一人の研究者としての自主性を尊重し、細かな指示を出さず、本人に考えさせるというものでした。一方で、その研究が行き詰まった時には、的確な助言により解決の緒を与えられていました。研究を進めていく過程で、指示待ちではなく社会で活躍する上で重要な「主体性」を教授されていたのだと思います。卒業論文や修士・博士論文の作成と発表はもちろ

んのこと、学生の就職活動に関しても丁寧な指導をされていきました。

常々「県大の学生は、最初はイマイチでも卒業間近に大きく化け必ず成長する。真心をこめて教育しなさい。」とご指導頂きました。菅先生から学んだ教育観は私の大きな宝となつていきます。

研究室では毎週朝8時から1時間ほど、人名反応に関する英語の教科書を輪読する勉強会が行われていました。さらに、金曜日の夕方には勉強会「天然物全合成道場」を開催して（コロナ禍ではオンライン開催）、学生の有機合成力を鍛えていました。この道場は、学生にホワイトボードに解答を書かせ説明させる、いわゆるチョークトーク形式で行われました。緊張感を持ちつつも楽しく勉強会を運営され、有機合成の総合的な実力を必要とする天然物合成のイロハから研究の背景・裏話まで分かり易く解説されました。上級学年になり実力がつき問題の解答や反応機構をスラスラ書ける学生を見ると、褒めて喜ばれていました。この道場の評判は高く、アメリカ化学会有機化学部門のHPでも紹介されました。これらの勉強会で生き活きと楽しく有機合成化学を教える菅先生の姿が

思い出されます。

菅先生の根底にあったのは、父親のような優しさと献身的な愛情だったと思います。忙しいときも常に学生のことを考えておられ、事故など学生に何かがあれば自ら飛んで行かれ手助けされていました。また、人間関係がうまく行かず居場所のない他研究室の学生も率先して引き受け、研究室の一員として教育されました。先生は大学時代、ラグーマンとしても活躍され、「花となるより根となる」をモットーとされていました。そして、研究室においても日常においても、個人が他人のためになるよう自覚をもち行動することを望まれ、集団としての和を乱す自分勝手な行為をする学生を真剣に叱っていらつしゃいました。しかし、しばらく時間が経つと明るい会話で笑わせ、精神的にもしつかりフォローされる優しい先生でした。

私は菅先生に出会い、先生から多くのことを学びました。本学で一緒に教育・研究を遂行する機会が得られたことは、大きな財産になります。菅敏幸先生、本当にありがとうございます。先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。



お花見
2019. 04. 01.



学位記伝達式
2019. 03. 20.



菅敏幸先生のご逝去を悼んで

医薬品創製化学分野 教授 濱島義隆

突然の訃報からから1年を迎えようとする本年7月16日、菅敏幸先生の追悼シンポジウムが開催されました。先生のご活躍を顧みれば、本シンポジウムを学部として企画するに至ったのは当然のことでした。吉村准教授をはじめとする医薬品製造化学分野の先生のご尽力により盛会となりましたが、これは先生のご遺徳の大きさの表れと思います。大学時代の同窓生、かつての上司、共同研究者、卒業生の皆様に先生の人生を辿る形で研究とエピソードを紹介していただき、改めて先生の大きさを振り返ることができました。

菅先生は1964年、北海道釧路市にお生まれになり、北海道大学においてラグビーと有機合成化学に出会われました。お通夜には多くの用電が寄せられましたが、ラグビー仲間が多かったことは印象的で、生涯にわたるご友人が幅広くおられたと推察されます。研究においては、ノシル化学と呼ばれるアミン合成法の開発と含窒素天然物の合成研究においてすぐれた業績をあげられ、2005年に本学教授に就任されました。静岡では地の利を生かしてお茶やみかんに含まれるポリフェノール類の研究を開始され、またカイノイドやフェアリー化合物の研究（静大 河岸先生との共同研究）を展開され、顕著な成果をあげられました。

菅さんと私の出会いは、1996年の春でした。菅さんは東大薬学部の助手として福山透先生の研究室に着任されたばかりで、私は隣の研究室の4年生でした。いつも風呂あがりのようなTシャツと短パン姿だったので最初はちよつと警戒していましたが、親分肌で面倒見のよい先生だとすぐにわかりました。学部の垣根を超えた交流も盛んで、楽しくて激しい呑み会に何度となく加えていただきました。就職後も会う度に激励していただき、仙台のバーで明け方まで呑んだ際には「相談する相手が違うだろう」と笑いながら私の結婚を後押ししてもらったこともありました。そんなこともあってか、准教授として菅研究室に加わることになったのが2010年でした。私は菅研の研究の中から新しいテーマを設定することができ、また菅さんの希望もあってポリフェノール類やカイノイドの研究に取り組みました。現在助教の大内さんとともに菅さんのライフワークであったカイノイドをグラムスケールで合成したところ、大変喜んで頂きました。また、人に関心の強い方で、一度話したら顔と名前をよく覚えておられたところは身近で見えていて特殊能力だと感じてしまいました。教育熱心な方でもあり、勉強会の代役を一度断ったときはえらくご機嫌を損ねてしまい、冷や汗をかいたことは苦しい思い出です。当時の薬造の学生はなかなかタフで、菅さんの無茶振りを真正面から受け止めていたので、心身ともに鍛えられたと思います。在籍したの

はわずか3年でしたが、濃密な菅研生活を過ごさせていただきました。研究室を主宰して今年で10年目を迎えました。研究室をやってこられたのは、菅さんのご支援とともに菅研在籍時に学んだことが活かされているからだと思っています。

菅先生は豪快な方でしたが、一方で周囲への気遣いを忘れない魅力的な先生で、16年の在任中に34名の学士、89名の修士、18名の博士を育成されました。学内にとどまらず、全国的に活躍される菅先生の存在はとても大きく、すべての教員の牽引役でした。菅先生は常々ご自身の研究教育について、地味かもしれないが、不可欠であるという意味で「花になるより根になる」と表現されていました。その精神は多くの人に引き継がれ、必ず結実すると信じています。大きな柱を失いましたが、菅先生のレガシーを大事にしつつ歩みを進めていくことをお約束したいと思います。本学における16年間の奉職、お疲れ様でした。そして、公私両面でお世話になり本当にありがとうございました。

菅先生を偲んで

東海大学海洋学部 准教授 浅川倫宏
(平成14年卒)

菅先生が静岡県立大学薬学部 医薬品製造化学教室(通称・薬造)に着任なさって以来、筆者は博士課程の学生、その後スタッフとして研究をお側でさせていただきました。菅先生のご逝去から一年が経過し、ますますその存在の大きさに気付かされる毎日ですが、本会報に於きまして静岡県立大学での活動を紹介させていただきます。

2005年4月より、菅先生が医薬品製造化学教室に教授として着任されました。当時20名ほどの学生が研究室に所属していましたが、前任の田中圭教授が急逝された直後で、全員が意気消沈していた最中でのスタートでした。私は当時、博士後期課程の二年目で最上級生として研究室におり、菅先生もこれからの運営の助力として期待されていたかもしれません。しかしながらそのような

期待とは裏腹に、私は一番手のかかる存在でした。優秀な後輩は放っておいても成長していきますが、私は二人三脚で並走しないとすぐにへばってしまう軟弱者ですから、一日中付きつきりて実験をご指導いただきました。毎度々々ため息をつきながらも、私の手にあるフラスコやビベットを奪い取り、大きく無骨な手からは想像できない繊細な操作、ドバドバと100グラムスケール合成の豪胆な手技を披露いただき、「わっはっは、しっかいせいー(バシッ)」と背中を叩いて鼓舞してくださいました。私のような学生にも面倒見がよく、豪快な物言いと、その端々に行渡らせた繊細なお心遣いに菅先生の間人としての豊かさを若輩ながら感じました。また、東京と大阪の中間の地の利を活かし、世界的にも有名な研究者をお呼びして、

講演を依頼されるなど、ご自身の人脈を存分に活かして学生教育に力を注がれました。そして、静岡県立大学薬学部の名をより一層揚げることも尽力され、多くの全国的な学会の招致、運営にも多大に貢献されました。これらも偏に学生の学業への向上心の獲得や社会性の育成を目的として考え、多くの経験をスタッフや学生にもたらされました。それから16年、100名を超える多くの優秀な学生を排出し、アカデミア、製薬、化学業界などに大きく貢献されました。

研究に關しましては、こちらにまとめられるほどの文才を私は持ち合わせておらず、恐縮ですが「有機合成化学協会誌2022年3月号ラウンジ」をご参照いただきました。天然有機化合物の全合成を主軸として、有機合成化学反応の開発、発展、天然物の謎の解明やケミカルバイオロジー研究への展開など、温故知新、点滴穿石、研究で成果を積み重ねていかれました。これらの業績も学生の教育を中心に考え、そし

て毎日頑張る学生の努力に感謝されていきました。その性格故に正面から素直にお褒めになることはまずありませんでしたが、お酒や食事の提供でその謝意を示されていたように感じます。

後援会の活動においても、学生の成長を何よりの成果として毎年会報にて報告され、学生のサポートを第一義に、保護者面談や説明を行われました。現在、私は他大学の教員として活動しておりますが、学生とその保護者への対応を考える際、菅先生から受けた教えが大きな支えになっております。

これからコロナ禍が明けていよいよ次の時代が始まるという時に、菅先生がおられない、残念でなりません。心よりご冥福をお祈りしますとともに、ご教示を受けた者として今後も邁進する事が何よりのお返しだと思います。歩みをいよいよ進めてまいります。

後援会の活動においても、学生の成長を何よりの成果として毎年会報にて報告され、学生のサポートを第一義に、保護者面談や説明を行われました。現在、私は他大学の教員として活動しておりますが、学生とその保護者への対応を考える際、菅先生から受けた教えが大きな支えになっております。

「木村良平先生を偲んで」

木村良平先生のご逝去を悼んで



木村良平先生

静岡県立大学特任教授
大学院薬食研究推進センター長
(前薬物動態学(現薬剤学)分野教授)

山田 静雄
(昭和46年卒)

木村良平先生は、2022年3月4日にご逝去されました。享年83歳でした。大学を定年退職後はご趣味の旅行などを楽しみながら悠々自適の生活を送られていましたが、突然の訃報に接し関係者一同驚きとともに深い悲しみにつつまれました。

木村先生は、1939年11月23日静岡市でお生まれになりました。1961年3月静岡薬科大学卒業後、塩野義製薬(株)で医薬品学術情報業務に従事されました。1963年4月に静岡薬科大学薬剤学教室助手として任用され、講師、助教授に昇任され、1981年には米国ケンタッキー大学薬学部客員研究員として留学されました。1983年に教授に就任され薬剤学教室を主宰されました。この間、各種委員会の委員、

静岡県立大学評議員、学生部長を歴任され、41年の長きに亘り静岡薬科大学、静岡県立大学で研究、教育ならびに大学の発展に貢献されました。その間、多くの優秀な卒業生を輩出されました。

研究面では、主として生物薬剤学の研究に従事され、医薬品の薬物動態と薬効解析や環境汚染物質の薬物代謝酵素誘導作用の機構論的解析に関する研究などを精力的に行われました。ケンタッキー大学薬学部留学中には医薬品の鼻粘膜吸収に関する先駆的研究を展開されました。これまでの研究成果は、原著論文、総説、著書として発表され、生物薬剤学において多大な功績を残されました。教育に関しては調剤学、薬剤学、薬物動態学、薬剤学特論等の講義を担当され、学部および大学院学生の基礎薬学や医療薬学教育に意欲的に取り組み、後進の指導育成にあたら

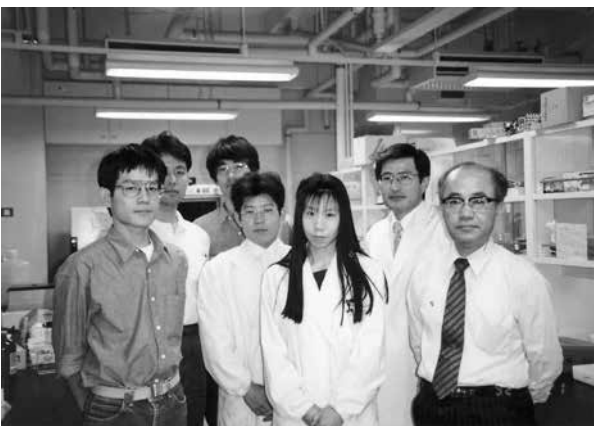
れました。特に、薬剤学実習に病院実習を取り入れられて県内病院薬局との密接な連携を図り、現在の実務実習の基盤を作られました。木村先生は薬剤学の教育・研究、人材の育成、大学の運営さらには学会や社会における貢献など、その功績はまことに顕著であり、定年後は静岡県立大学名誉教授の称号を授与されました。

人生の中で大学人として興味ある研究を続け、学生の指導・人材の育成の中でいかに能力を発揮し、成果を上げかつ学生たちの能力を引き出すような精魂を傾けるのは至難の技を要します。木村先生は静岡薬科大学出身の初めての教授として県民の期待と注目を浴びて就任され21年の長きにわたり薬剤学教室を運営してこられました。その間には計り知れないご苦労も感じつつ、長い間ありがとうございました。先生は、廣部雅昭学長の下で学生部長の大任を務められ、学生の生活面での指導に真摯にご尽力されたお姿は今でも脳裏に残っています。

私にとりましては、葉大から県大に移行した1989年に学生時代から17年間学んだ薬理学教室から薬剤学教室に迎えていただきました。薬学教育は、医療薬学や実務実習の充実を図るため6年制へと移行しつつあり、先生はそのような時代の到来を早くから察しておられ、先生のもとで薬剤師教育を真剣に考える契機となりました。南カリフォルニア大

学主催の第一回臨床薬学教育研修やカリフォルニア大学(UCLA)医学部脳機能研究所への短期研修をはじめ、さまざまな勉強の場に参加する機会を与えて頂いたことが教育研究者の基盤作りになりました。私をはじめ教室員が薬の服用後、吸収から薬効の発現まで、基礎から臨床までの広い視野をもって薬学の教育・研究に精励することができましたのも、先生の比類稀な薬学への俯瞰的な見識とともに暖かなお人柄のお蔭と感謝の念に耐えませんが、私の退職後は尾上誠良教授が薬剤学教室を立派に継承されております。

先生のこれまでの功労に敬意を表すとともにご恩に深く感謝申し上げます。先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。合掌。



木村良平先生のご逝去を悼む

徳島文理大学香川薬学部教授(旧薬剤学教室教員) 加藤善久

(昭和58年修了)

木村良平先生は、昨年末より体調を崩しておられましたが、令和4年3月4日83才でご逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を表します。

先生が入院されていたことは、ご逝去後、息子さんにお電話してはじめて知りました。先生は昨年12月末の前立腺の定期検査の際に肺がんステージ4と診断され、1カ月ほど入院して抗ガン剤による治療を受けていましたが、2月末には緩和ケア病棟に移られ療養されていたそうです。

昨年5月に静薬剤学教室の旧職員など有志とZoomでオンラインミーティングをした際には、「月、水、金にはお酒を飲み、駿府公園を散歩している」と笑顔で話されておりました。今年の年賀状も受け取っておりましてので、突然の訃報に、何かの間違いでは…という気持ちでいっぱいでした。

先生との出会いは、昭和56年4月に私が静岡薬科大学大学院薬学研究科修士課程(薬剤学教室)に入學した時です。その後、先生の「クロルベンゼン類の含硫代謝物に関する研究」を引き継いで修士課程を修了し、その後助手、講師として、平成16年3月の先生のご退官まで21年間師事していました。

先生とは数多くの思い出がありますが、なかでも印象に残っているのは、平成10年にストックホルムで開催された「18th International Symposium on Halogenated Environmental Organic Pollutants」に先生と参加した時のことです。内分泌かく乱のセッションで発表した「Reduction of thyroid hormone levels by methylsulfonyl metabolites of polychlorinated biphenyl congeners in rats」は、シンポジウム終了日

のハイライトで取り上げられ、高い評価を受けました。この研究は、先生の「クロルベンゼン類の含硫代謝物、メチルスルホンの薬物代謝酵素系におよぼす影響」の研究を進展させ、PCBの9種類のメチルスルホン代謝物が甲状腺ホルモンを低下させ、甲状腺刺激ホルモンを上昇させる作用があることを明らかにした研究であり、先生はとても饒舌になり、世界的研究になったと大変喜んでおられました。シンポジウム後、先生と私の妻と3人でストックホルムから列車とレンタカーでスモーランド地方に気ままな2泊3日の旅に出かけて、皆ではしゃいだことが昨日のことのようです。

先生はお酒が大好きで、説教と称して良く飲み連れて行っていただきました。先生が行くのは繁華街から少し離れた中町の角にある(美人ママさんのいる)カラオケのあるバーです。当時流行っていたプリンセスプリンスのダイアモンドを楽しく歌っていたことが目に浮かびます。

木村良平先生は、昭和13年11月23日静岡市に生まれ、昭和36年に静岡薬科大学薬学部薬学科を卒業後、塩野義製薬株式会社学術部に入社し、昭和37年に静岡薬科大学の小菅卓夫教授が主宰する薬剤学教室(昭和42年に薬剤製造学、その後、薬品資源学教室と改名)の研究生となり、昭和38年に助手となりました。昭和42年に村田敏郎教授が熊本大学から静岡薬科大学に赴任されて本格的に「薬剤学教室」がスタートし、木村先生は小菅教授の旧薬剤学教室から移籍し、昭和45年に講師を経て、昭和51年静岡薬科大学助教に昇任、昭和58年4月に静岡薬科大学卒業生として初めて同大学教授に就任され、その後21年間薬剤学教室を担当されました。教室の研究テーマの中心は「生物薬剤学」であり、吸収、代謝を含めた種々の医薬品の生体内動態に関する研究でした。

先生は昭和56年に米国ケンタッキー大学薬学部A. Hussain教授のもとに研究員として留学し、鼻粘膜吸収についての研究を行い、帰国後、

鼻腔内投与が吸収性の優れた投与ルートとして研究を進展させました。また、先生はケンタッキー大学メデイカルセンター薬剤部で見聞を深め、のちに「米国の薬学教育と日本の薬学教育のあまりの違いに衝撃を受けた」と語られていました。

教育においては、調剤学に造詣が深いだけでなく、薬学教育にも広く情熱を注いでいらっしゃいました。特に、昭和50年以前から村田先生とともに薬剤学実習に病院見学実習を取り入れて、静岡県内の病院および薬局との密接な連携を図り、現在の実務実習の基盤を作られています。

また、先生は、昭和56年頃からはパソコンを教育、研究に活用しようとNECのPC88を駆使し、昭和62年には、静岡県薬剤師会と医薬品情報活動のネットワークシステムの構築を試みました。その頃までの薬剤学教室ではIBMのタイプライターで図表を作成し、ポジティブフィルムを用いて発表用スライドを作成していましたが、いち早くPowerpoint 4.0、一太郎Ver.1&Lotus 1-2-3など

のソフトを用いて論文などを作成し、電子メールクライアントとしてEudoraを取り入れ、MEDLINEで文献検索を行うようになっていました。先生がその当時の最先端となるIT技術をいち早く取り入れたことは、現在の教育におけるIT技術の活用のフロンティアと言っても過言ではありません。当時は、パソコンの操作も先生に頼りきりで、先生はきつと、しようがないなあ」と思っていたことでしょう。

先生は、平成8年静岡県立大学評議員、平成11年同大学学生部長に就任され、平成16年に退官するまで、同大学の研究、教育、発展に尽くされました。先生のご活躍の場は、学内にとどまらず、関係諸学会の会長、世話人、幹事、評議員も数多く歴任され、米国臨床薬剤師業務視察団長、厚生省薬剤師国家試験委員など多数の要職を歴任し、薬事行政にも貢献されました。先生は静岡市・県においても専門の立場から、静岡地区医薬分業計画策定委員（静岡市）、静岡市薬剤師会主催医薬分業シンポジ

ウム座長、静岡県医薬分業推進指針検討会会長、静岡県立こども病院治療審査委員、薬局における調剤過誤防止対策ガイドライン策定委員会会長（静岡県）などを歴任され、地域の医療の発展にも多大な貢献をされました。

その後、2人の息子さんと娘さんの3人のお子様、そしてお母様をお一人で面倒をみられ、ご苦労も多かったと伺っております。これからは奥様との時間をゆっくり過ごされるもぞ安らかにお休みください。先生のご生前の面影を偲びつつ、あらためて心からご冥福をお祈り申し上げます。



研究室だより

生化学分野

生化学分野では、2021年度より竹内英之教授が着任されました。生命科学を俯瞰し、核酸やタンパク質と並ぶ第三の生命鎖である糖鎖の機能解明と創薬応用を目指し、Notchシグナル・ウイルス・神経をキーワードに、高橋忠伸准教授、南彰講師、紅林佑希助教がそれぞれ研究室を担当し、研究を進めております。また、糖鎖利用技術の開発など、異分野融合研究の革新的展開を図るため、名古屋大学の岡島徹也教授、広島国際大学の池田潔教授（1979年静岡薬大卒）をはじめ、国内外の先生方との共同研究を推進しております。現在、当分野は大学院博士後期課程3年2名（マレーシアからの留学生を含む）・2年1名、大学院博士前期課程2年2名・1年2名、学部6年5名・5年4名・4年7名の計23名の学生が所属しています。

研究室内における新型コロナウイルス感染症の感染対策に万全を期しながら、研究活動を行っております。学生は精力的に研究や勉学に取り組み、学会でも賞を受賞しています。ここ1年間の受賞は、紅林佑希助教の2021年度日本薬学会東海支部学術奨励賞をはじめ、第36・37回老化促進モデルマウス（SAM）学会学術大会（荻野加



2022年4月 集合写真

奈子さん2回、中尾初音さん）、日本病院薬剤師会東海ブロック・日本薬学会東海支部合同学術大会2021（天野湜基さん、林泉樹さん）、第68回日本薬学会東海支部総会・大会（中尾初音さん）、糖鎖科学中部拠点第17回若手の力フォーラム（天野湜基さん）、薬学部岩崎賞（中尾初音さん）です。

その他、最近の研究内容や成果、トピックスについては、当研究室のホームページ（<https://w3pharm.u-shizuoka-ken.ac.jp/~biochem/index.html>）をご覧ください。教室員一同、コロナ禍が早期に終結し、卒後生の皆さまに会えることを楽しみにしております。

衛生分子毒性学分野

衛生分子毒性学分野は、吉成が教授

として赴任して8年目を迎えました。

研究室では「化学物質からヒトを衛する」を研究のメインテーマとし、化学物質の解毒に重要な薬物代謝酵素や化学物質の生体応答を制御する核内受容体に着目し、化学物質の解毒・毒性発現機序に関して、分子、細胞、個体レベルでの研究に取り組んでいます。また、近年では化学物質の安全性評価において動物実験代替法の開発が強く求められていることから、インビトロ及びインシリコ手法による毒性評価系の開発にも取り組んでいます。

これらの成果は、学術論文としてだけでなく、学生や教員の受賞としても日本病院薬剤師会東海ブロック・日本薬学会東海支部合同学術大会及び日本毒性学会第4回毒性機序研究会にて牧田夏希君（5年生）が、2022年には第49回日本毒性学会学術年会にて佐藤拓海君（博士課程薬学専攻）が、第68回日本薬学会東海支部大会にて早川由真さん（6年生）がそれぞれ発表賞を受賞しました。また、清水佑記さん（令和2年度博士課程修了）が筆頭著者の論文が日本毒性学会田邊賞を受賞しました。さらには、助教の志津怜太先生が日本毒性学会の2022年度奨励賞並びに日本薬学会東海支部学術奨励賞を受賞しました。これらの受賞

を研究室一同で喜んでいきます。その他の研究成果や活動に関してはウェブサイト（<https://w3pharm.u-shizuoka-ken.ac.jp/eisei/index.html>）をご覧ください。

研究、教育を行う一方で、日本動物実験代替法学会第35回大会（2022年11月、本学草薙キャンパス）並びに日本薬物動態学会第38回年会／第23回シトクロムP450国際会議合同大会（2023年9月、グランシップ）を吉成が主催することとなり、その準備を鋭意進めています。ご興味のある方は静岡への観光がてらぜひご参加ください。



2022年3月 卒業式終了後、講義室にて卒業生を囲んで

薬理学分野

現在、薬理学教室には、教員4名、秘書1名、博士・博士後期課程6名(内、MEXT留学生1名、学振特別研究員2名)、博士前期課程1名、学部学生(4~6年生)18名が所属しており、日々、研究に取り組んでいます。当研究室では、主に糖尿病関連疾患に関する薬理研究を行っています。血糖調節において中心的な役割を担っている膵β細胞、脂肪肝などにおける肝線維化の責任細胞である肝星細胞を主な研究対象とし、2型糖尿病や肝線維症の病態解明および治療法開発を指向した基礎研究を展開しています。日本薬理学会の中ではユニークな研究領域かもしれませんが、当領域における基礎研究の重要性は衆目の一致するところだと思います。世の中に貢献できる研究成果を輩出するべく、今後もユニークな薬理研究を推進していく所存です。今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

—お知らせ—

昨年度は、令和3年10月9日に、石川智久先生が部会長として、第145回日本薬理学会関東部会を主催しました。また、令和3年12月21日に、当研究室出身の小出昌代先生 (University of Vermont) に本学の月例薬学セミナーにてご講演いただきました。

—受賞—

昨年度は、金子雪子先生が、日本薬

学会2022年度学会賞「女性薬学研究者奨励賞」を受賞され、令和4年3月26日に名古屋で開催された日本薬学会第142年会で受賞講演をされました。さらに、小寺君(当時M2)が第67回日本薬学会東海支部総会・大会で学生優秀発表賞を、本橋さん(当時B6)が第144回日本薬理学会関東部会で優秀発表賞を受賞しました。今年度は、高橋君(現B6)が次世代を担う若手のための創薬・医療薬理シンポジウム2022でポスター発表賞を受賞しました。



2022年4月5日 新年度顔合わせ
(静岡県立大学 芝生公園にて)

医薬生命化学教室では、「薬物送達学の力でくすりを創る」ことを最終目標とし、がん、脳梗塞、腎臓病などをターゲットに、ナノテクノロジーを基盤とした薬物送達システム(DDS)の研究を行っています。現在、当分野は大学院博士後期課程3年2名・2年1名・1年2名、大学院博士前期課程2年3名・1年3名、学部6年3名・5年3名・4年7名の計24名の学生が所属しています。教室員一同が、切磋琢磨しながら日々研究に励んでいます。近年は新型コロナウイルスの感染拡大により、研究室旅行やバーベキュー、ソフトボール大会などの催しができていないので、早く昔の日常を取り戻し、また楽しく騒げる日が訪れることを研究室一同心待ちにしています。最近の出来事としては、浅井先生が2021年11月に大学発ベンチャー企業「Luna RD株式会社」を設立しました。2022年6月に小出先生が日本薬理学会奨励賞を受賞されました。また当研究室の助教・宋復燃先生が母国での起業を目指し2022年4月に帰国されました。現在は教員3人体

医薬生命化学分野

制で研究室を運営しています。所属学生は、2022年3月の学位記伝達式にて安野豪君が大学院領域別優秀者賞を受賞しました。平田真也君が日本薬理学会第37年会にて日本薬理学会永井財団大学院学生スカラシップを受賞しました。最近の研究成果ならびに教室の活動状況はホームページに掲載しておりますので是非ご覧下さい。
(<https://w3pharm.u-shizuoka-ken.ac.jp/~radio/>)



2021年10月27日 医薬生命化学教室集合写真

身体運動科学分野

本学に赴任し身体運動科学分野を担当して8年目を迎えました。担当科目では、私の専門分野である健康管理学や健康運動心理学の観点を活かした授業を行っています。また研究室としては、健康の維持・増進を図り、社会環境と良好な関係を構築する上で必要な知識・スキルの習得や、運動実践による心理的効果などに関する調査研究及び教育を行っています。

私は、本学全体での身体運動科学の通年17.5本の授業運営に加え、体育関連の用具・施設の管理、非常勤講師のコーディネート、体育会部活動活性化のための支援活動なども一手に担当しております。

大学における体育授業は、身体活動を習慣化する最後の機会となります。日々の授業では、運動技術の習得のみならず、体育を一つのツールとして、学生が自信やライフスキルを身に付けられるような実践を行っています。授業の内容や進め方を工夫することで、体力向上・技術習得はもちろん、メンタルヘルス改善の効果も期待できます。また、特に1年次における体育授業は「仲間づくり」の場にもなり、大学生活への適応や良好な人間関係の構築のために必要不可欠な科目です。

ここ数年では、テニスコートの修繕や新たな部活動設立支援のほか、各施設の利用者説明会開催、施設毎に使用

上の注意看板を作成することで、本学施設をより気持ちよく利用していただけるよう貢献して参りました。また夏期には、アーチェリーやトランポリン、フェンシングなどの新しいスポーツ種目を体験できる機会を設けました。このような新しい取り組みを通じて、本学の学生・先生方に身体運動科学の考え方を広げられたと感じています。

身体運動科学分野は、今後よりよい授業づくりはもちろん、積極的なスポーツ環境整備に継続的に取り組むことで、地域に貢献し未来を担う学生が本学から羽ばたいてゆける環境づくりに努めて参ります。今後とも変わらぬご支援とご指導を賜りますようお願いいたします。



ライフスポーツ フェンシング授業集合写真 (2021年9月撮影)

生体機能分子分析学分野

本年度、生体機能分子分析学分野は轟木教授、杉山助教、古庄助教の3人体制で学生と毎日精力的に研究を行っています。昨年度まで准教授だった水野初先生が4月より名城大学薬学部分析化学研究室の教授にご栄転され、古庄先生が新たに助教に着任されました。水野先生には客員教授として名譽教授の豊岡先生とともに引き続き研究面でご支援をいただいています。

当研究室の主な研究テーマは、次世代バイオ医薬品の新規分析法の開発、単一細胞メタボロミクスのための超微量成分の高感度・高精度分析法の開発、オミクス解析のための新規分析ツールの開発、質量分析イメージング用検出技術の開発です。また、各種疾患の早期発見や再発予防、薬効評価を目的として、ポイントオブ検査法の開発や、無侵襲検査法の開発等も進めています。

研究を支えてくれている学生諸君は、日々切磋琢磨しながら高いモチベーションで研究を行っています。その成果は専門誌への論文掲載のみならず、昨年度の本学修士論文発表会における領域別優秀者賞、学会での優秀発表賞受賞6件など、学生個人としても高く評価されました。

昨年度の修了・卒業生は、白鳥製薬、生化学工業、第一三共、武田薬品工業、バイエル薬品、ヤンセン



2022年4月 芝生公園にて (撮影時のみマスクを外しています)

フアーマへの就職や博士前期課程への進学を選択し、各々の道で活躍しています。今年度も新型コロナウイルス感染症の影響が避けられない状況にありますが、引き続き価値ある研究成果の創出と良い人材の育成に努めて参ります。詳しい研究内容、研究室行事、学生の活躍等は、研究室HPでご覧いただけます。

最後になりますが、静薬学友会の皆様には変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げます。

医薬品製造化学分野

医薬品製造化学分野からは、2022年3月に4名の修士課程修了生を含む9名の学生が社会へと羽ばたいた後に、2022年度は吉村文彦准教授、稲井誠講師、大内仁志助教のスタッフに加えて、博士課程3名、修士課程9名、学部生13名でスタートしました。7月には滝田良教授が参画することで、新たな船出となりました。

昨年7月に菅敏幸名誉教授がご逝去されたことは研究室一同、大きな悲しみと共に、やり場のない喪失感を深く味わったことは正直なところですが、しかし一方で、菅先生の教えを胸にその御恩に報いるべく、研究室メンバーが励まし合い力強く研究活動を行なってきました。例えば、10月にD3の西澤慈くんが第50回複素環化学討論会(Heterocycles Award)を受賞したことは嬉しいニュースでした。また本年7月16日には本学大講堂にて菅先生追悼シンポジウムを執り行うことができました。たくさんの方々にご参加いただき賑やかな会となりましたこと、関係の皆さまに厚く御礼申し上げます。詳しくは別途追悼記事をご覧ください。

当研究室は、有機化学の中でも天然物の全合成に重きを置いた研究を展開してきました。本年からはさらに、独自の設計による有機反応開発、実験と計算化学の両輪による分子機

構の理解、生命科学・物質科学に波及する分子機能創製などを取り入れた研究展開を目指します。1つの有機化学の研究室としては広範なターゲットでタフと清々しく野心もある学生さんが一致団結することで、まさに「いいとこ取り」を目指して挑んでいきます。昨今、コロナをはじめとして明るくないニュースが目につきがちです。皆さまにおかれましてはくれぐれもご自愛されてください。当方から少しでも明るいニュースをご報告できますよう、楽しみながら精進していく所存です。



2022年4月 集合写真

生薬学分野

生薬学分野では、渡辺賢二教授を中心として、天然物生合成メカニズム解明および医薬農薬となりうる活性物質の探索に取り組んでいます。佐藤道大講師、岸本真治助教が中心となって各研究を進めております。当分野では現在、基礎研究のみならず、静岡県立大学発ベンチャーとして我々が設立した株式会社アデノプリメントをはじめ他分野の先生方との共同研究により、大腸がん原因物質であるコリバクチンの検出、さらにはコリバクチン産生菌の検出法の開発にも取り組んでおります。

現在、当分野は大学院博士後期課程3年1名、2年1名(カナダからの留学生)、大学院博士前期課程2年4名(中国からの留学生1名)・1年1名(中国からの留学生)、学部6年3名・5年4名・4年6名の計20名の学生、長田特任教授、河岸先生、博士研究員の岡本君、渡邊君、永翁さん、株式会社アデノプリメント社員の周博士と山本博士が所属しています。

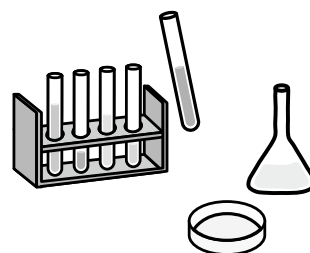
本年度も元気いっぱい研究に取り組み多くの論文を発表しています。学生は精力的に研究や勉学に取り組む、多くの賞を受賞しています。

<https://sweb.u-shizuokaken.ac.jp/~kenji55-lab/>



2022年度の新しいメンバーで

末筆ながら、静薬学友会の皆様には変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げます。



[ac.jp/~kenji55-lab/](https://sweb.u-shizuokaken.ac.jp/~kenji55-lab/)

薬剤学分野

現在、薬剤学分野は、教員3名（尾上誠良教授、佐藤秀行准教授、山田幸平助教）、博士研究員1名、大学院生博士課程4名、修士課程10名、学部生11名のメンバーで研究・教育活動に邁進しております。当分野における教育・研究活動の成果や各種イベント等に関しては、Webサイト (<https://w3pharm.u-shizuoka-ken.ac.jp/yakuzai/>) にてタイムリーに報告しておりますので、定期的にご覧頂けますと幸いです。

クスリを逆から読むと「リスク」(risk) となりますが、実際に薬効と副作用は表裏一体で、どのようなクスリでも副作用は発生してしまいます。そこで私たちは投薬後のクスリが体内でどのように動くのか詳細に把握し、そのクスリの体内動態制御による薬効改善・副作用回避を目指して次のような研究を推進しています。(1) 薬物動態制御による副作用の回避、(2) ナノテクノロジーや物性制御を利用した薬物動態・薬効の改善、(3) 病態下の薬物動態変化解析とその戦略的な回避方法探索、(4) 薬物の物性・動態情報からの副作用リスク予測。

本研究室出身者は、薬剤学に関する基礎研究から臨床研究ま

で視野にいった幅広い経験を活かし、医療機関、製薬・食品企業、行政機関や教育機関など様々な分野で活躍されています。今後も研究活動を通じて薬の専門家としての研究技能・知識とコミュニケーション能力を併せ持つ薬科学者を育成し、変化し続ける社会のなかでリーダーシップを発揮できる人材を輩出できるよう邁進して参ります。今後とも皆様からのご支援を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。



新年度の初日、桜の前での集合写真 (2022年4月1日)
撮影時のみ、マスクを外しています。

創剤科学分野

本年度の創剤科学分野(創剤工学講座)は近藤啓教授、金沢貴憲准教授、照喜名孝之助教の教員3名のほか、大学院生博士課程4名、博士後期課程3名、博士前期課程8名、学部生11名の計29名がメンバーです。「モノづくり」に繋がる理論を構築しよう」をキーワードに、これまで経験に基づいて示されていた製剤学的事象を定量的に捉えること、再現性・予測性を説明可能とする新規製剤技術の確立を目指し、学生一人一人が考え、仮説を立て、検証するサイクルを繰り返すことで課題提案型思考を醸成しています。製剤学はユーザーに最も近い学問領域の一つです。「自分が創った製剤を大切な人に投与することができるか」を常に問いつつ、メンバー一同、研究活動を進めています。

薬学を取り巻く環境は常に変化しており、研究対象となるモダリティは多様化しています。当分野の先輩方が積み上げてきた粉体工学に関する知見をさらに発展させるとともに、ナノファイバー技術を利用した新規製剤開発、レオロジー解析に基づく製剤設計、脳へのモダリティ送達を可能にするナノ粒子検討、など新たな研究課題にも取り組んでいます。現在の研究テーマや行事等については、当分野のHP (<https://w3pharm.u-shizuoka-ken.ac.jp/pharmeng/>) にて紹介しております。お時間が許すときにご覧いただき、ご指導いただけますと幸甚に存じます。

新型コロナウイルス感染症はおよそ3年に亘り各方面に影響を及ぼしています。当分野の活動も例外ではありません。様々な制限下で、学生は研究活動を通して薬学の楽しさを追求する気持ちを持ち続けています。ゼミを毎週火・水・木の朝に開催し、午前中より研究活動に集中できる習慣を身に着けるとともに、夕方以降はフリーとし、学生が有効的な時間の使い方を考える環境を提供しています。研究活動で得られた成果を学会発表し、奨励賞・優秀発表賞なども戴いています。学生が自主的に、論文投稿の準備を進めるなど、研究を纏める能力も育成されています。今後も研究活動を通して薬を創る(研究者)および薬を扱う(薬剤師)役割を担う人材を継続して育成して参ります。ご支援のほど宜しくお願いします。



2021年11月 薬学部棟前での研究室メンバーの集合写真

分子病態学分野

分子病態学分野は森本達也先生が2009年に教授に就任してから今年で13年目になります。森本達也教授、刀坂泰史講師、砂川陽一講師に加え、今年の4月に浜辺俊秀助教が当研究室に就任されました。今年には教員4名、事務補助員1名、大学院生4名(うち博士課程2名)、学部生18名にて、研究に学会発表、地域貢献イベントなど、コロナ禍ではありますが、日々慌ただしく過ごしております。長年、研究に携わってきた船本雅文さんは昨年6月徳島大学医学部薬理学分野の助教に就任しました。この3月には清水果奈さんが博士課程を、清水聡史さんが博士後期課程を修了し、本学をご卒業しました。新天地においても益々のご活躍を祈念しております。

当研究室では心血管疾患の創薬を目指し「心不全発症に関わる心筋細胞内シグナル伝達機構の解析」をテーマに研究を行っています。この1年の間、本研究室を卒業した方々の研究成果が様々な査読付き英文紙に掲載されました。卒業生の片山歩実さんの研究成果(心筋梗塞ラットにおける不飽和脂肪酸EPA・DHAの効果及び作用機序解明)がJournal of Nutritional Biochemistry、前川健也さんの研究成果(心筋梗塞ラットに対するツルアラメ抽出物の効果検討)がNutrients、望月沙穂さんの研究成果(ドキンルビシン心筋症モデルマウスに対する紫菊花抽出物の効果検討)がCancers、源平麻衣さんの研究成果(Pyrazole-Curcuminの心筋細胞肥大反応抑制の作用機序解明)がPharmacetics、斎藤アユミさんの研究成果(冠動脈疾患患者の心外膜脂肪組織中のアディポカイン解析)がJournal of Clinical

Medicine、清水聡史さんの研究成果(GATA多量体による心筋細胞肥大反応制御機構)がInternational Journal of Biological Sciences、京都医療センターとの共同研究

である高血圧患者に対する高吸収性クルクミン製剤の臨床研究を船本雅文さんが筆頭著者としてEuropean Heart Journal Openに掲載されました。当研究室の最新の研究成果はFacebook (https://www.facebook.com/ken.ac.jp/byoutai/index.html)に逐次報告しておりますので、是非ともフォローください。

新型コロナウイルス感染症の影響もあり、普段とは様相が異なる生活を強いられておりますが、OB・OGの皆様、ご健康にはくれぐれもお気を付けください。またお会いできる機会を楽しみにしております。

最後になりますが、静薬学友会の皆様には今後も変わらぬご支援、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。



2022年3月 卒業式にて

生体情報分子解析学分野

生体情報分子解析学分野は、黒川光子教授が着任してから今年で6年目となりました。令和3年度末には山口賢彦助教が企業にご転出なさり、研究室員一同、ますますのご発展を祈念しております。10月1日付けで、3月に本学大学院を卒業して博士を卒業後、東京慈恵医科大学でポスドクをされていた清水聡史先生が助教としてラボに加わってください。大学院生1名学部生17名、黒川教授、坂本准教授、清水助教、秘書・山崎の総勢27名で活動しています。当分野のミッション「性差(個別化)医療に貢献する薬理学研究」は変わらずで、薬物療法の標的組織の生理学的特性に応じた薬理作用について、イオンチャネルなど膜タンパク質を中心に分子レベルで理解することを目指しています。具体的には、心血管病や骨格筋の炎症の性差機構解析、ヒトiPS由来心筋の創薬応用、そして腎臓排泄に関する性差がテーマです。令和4年度には、日本薬学会薬理系部会主催の「生体機能と創薬シンポジウム2022」が学内で開催され、当分野を中心に薬理系総出で運営にあたりました(写真)。研究を通じた交流の重要性をしみじみとかみしめました。1年間を振り返ってみ

ますと、昨年10月の第145回日本薬理学会関東部会では鈴木一生さんが優秀発表賞を、7月の日本薬学会東海支部会で杉本真葉さんが学生優秀発表賞、生体機能と創薬シンポジウム2022で岩鶴果奈さんがポスター最優秀発表賞と若林聖士さんがポスター優秀発表賞、次世代を担う若手のための創薬・医療薬理シンポジウム2022で國井涉さんと渡邊倫さんが優秀発表賞(口頭部)と、多くの学生が受賞しました。先輩の活躍を見て頑張ろうという空気が醸成されているのが頼もしい限りです。今後とも、皆様からのご支援を賜りますようお願いいたします。



教室員総出で、生体機能と創薬シンポジウム2022のお世話をさせていただきました。

臨床薬剤学分野

臨床薬剤学研究室は、学部運営上、薬局管理学を含めて活動しています。研究インフラは草薙キャンパスと静岡県立総合病院内にあります。病院内の研究室は、2002年に開設され、2008年に循環器病センターに移設され、さらに2017年9月からは新築された先端医学研究棟内に再移設されました。地方自治体が設立した病院内に薬学部の実験室を設置することは極めて珍しく、内外から注目されています。

教育面の実習関係では、6年制課程の病院・薬局実務実習（5年次）を担当しています。本学では、病院内に専任教員6名を配置して、教員主導型臨床教育を行う、いわゆる米国型薬剤師養成教育を行っています。臨床薬剤学研究室では、その中核を担い、実務家教員3名（宮崎准教授、内野講師、大澤講師）が臨床実習に携わっています。講義では、薬学概論（1年次）、早期体験実習（1年次）、医薬品安全性学（3年次）、薬学と社会Ⅰ（3年次）、医薬品情報学Ⅰ（3年次）、薬学と社会Ⅱ（4年次）、調剤学（4年次）、薬物治療学特論（大学院）等を担当しています。薬学概論、薬学と社会Ⅰ、調剤学の講義では、近藤記念薬学

キャリア支援寄附講座との連携により、本学出身者を非常勤講師に迎えています。研究面では臨床現場の問題点を臨床薬物動態学、臨床薬理学および臨床製剤学的アプローチで解決する研究を行っています。2021年度にLC-MS/MSやHPLCの機器更新がなされ、最先端の研究機器で臨床研究に取り組んでいます。当研究室では、学生、大学院生および教員が丸となり、粘り強く、かつ質の高い薬学研究を通して、薬物治療成績の向上に取り組んでいます。これからも、当研究室は臨床薬学研究で社会に貢献できる卒業生や修了生を輩出できるよう精進しています。

昨年10月には、第31回日本医療薬学会年会において、平井啓太先生が奨励賞、6年生の小玉千佳さんがYoung Investigator's Award、本年4月には、博士2年の上原星輝子さんが第20回Kinki-Hokuriku Airway disease Conferenceにて優秀賞を受賞するなど、日々の研究成果を積極的に各学会において発表し、高い評価を受けています。また、本年4月より、平井啓太先生が信州大学医学部附属病院薬剤部准教授・副薬剤部長として栄転されました。益々のご活躍を期待しております。

臨床薬効解析学分野

臨床薬効解析学分野では、「医療現場からシーズを見つけて研究を展開し、その成果を現場や社会に還元する」ことを目指して、現在、教員3名、博士課程5名、修士課程1名、学部学生19名の総勢28名が基礎研究と臨床研究の橋渡し研究に取り組んでいます。当分野は、静岡県立総合病院先端医学研究棟5階にブランチ研究室を設置しており、静岡県立総合病院をはじめ県内外の医療機関、大学、研究所と連携して、薬物治療などに関わる臨牀的な課題に対して共同で行っています。

養成を目指して、静岡県立総合病院における実務実習がより充実したものであるよう日々取り組んでいます。

研究室行事や研究成果は、ホームページ、またはFacebookに随時公開していますのでご覧ください。コロナ禍においてまだまだ予断を許さない状態が続いていますが、これからも精力的に研究活動を行いつつ、充実した研究室生活を過ごせるよう努めていきたいと思っております。今後とも皆様のご支援を賜りますようよろしくお願い申し上げます。



2022年度3月の集合写真

教育面では、学部、大学院科目の講義の他、モデル・コアカリキュラムに対応した実務実習指導を担当しており、質の高い医療人の



2022年 集合写真

医薬品情報解析学分野

当研究室は2005年に発足し、本年度18年目を迎えます。その間、多くのOB・OGを輩出し、病院・薬局を始め、製薬会社の統計解析・データマネジメント部門、行政機関等で幅広く活躍しています。今年度より山田が定年を迎え特任教授となり、新型コロナウイルスの流行が収束しない中、学生達と共に日々精進し研究活動を行っています。

当研究室のポリシーは、薬学教育の中で重要な分野である新薬の臨床開発や臨床研究に必要な臨床研究方法論、生物統計学、疫学、EBM等の教育ならびに研究を実践することです。この様な理念を掲げた研究室は薬系大学では極めて珍しく、時代に先駆けた研究室と言えます。

教育面では社会人にも門戸を広げた「CRC/CRA養成講座」創薬育薬基礎・応用特論、先端臨床薬学特論2」を毎年開講し社会的にも高く評価され、日本臨床薬理学会の認める「認定CRC更新のための講習会」に認定されています。しかし最近3年間はコロナ禍の影響で社会人の募集が中止となっており、非常に残念に思っています。2010年からは静岡県立総合病院内に当研究室の分室が開設され、データマネジメントや統計解析機能を有する分室として活動しています。

て活動しています。

研究面においては、静岡県立総合病院ほか多くの医療福祉機関や大学間の連携で、多施設共同研究、企業との共同研究等を実施しています。特に緑茶の感染症予防や精神機能への影響に関する臨床研究はマスコミでも大きく取り上げられています（NHK WORLD「Medical Frontiers」では世界に向けて発信されました）。また、健康食品の安全性評価に関する研究も継続しています。大学院生・学部生等による研究成果も着実に積み重ねられ、国際誌への投稿も増え今後の活躍が期待されます。



2021年11月30日 研究室集合写真（草薙キャンパスにて）

実践薬学分野

本年度は研究室にとって大きな動きがありました。浜松医科大学附属病院薬剤部より本研究室の卒業生の三浦基靖先生が4月より講師として着任しました。また、田中紫茉莉先生が6月30日をもって本学を退職され、7月から帝京大学薬学部製剤学研究室に栄転しました。

実践薬学分野では、患者が薬を楽に服用あるいは使用することができ、確実な治療効果へとつなぐ第一歩とするために、ゲミヤフォームといった菓子を用いた実用化製剤の研究開発など、患者ベネフィットを追求した研究を行っています。加えて、薬物相互作用などによる薬物動態や効果にどのような影響を及ぼすかについて、病院及び製薬企業との共同研究を行っています。

本研究室では「屋根瓦方式」をモットーにしています。少しずつ重なり合うことで強度が増す屋根瓦のように、上級生が下級生を教えることはもちろんのこと、当研究室を卒業した学生OB・OG、そして社会人大学院生とその卒業生が手を取り合いながら助け合うとなっております。その一環として、年一回の実践薬学セミナーを開催し、在校生による研究発表や、講演会を行っています。



2022年5月 田中先生送別会の記念撮影にて

学に、研究にと頑張っています。中でも、日本薬学会第142年会（名古屋）にて山本駿さん（6年生）が学生優秀発表賞を、渡辺日菜子さん（6年生）が「薬と健康の週間」懸賞論文第2席を、それぞれ受賞しました。引き続き、研究室へのご支援・指導のほど、よろしくお願ひします。

医薬品化学分野

医薬品化学分野では、「安全かつ簡便な有機合成法を実現する化学」を目指し、様々な有機化学研究を行っています。これまでに「位置選択的反応を実現する新規触媒反応の開発」や、「安全・簡便な化学合成を可能とする一酸化炭素代替化合物の開発」、「二酸化硫黄代替化合物を用いる新規触媒反応の開発」等をはじめとする成果を発表してきました。今後も引き続き、これらの研究をさらに発展させたいと思っております。研究室員一同、化学の発展に少しでも貢献できるような日々研究に没頭しています。

この一年の間でのニュースとしては、令和三年度の三年生六名が後期から卒業生として仲間に加わってくれました。今後の活躍を楽しみにしています。また、セミナー室の冷蔵庫を新しくしました。古い冷蔵庫はこれまで長年にわたって頑張ってくれていましたが、ついに力尽きたようです。ご苦勞様でした。

一昨年度から、新型コロナウイルスの活動が制限されており、研究室でも、これまで毎年行ってきた楽しい行事（歓送迎会、お花見、バーベキュー、研究室旅行など）が実施できない状態が続いています。ただ、かえって新



集合写真 (2021年11月)

しい「研究室」というもののスタイルが見えてきた気もします。以前はこれらの行事が研究室運営には必須であると考えていましたが（いわゆる飲みニケーション）、必ずしもそうではないと今は思っています。旧態依然の大学においても十年前、二十年前と比べれば様々な点で大きく変わっています。大学における研究室文化についても、パラダイムシフトの時代がようやく到来したことを強く感じています。

このような状況でも研究室員たちは、研究を少しでも進めようと日々頑張っています。今後も引き続きご支援くださいますようお願い申し上げます。

生命物理化学分野

なかなか暑さの和らぐ気配の無い8月下旬、恒例の「研究室だより」のメーチェを過ぎてしまい、慌てて原稿を書いています。今回の研究室だよりも、昨年10月からの研究室の状況について簡単に報告いたします。10月1日付けで原幸大先生が講師から准教授に昇任されました。教育及び研究活動における益々のご活躍が期待されます。後期からは3年生が新たに研究室に配属されます。当研究室では7名の薬学科3年生が研究室に加わり、研究室の先輩達と共に卒業研究を開始いたしました。感染防止対策と研究活動を両立しつつ、

12月2日には無事に5名の薬学科6年生が卒業研究発表を行いました。また、2月1日には3名の薬学科4年生が卒業研究発表、4名の薬学科4年生が中間発表を行いました。3月18日には前年度と同様に参加人数を制限し、グランシップでの学位記授与式が開催されました。同日の午後には草薙キャンパス大講堂において、恒例の薬学部及び大学院の学位授与式が行われ、薬学科6年生の高田真子さんが領域別優秀者賞（分析物理領域）



卒業アルバムのためにモニュメント前で撮影した集合写真
(令和2年度修了の玉舟亮太さんより) 2021年11月2日

を受賞しました。第107回薬剤師国家試験では、薬学科6年生は5名全員が合格することが出来ました。3名の薬学科4年生は大学院博士前期課程に進学し、4月より学部学生16名、大学院生3名で新年度を開始しました。7月頃より第7波といわれている新型コロナウイルス感染症の感染急拡大によって、これまでの流行のピークがベスラインに埋もれてしまうほどの感染者数が連日報告されています。今後、感染者数の全数把握の見直しや法律上の分類の変更が検討されており、ウイズコロナ時代の到来が現実味を帯びてきました。さて、来年の今頃はどんな感じでしょうか。

医薬品創製化学分野

私たちの研究室は今年で創立10周年を迎えました。この10年間を振り返ると本当に様々なことがありましたが、卒業していった皆さまと過ごした楽しい日々が今でも鮮明に思い出されます。うまくいかず悶々とする時も多々あったと思いますが、皆さまの努力のおかげで困難を乗り越え、この記念すべき節目の年を迎えることができました。改めて感謝申し上げます。今後も優秀な人材を輩出するとともに、オリジナルティのある優れた研究成果を発信し続けられるよう邁進して参ります。研究成果や研究室内でのニュースは、研究室のホームページ (<https://w3pharm.u-shizuoka-ken.ac.jp/locus/index.htm>) で公開しています。昨年度も多くの学生さんが学会で優秀賞を受賞しておりますので、ぜひご確認下さい。

さて、今年度の研究室配属は昨年同様10月に行われましたが、今回も優秀で有機化学が好きな学生が6名加わってくれました。また、今年度は1名の女子学生が入ってくれて、華やかで活気溢れる研究室になりました。「新しい化学の創製」と「新しい医薬分子の創製」を行う中で研究の楽しさを体感し、研究室をより一層盛りあげていくと期待しています。今年度は4名が大学院入試に臨みますが、院試休み中の勉強の成果を当日の試験にぶつ

けると約束してくれました。学会やセミナー、その他の研究室イベントについては、残念ながらコロナの影響で通常通りとはなっておりません。しかし、対面とオンラインのハイブリッド形式の学会が開催されるなど、徐々に以前のような様式に戻りつつあります。卒業生の皆さまも規制が多くストレスフルな生活が続いているかと思いますが、お体には気を付けてお過ごし下さい。コロナが終息した際には、気兼ねなく研究室に立ち寄って下さい。皆さまと会えることを楽しみにしています。



2022年3月18日 学位授与式

統合生理学分野

統合生理学分野は、教員3名、博士課程4名、修士課程6名、学部生12名、客員共同研究員1名の総勢26名のメンバーで、「神経・筋疾患の発症機構の解明および治療法の開発」をメインテーマとし健康長寿の実現に向けた研究活動を行っています。そこで、昨年10月からの研究室の様子を簡単ですがご報告させていただきます。

昨年度は原教授が着任した1年目であり、新たに統合生理学分野での研究活動をスタートさせるべく、走り続けた1年間でした。最終学年としてこれまでの研究成果をまとめる学生、これから新たな研究活動を始める学生、と本当に多彩な内容を扱っていたように思います。10月には、学部3年生の7名、京都大学からの客員共同研究員の1名を新たに迎え入れ、さらに大所帯となっています。2022年3月、学位記伝達式では博士課程1名、修士課程3名、学部生6名が学位を取得し、それぞれの道に羽ばたきました。また、井口和明講師が定年退職されました。長い間大変お世話になりました。

そして、2022年4月、新たに村上光助教が着任しました。脂質を中心とした細胞生物学を専門領域とする村上助教が加わったことで、さらに統合生理学はパワーアップしています(併せて新任教員挨拶もご覧

ください)。日本筋学会や日本脂質生化学会等へも新たに参加するようになり、一步一步成果を積み上げています。7月の日本薬学会東海支部では修士課程の中西陸君が学生優秀発表賞を受賞しました。新型コロナウイルスの影響で、研究室でのイベント開催は叶っておりませんが、研究室一丸となって頑張りそして楽しみながら研究を行う、そんな研究室を目指し、大きな成果を出していきたいと考えています。今後とも皆様からのご指導ご鞭撻のほどどうぞよろしくお願い申し上げます。



2022年6月 芝生公園にて

免疫微生物学分野

免疫微生物学分野では、梅本英司教授のもとで「生体環境を重視した免疫学」をテーマに研究を進めています。腸内細菌や食事などの環境因子に絶えず晒される腸管では、病原体を排除しつつ常在細菌に過剰に反応しないための独自の免疫制御機構が発達しています。当研究室では主に粘膜組織における免疫細胞の機能や、常在細菌や病原性細菌により産生される代謝分子が免疫系に与える影響を研究しています。研究室ホームページでも紹介しておりますので、是非一度ご覧下さい。

(<https://w3pharm.u-shizuoka-ken.ac.jp/immunol/>)

令和三年度は、当研究室からは5名の学生が薬学科(6年制)を卒業し、病院、薬局、ドラッグストア、医薬品メーカーに就職しました。また1名が薬科学科(4年制)を卒業し大学院に進学しました。卒業生の皆様のこれからの益々の活躍を祈念いたします。

三宅正紀講師は、令和四年四月より奥羽大学薬学部教授としてご栄転なさいました。1997年より長年に渡り助教、講師として研究室を盛り上げていただきました。これまでの感謝の気持ちを込めて、ビール好きな三宅先生にタンブラーを贈呈してお祝いしました。

六月には中国からの留学生を新メンバーとして迎えました。歓迎会を開催

し、自己紹介や出身地である中国吉林省や延辺朝鮮族自治州の話題で大いに盛り上がりました。研究室に参画してからは、およそ3ヶ月と短い期間ですが、すっかりと研究室にも馴染み、研究活動にも一生懸命に取り組んでいます。現在、研究室では4年生6名、5年生5名、6年生5名、修士1年生1名、修士2年生1名の計18名の学生が所属し、研究に打ち込んでいます。まだまだコロナ禍で困難な状況ではありますが、同窓生の皆様には、引き続きご指導ご鞭撻のほど、よろしく御願いたします。



桜の下で

創薬探索センター

現代のがん治療を目的とした創薬では、新しい知識や仮説をもとにした分子標的薬や免疫チェックポイント阻害薬が次々に開発されています。しかし、その福音は一部のがん種に限定されており、多くの未解決セグメントを残しています。当研究室は2004年に開設されて以来、国内研究機関や製薬企業と共同でこれまでにない新しい抗がん剤シーズの探索研究を進めています。

例えば、転写制御因子STAT3を標的とした経口投与可能な新規抗がん剤候補物質を創製しマウスモデルでその効果を実証してきました。既に欧米アジアなど各国で特許登録され、現在、国内製薬企業で臨床試験に向けた評価が進められています。さらに、従来の抗がん剤のようにがん細胞自体を攻撃するのではなく、生体にもともと備わる免疫細胞の力を利用する薬剤の開発を進めています。がんが高発現しているトリプトファン代謝に関わる酵素を標的としたユニークな化合物を複数発見しており、現在インシリコモデルを活用した構造最適化および動物モデルでの詳細な解析を進めています。また、企業と共同で免疫系に作用するCOVID-19治療薬や新規診

断法に関する研究にも取り組んでいます。当研究室では化学をベースにして、腫瘍学や免疫学について学生と共に学び理解を深めることにより、がんや感染症のアクセラレーターを狙った新薬シーズの研究開発に取り組んでいます。有効な治療法の確立されない疾患で苦しむ方々の「HOPE & HELP」を目指します。

令和3年度には、薬科学科4年生の永岡菜さんが成績優秀者賞を受賞しました。また、博士1名、修士1名、薬科学科6年生1名、薬科学科4年生2名が修了/卒業しました。現在彼らは国内企業の研究職(田辺三菱製薬、東京化成)や薬剤師(東京都立病院機構)として活躍中です。薬科学科4年生2名は博士前期課程に進学し研究に邁進しています。

COVID-19治療薬や新規診



2021年12月7日 静岡県立大学草薙キャンパスにて

薬学キャリアデザイン 近藤寄附講座

当寄附講座は静岡薬科大学卒業生（昭和46年卒）近藤隆様からの寄附金によって運営されており、開設4年目を迎えました。メインスタッフは木下俊也客員教授と南彰客員講師（兼任）の二人です。

当寄附講座は、学生の将来進路に対する意識付けや薬学に対するモチベーションの熟成を目的として活動しており、①各分野で活躍する卒業生等による講義、②国内外の医療介護分野の実態調査及び卒業生の活動状況の調査、③就職等の進路相談、④国内外の短期留学・研修を希望する学生への学術研究支援等を行っています。

開設初年度は、卒業生による講義、進路相談会、学術研究支援（学会発表や短期留学等の旅費支援）等、多くの学生支援を実施することができました。しかし、2、3年目においては、新型コロナウイルス感染症拡大という異常事態のため、学生との対面機会を設けることは難しく、卒業生等による講義は全てがZoomを用いた遠隔形式講義となり、また、進路相談会や学術研究支援につきましては中止いたしました。

本年度におきましては、当

寄附講座が担当する「薬学概論」・「調剤学」・「薬学と社会」では、製薬企業、薬局、病院、薬事行政等、各界で活躍する卒業生等延べ12名を講師として招聘し、対面形式による講義を行っているところですが、また、進路相談会や学術研究支援につきましても、3年ぶりに再開しております。

卒業生の皆様には今後とも変わらぬご支援をよろしくお願いいたします。



寄附講座のスタッフ 南彰客員講師(左側)と木下俊也客員教授(右側)

薬学部教員の人事異動

退職

薬剤学分野	助教	大野	由依	令和4年1月
医薬品情報解析学分野	助教	宋	復燃	令和4年2月
生体機能分子解析学分野	教授	山田	浩	令和4年3月
医薬品情報解析学分野	准教授	水野	初	令和4年3月
臨床薬効解析学分野	講師	古島	大資	令和4年3月
生薬学分野	講師	平井	啓太	令和4年3月
免疫微生物学分野	講師	恒松	雄太	令和4年3月
統合生理解析学分野	講師	三宅	正紀	令和4年3月
生体情報分子解析学分野	講師	井口	和明	令和4年3月
実践薬学分野	助教	山口	賢彦	令和4年3月
	助教	田中	紫茉莉	令和4年6月

着任

薬剤学分野	助教	大野	由依	令和3年12月
実践薬学	講師	三浦	基靖	令和4年4月
生体機能分子解析学	助教	古庄	仰	令和4年4月
分子病態学	助教	浜辺	俊秀	令和4年4月
統合生理学	助教	村上	光	令和4年4月
医薬品製造化学	教授	滝田	良	令和4年7月
生薬学	助教	渡邊	正悟	令和4年9月
生体情報分子解析学	助教	清水	聡史	令和4年9月

昇任

生命物理化学分野	准教授	原	幸大	令和3年10月
分子病態学分野	講師	砂川	陽一	令和3年10月
医薬品情報解析学分野	准教授	小出	裕之	令和4年10月
生薬学	講師	岸本	真治	令和4年10月
生命物理化学	講師	菱木	麻美	令和4年10月

科学英語分野

准教授 ホーク フィリップ (Philip Hawke)

As both the world of science and Japanese society are becoming more and more internationalized, English is increasingly needed both by Japanese pharmaceutical scientists to communicate their research to foreign colleagues, and by Japanese pharmacists to speak to foreign patients and customers. These trends were recognized by the University of Shizuoka in 2007 when it established the Scientific English Program to train science graduate students as part of the Global COE Program. The Program was integrated into the School of Pharmaceutical Sciences as the 科学英語分野 in 2012, when it began providing courses to undergraduate students as well. The Program is taught by me, Philip Hawke, a Canadian who has taught at the University of Shizuoka since 1998.

The Program teaches graduate students the practical English skills that they need to successfully communicate about their research. It offers courses in **Academic Presentations, Academic Writing, Scientific Manuscript Editing, Oral Communication, Small Group Discussion, and Independent Listening**. After taking the Program's courses, many students have presented their work at international conferences and published it in international journals, and some have worked abroad as post-doctoral fellows or now work for international drug companies.

The Program teaches undergraduate students more basic English skills related to science. The **Pharmaceutical Science English** course introduces third-year students to the English that they will need after entering laboratories in their fourth year, such reading scientific journal articles. Students also develop practical English for communicating with foreign patients and customers in hospitals and drug stores. In the English section of the **Scientific Practice** course, first-year students have debates on scientific topics. In 2017, a new course called **Research Presentations in English** was introduced. The course gives 4th-, 5th-, and 6th-year students the opportunity to practice presenting their graduation research projects in English.

In recent years, an increasing number of foreign graduate students have been enrolling in the School, motivating faculty members to improve their own English skills. To help them do so, the Program offers weekly English Lunches for Science Faculty Members at a variety of skill levels. The Scientific English Program aims to help both students and faculty members to develop the English skills that they need to succeed as scientific research and Japanese society become increasingly internationalized.



Discussing research in Small Group Discussion class.

科学の発展や日本社会の国際化に伴って、日本の薬学研究者や薬剤師が外国人の研究者、患者、来店客と英語でコミュニケーションをとる必要性が増しています。こうした傾向を背景に、静岡県立大学で2007年にグローバルCOEプログラムの一環として科学系大学院生のためのScientific English Programが設立され、授業が行われてきました。2012年からは、このプログラムが薬学部の「科学英語分野」として統合され、同時に学部生に対しても授業が行われるようになりました。1998年より「科学英語分野」は私、カナダ出身のホークフィリップが担当しております。

大学院生を対象としたプログラムでは、研究について円滑なコミュニケーションを図ることを目的として、大学院生を対象に英語の実用的なスキルを磨くための授業を行っています。このコースではアカデミックプレゼンテーション、アカデミックライティング、科学原稿、オーラルコミュニケーション、スモールグループディスカッション、また自主的に行うリスニングなどのコースを提供しています。プログラム受講後は多くの学生が、国際会議での発表、国際学術雑誌への論文掲載、またポストドクターの一員として海外の大学で研究を行ったり、国際的な製薬会社に勤務するなど、多彩な経験を積んでいます。

学部生を対象としたプログラムでは、科学に関連した基礎的な英語を学ぶことができます。Pharmaceutical Science Englishでは学部3年生に対して、4年生になり研究室に配属されたのちに必要となる、科学に関連した英文記事を読むためのスキルを身につけるコースを用意しています。さらに学生は、病院や薬局で外国人の患者とのコミュニケーションを図るための実用的な英語を身につけます。Scientific Practice コースでは1年生が科学のトピックについて英語で討論を行っています。2017年にはResearch Presentations in Englishという新しいコースが設置され、4、5、6年生が卒業研究発表を英語で行う練習を行っています。

近年、海外から多くの大学院生が入学するようになり、教職員の英語スキルについても向上させる必要があります。その一助として、週に一度さまざまな英語レベルの科学系教職員が参加できるイングリッシュランチの機会を提供しています。科学英語プログラムは、学生、教職員双方が研究を成功させるため、また今後ますます国際化が進む日本で必要とされる英語のスキルを高めるための手助けをすることを目指しています。

薬学部教室名および教員一覧 (カッコ内は大学院薬学研究院)

薬学科			臨床薬学大講座			
生体機能薬学大講座			臨床薬剤学分野 (臨床薬剤学講座)	教授	賀川 義之	
生化学分野 (生化学講座)	教授	竹内 英之		准教授	宮崎 靖則	
	准教授	高橋 忠伸		講師	内野 智信	
	講師	南 彰		講師	大澤 隆志	
衛生分子毒性学分野 (衛生分子毒性学講座)	助教	紅林 佑希	臨床薬効解析学分野 (臨床薬効解析学講座)	教授	伊藤 邦彦	
	教授	吉成 浩一		准教授	井上 和幸	
	講師	菅野 裕一朗	講師	辻 大樹		
薬理学分野 (薬理学講座)	助教	保坂 卓臣	医薬品情報解析学分野 (医薬品情報解析学講座)	特任教授	山田 浩	
	助教	志津 怜太				
	教授	石川 智久	実践薬学分野 (実践薬学講座)	教授	内田 信也	
准教授	木村 俊秀	講師		柏倉 康治		
講師	金子 雪子	講師		三浦 基靖		
医薬生命化学分野 (医薬生命化学講座)	助教	山口 桃生	薬局管理学分野 (臨床薬剤学講座)	助教	谷澤 康玄	
	教授	浅井 知浩	薬科学科			
	准教授	小出 裕之	創薬科学大講座			
身体運動科学分野	講師	米澤 正	医薬品化学分野 (薬化学講座)	教授	眞鍋 敬	
	准教授	窪田 辰政		准教授	小西 英之	
	准教授	ホーク フィリップ (Philip HAWKE)		講師	岩本 憲人	
科学英語分野	助教			助教	山口 深雪	
	分子薬学大講座			生命物理化学分野 (生命物理化学講座)	教授	橋本 博
	生体機能分子分析学分野 (生体機能分子分析学講座)	教授	轟木 堅一郎		准教授	原 幸大
助教		杉山 栄二	講師		菱木 麻美	
医薬品製造化学分野 (医薬品製造化学講座)	助教	古庄 仰	医薬品創製化学分野 (医薬品創製化学講座)	教授	濱島 義隆	
	教授	滝田 良		准教授	江上 寛通	
	准教授	吉村 文彦		助教	山下 賢二	
生薬学分野 (生薬学講座)	講師	稲井 誠	生命薬科学大講座			
	助教	大内 仁志	統合生理学分野 (統合生理学講座)	教授	原 雄二	
	教授	渡辺 賢二		助教	鈴木 美希	
医療薬学大講座	講師	佐藤 道大	免疫微生物学分野 (免疫微生物学講座)	助教	村上 光	
	教授	岸本 真治		教授	梅本 英司	
	助教	渡邊 正悟		講師	黒羽子 孝太	
薬剤学分野 (薬剤学講座)	助教			助教	中西 勝宏	
	教授	尾上 誠良	大学院付属施設			
	准教授	佐藤 秀行	創薬探索センター	教授	浅井 章良	
助教	山田 幸平	准教授		澤田 潤一		
創剤科学分野 (創剤工学講座)	教授	近藤 啓		講師	小郷 尚久	
	准教授	金沢 貴憲	助教	村上 央		
	助教	照喜名 孝之	薬食研究推進センター	特任教授	山田 静雄	
分子病態学分野 (分子病態学講座)	教授	森本 達也		講師	伊藤 由彦	
	講師	刀坂 泰史	寄附講座			
	講師	砂川 陽一	薬学キャリアデザイン近藤寄附講座	客員教授	木下俊也	
助教	浜辺 俊秀	講師		南 彰 (兼務)		
生体情報分子解析学分野 (生体情報分子解析学講座)	教授	黒川 洵子				
	准教授	坂本 多穂				
	助教	清水 聡史				

薬学部令和3年度成績優秀者賞・岩崎賞受賞

薬学科 成績優秀者賞



大学で培った力と社会

大鵬薬品工業株式会社

畑 知利

(薬学科 創制科学分野 令和4年卒)

この度は、成績優秀者賞という名誉ある賞をいただき、誠に光栄に存じます。今回の受賞は、友人、先生方、家族と多くの方にご支援いただいたおかげです。この場を借りて、厚く御礼申し上げます。

大学までの人生を静岡で過ごした私は、初めて海をわたり、現在は徳島県にて医薬品開発に従事しております。新たな生活に右往左往の日々ですが、そんな中でも大学で得た経験が活かしていると感じる瞬間もあります。特に「疑問を抱き、必要な事柄を自身で調べる力」は大学で培った大きな財産であると感じています。

現代社会は、多くの新しい事柄で溢れています。ただ見る・聞くのではなく、そこに「なぜ？」や「本当のことは？」と疑問を持ち、自分で調べることで新たな発見や知識を得ることにつながっています。最近の出来事や経済の動向など、今まで触れてこなかった

ことを調べることも多くなり、社会人としての一歩を踏み出したのかと感じています。また、会社の業務においてもこの力は「意思決定」の場面で役立っています。

業務の中で、計画に間違いはないのか、問題解決にどういった対策が必要なのかなど、重要な決定を下すことも少なくありません。最適な選択をするためにも、自分なりに疑問を持ち、考えを巡らせ合意を得ることが重要だと思います。

気づいたら大人になっていたと感じるほどに時の流れは早いものです。昔、繁栄を誇っていたものが無くなり、失墜することも最近では多く見かけます。目まぐるしく変化する社会の中で、数十年後も存続するためには不断の努力が必要です。未熟な私ですが、未来を見据えて更に精進を続け、多くの人の笑顔と健康に貢献できるようにしていきたいと思っています。

薬学科 岩崎賞



6年間の大学生活を振り返って、そしてこれから

菊間 史也

(薬学科 創制科学分野 令和4年卒)

この度は、令和3年度岩崎賞という

名誉ある賞を頂き、大変光栄に思います。大学6年間の自身の努力はもちろんですが、共に勉学に励む友人や懇切丁寧な指導をくださった教員の皆様、そして常に生活を支えてくださった家族の存在があってこそ成し遂げられた結果だと感じています。この場をお借りして皆様に心より感謝申し上げます。

6年間の大学生活で勉学の他にも様々な経験をすることができました。その一つがアルバイトです。初めは楽

に稼げる仕事はないかと塾講師やイベントスタッフ、飲食店等、幅広い職種に手を伸ばしてみました。しかし、実際に仕事をしてみて、仕事それぞれにやりがいや大変さがあることを実感しました。例えば塾講師では、生徒の学力や意欲に合わせて計画を立てる必要があります。非常に苦労しました。しかし、生徒が心を開き様々な話をしてくれるようになると、仕事を楽しく感じられる

ようになりました。

また、研究室の先輩に誘われて富士登山に挑戦する機会がありました。基本的に面倒くさがり屋の私一人では絶対に挑戦しなかつたと思います。そんな私ですが、いざ予定が決まると、小学校の遠足の時のようにわくわくしながら登山の準備を行いました。そして当日、天気にも恵まれ、景色を楽しみながら山頂を目指しました。アクシデントもありましたが無事に完登できました。

そして私は薬剤師として県外に羽ばたくことになりました。静岡生まれ静岡育ちの私にとっては小さな冒険です。新しい景色や人との交流に心を躍らせています。まだまだ働き始めたばかりであり、失敗して落ちこんでしまうこともあります。しかし、大学生活で培った知識や技術、そして経験を活かし、日々難題を乗り越えています。これからも薬剤師として社会に貢献できるように日々精進していく所存です。

薬科学科 成績優秀者賞



大学生活を振り返って

博士前期課程1年 創薬探索センター

永岡

菜

(薬科学科 創薬探索センター 令和4年卒)

この度は成績優秀者賞という名誉ある賞を頂き、大変嬉しく思います。今回の受賞は懇切丁寧に薬学をご教授して下さった先生方や共に高めあつてきた友人、常に私を応援してくれた家族など多くの方々の支えのおかげであり、この場を借りて感謝申し上げます。

さて、私がなぜ静岡県立大学で薬学を学び始めたのか考えると、新薬を創ることへの漠然とした憧れからだと思えます。私は末期がんの親戚を看病した経験から、薬で十分な効果が得られないことへの無力感や悔しさを感じ、新薬によって病気で苦しむ患者やその家族を救いたいと考えるようになりました。高校時代には、心の隅にそのような新薬創出への漠然とした憧れを持ちながら、高校の図書館から赤レンガの大学を眺めながら受験勉強をしていました。入学当初は、どのようなプロセスで薬が創出されるのかも存じておりませんでした。大

学4年間を通して基礎から専門領域に及ぶ幅広い薬学の知識を学び、また大学3年次からは創薬探索センターにてがん免疫に関わる創薬研究を進める中で、新薬に関わりたいという憧れがますます具体的なものになったと感じております。

現在は、同大学大学院へと進学し、同研究室にて研究生活を送っております。研究を進めるにあたり、自分の知らなかった事柄の多さに驚き、未熟さを感じることが多々ありますが、先生方から温かく丁寧なご指導ご鞭撻を頂き、研究室のメンバーから助言や刺激を受けながら、これからも大学院での研究に邁進していく所存です。

最後となりますが、今回頂いた賞を励みにして、将来、これまで支えてくれた方々に報いることを目標として、日々努力し、成長していきたいと思えます。

薬科学科 岩崎賞



4年間の大学生活

博士前期課程1年 生化学講座

中尾 初音

(薬科学科 生化学分野 令和4年卒)

この度は岩崎賞という名誉ある賞を賜り、大変光栄に思っております。このような賞を頂いたのは、知識や助言をくださった先生や先輩方、支えてくれた友人、そして何よりどんな時も温かく見守ってくれた家族のおかげです。この場をお借りして心より感謝申し上げます。

4年間の大学生活を振り返ってみますと、やはり友人との日々が色濃く浮かびます。コロナにより対面で会えない日々が長く続いたことが悔やまれますが、そんな時期でさえも心の支えとなってくれた友人には感謝しきれません。静岡県立大学には温かい方が多く、毎日笑顔で過ごすことができました。そ、勉学も努力を継続することができたと思っております。大学3年後期より始まった研究活動は、多くの人との出会いの場にもなりました。技術、知識ともに尊敬してやまない先生や先輩方、いつも前向きで努力を怠らない同期や後輩から学ぶことは多く、刺激を受けながら楽しく研究を行うことが

きたと感じています。現在は、本学大学院へと進学し、学部時代より所属していました生化学講座にて、研究生活を送っています。私はアルツハイマー病の予防法を構築することを目指して研究しております。そもそも、私が薬学を志したのは、アルツハイマー病が根本的な治療法の開発されていない病気であることを知り「予防法や治療法を見つけたい」と強く思ったことがきっかけでした。そのため、この研究に携わることができていることを非常にうれしく思うとともに、熱意をもって実験に励んでいます。研究は失敗の連続であり、うまくいかないことが多いですが、少しでもアルツハイマー病の予防法や治療薬の開発に貢献できるように尽力していきます。

私はまだまだ至らない点が多く、周囲の方々には助けていただくことばかりですが、4年間の大学生活で学んだことを活かして、今後も成長できるよう一層努力してまいります。

在学生だより

大学生活

今期の代議員を務めさせて頂きます。宜しく願います。

大学に入学してから早5ヶ月が経ち、過ぎてみればあつという間の前期でした。私が想像していたよりも大学生というのは、時間がたくさんあるなど感じました。でも、就職してからはほとんど、時間がないと思います。なので、老後前最後の自由時間であると考え、と、より大切にしようと思えます。

しかし、わかってはいても実行するのは難しいです。無駄に時間を過ごしてしまうこともあります。でも、私は小中高と部活、水泳、ピアノ、塾と自分でも多忙だったと思うので、そういう時間の過ごし方も今しかできないと考えれば良いのかなとも思います。

今この文章を書いているのも夏休みの折返し新时期で、こんなに長い夏休みは人生で初めてで、今はとても充実しています。この休みが終わると、後期がはじまり、この調子であれば一年はあつという間に終わってしまうと思います。なので、しっかり計画立てて、たくさんのかをやりたいたいです。



友人と 右が本人

城 泰 暉

(薬学科1年)

これは、やりたいことの一つですが、これから一番やっていきたいことは、自分自身と向き合せて、将来どのような姿になりたいのかをしっかりと考える必要があると、周りの先輩方の就活の話し等を聞いて、つくづく思います。私は自分の中にぶれない軸みたくないものがないので、それを見つけていきたいです。

最後に、大学生活は自分の人生を左右するといっても過言ではないと思います。なので、精一杯いろんなことを考えて、いろんなことを実行していきたい、後悔のないような大学生活を送ってきたいです。

部活で出会った仲間

芹 澤 未 来

(薬学科3年)

静岡県立大学での生活も二年半が経過しました。入学当初はほぼ全ての講義が遠隔で行われていたものの、三年前期ではほとんどが対面形式となり、本来の大学生活に戻りつつあることを嬉しく感じています。

私は女子バレーボール部に所属していますが、今年に入って部活動にも変化がありました。ここ数年は、新型コロナウイルスの感染者が増える度に活動ができなくなったり、大会が中止になったりと、様々な制限の中で活動してきました。しかし、今年は東海リーグ出場や新入生歓迎会の実施など、二年ぶりに参加或いは開催したイベントが多くありました。五月に行われた東海リーグでは、全員が初出場の中、女子四部で準優勝を果たし、三部に昇格することができて非常に良い思い出になりました。

また、八月末には第七十四回関西薬学連盟バレーボール大会に参加しました。三年前に先輩たちが優勝した大会で、緊張もありましたが、再び優勝することができ、非常に嬉しかったです。

この二年半の部活動を振り返



部活の友人とともに 左が本人

ると、試合で勝って嬉しかったことだけでなく、様々な悩みや葛藤を感じたこともありました。部員が何人か辞めてしまったり、部活と勉強の両立が難しかったり、挫けそうな時は何度もありました。しかし、その度に困難を乗り越えられたのは、一緒に頑張ってくれた仲間がいたからでした。優しい先輩や個性豊かな後輩にも恵まれ、部活を通じて出会えた仲間には本当に感謝しています。もうすぐ、部活動は引退を迎えますが、これからも皆との縁を大切にしていきたいです。

3年後期には研究室配属があるので不安もありますが、新たにたくさんの人と交流を深められることを楽しみに感じています。

実務実習の経験を通じて

渡辺 日菜子

(薬学科6年)

本文章を執筆している現在、私は病院薬剤師を目指して就活中である。私は5年生の実務実習の経験を通して、病院薬剤師になることを志した。4年生まで薬剤師としての進路を決めていなかった私にとって、特に病院実務実習は将来を決める大きなきっかけとなった。

薬剤師が活躍する場として、病院や薬局、行政、企業など様々な現場が挙げられるが、病院薬剤師には、患者様の治療にリアルタイムで介入し、症状の経過を把握できるという特徴がある。特に病院では患者様の症状が急変することが多々あり、薬剤師は薬物療法における幅広い知識や臨機応変な対応力が求められる。適正な薬剤の使用における薬剤師の責任は大きく、時に大変な局面もあるが、患者様の症状が改善した時や、患者様に感謝していただけた際の嬉しさは何事にも代えがたく、非常に大きなやりがいを感じられると学んだ。

また多職種連携において薬剤師には、薬学分野を幅広く網羅するジェネラリストだけでなく、特定の分野に特化したスペシャリストが求められると学んだ。自身の知識や能力を活かしてチー

ムで患者様の治療に貢献するためにも、病院薬剤師として臨床経験を積み、認定や専門薬剤師の取得を目指していきたいと考えている。

以上より、実務実習の経験を通して私は、病院薬剤師の仕事ややりがい、強弱惹かれ、志すことに決めた。学生の時に、薬局と病院の薬剤師の仕事を体験できることは、自分の適性だけでなく、実際の医療現場において求められる薬剤師像を知ることができる非常に大切な機会であったと思う。将来、私は患者様へ良質な医療を提供できる薬剤師になれるよう、卒業研究や国試に精一杯取り組んでいきたい。



研究室の同期と共に 右下が本人

研究室を通して

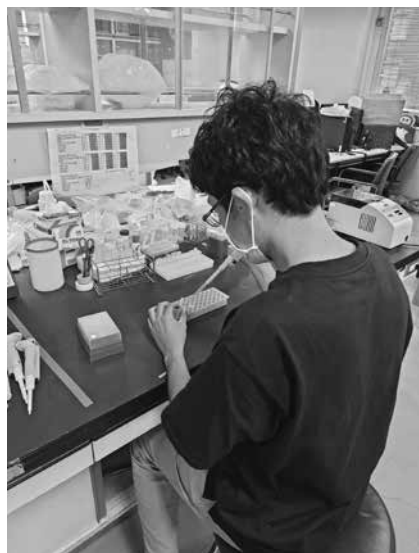
矢島 聡

(博士前期課程2年)

私が研究室に配属されて三年目になりました。楽しく研究生活を送っていますが、配属された当初は上手くやっていたいけるかと不安でした。なぜなら今まで先輩後輩という関係を持つことがなかったからです。中学生や高校生の頃はほとんど先輩後輩と関わることのない部活動に参加していて、大学では部活動やサークルに参加していませんでした。元々人付き合いが苦手でしたが、当時の先輩方がよく話しかけてくれたり、実験を教えてくださいましたおかげで無事研究室になじむことが出来ました。四年生の秋になり、先輩が研究室に配属されました。始めはどう接していいのかわからなかったのですが、実験を通して仲良くなることができました。

現在、私はタンパク質のX線結晶構造解析を目指し、タンパク質の結晶化を行っています。目的タンパク質の構造解析をすることでそのタンパク質の働きを解明することを目指しています。タンパク質の結晶化を行うには純度の高いタンパク質が必要です。発現系の構築を行い、純度の

高いタンパク質を精製し、結晶化スクリーニングを行います。そしてスクリーニングで結晶が得られれば結晶化条件の最適化を行い、結晶を大きくしX線回折実験を行い構造解析に必要なデータの収集を行います。現在、私は結晶化を行い、X線回折実験を行っています。結晶化条件の検討を行い、結晶を大きくすることはできましたが、構造解析に必要なデータ回収には至っていません。構造解析に向けたタンパク質の結晶化は大変ですが、結晶が得られたり結晶が大きくなったりした時頑張ってきてよかったなと感じます。なかなかすぐには結果が出ない研究ですが、これからは根気強く研究を続けていきたいです。



筆者実験中の様子

本部だより

一般社団法人静薬学友会 令和3年度第2回理事会報告

日時：令和3年9月11日（土曜日）15:00～17:00

開催場所：本部会議室（正副会長を除きZoomを用いたオンライン会合により出席）

出席者：理事17名、監事2名、顧問1名

安倍道治、高橋千恵子、賀川義之、秋山欣三、浅井知浩、岩崎年史、

大木明代、大澤勝一、岡野幸次、木下俊也、黒羽子孝太、清水広介、

鈴木隆、仲谷博明、永吉翼、前田徹、南彰（以上理事）

伊藤由彦、若林敬二（以上監事）

横倉輝男（顧問）

三坂眞元、村松郁延、勝山善彦、本島玲子、松田通明、池田潔、

井上泰秀、中山大輔（以上地区同窓会代表）

鈴木いずみ（事務局）

欠席者：理事2名、顧問1名

渡邊学、近藤隆（以上理事）

木苗直秀（顧問）

水島教之、杉井邦好、松崎雅英（以上地区同窓会代表）（敬称略）

出席者は理事19名中17名で、監事2名、顧問1名であり、定款第37条に基づき理事会は成立することが確認された。

議題

【報告事項】

1. 運営管理会社の発足について（安倍会長より報告）

運営管理会社が7月15日に発足、代表は高橋副会長、役員は安倍会長、岩崎理事と若林監事、所在地は静岡市駿河区曲金に事務所を置く。地域医療の向上と人材育成のために社会と関わりを持つことや、具体的な事業は今後検討、進捗は理事会で報告する。

2. 静岡県立大学同窓会連合会について（木下理事より報告）

7月28日に国際関係学部卒の山田氏とともに尾池学長と打ち合わせを行い、尾池学長は連合会について賛同されること、また、連合会の発足が、卒業生の生涯学習の機会となることを期待する旨が報告された。

3. 今年度の地区同窓会支援金について（安倍会長より報告）

令和3年度地区同窓会の支援金として614,000円が支出された。

4. 静薬学友会報第89号について（黒羽子理事より報告）

特集記事の執筆者が決定、会報発行は10月上旬を予定している。

5. 令和3年度前期薬学キャリアデザイン近藤寄附講座事業報告（木下理事より報告）

初年度は対面での講義で、講義後に活発な質問があったが、コロナ禍でZoom講義になってからは学生の声が届きにくい、といった最近の状況が説明された。

6. 就職説明会（2021.4.10 オンライン方式）について

仲谷理事より、就職説明会では各地区OB・OGに参加頂き、地区のニーズや学部1年生のキャリアプラン形成について触れると良いとの提案があった。

関東地区の本島代表より、4月にZoomで行った就職説明会の開催概要と事後アンケートの結果が報告された。

安倍会長より、来年の就職説明会は担当の岩崎理事、大澤理事、木下理事、仲谷理事、若林監事が対応することが報告された。

関西地区の松田代表より、概略や開催時期について質問があり、仲谷理事より4月上旬土曜日に2時間程度開催されてきたことや、学友会ブースの意義が説明された。

【審議事項】

1. コロナ禍における地区同窓会活動について

地区代表自己紹介後、仲谷理事がファシリテーター役として、コロナ禍での活動方法や若い方が参加しやすい仕組み作りについて議論が行われた。

直近2年以内の活動と今後の予定について各地区代表より説明があった。

東北地区

三坂眞元代表より、3年前より活動していないことや、代表以外に幹事組織がないため、今後は幹事会を作ることを目指すことが説明された。

北陸地区

村松郁延代表より、ここ2年活動していないことや、知人を伝手に次の代表を依頼すること、現状では開催が厳しいが各県に副代表がいるため、副代表と相談しながら進めていくことが説明された。

長野地区

勝山善彦代表より、2年に一度定期的に総会を開催していることが説明された。参加者に対しオンライン総会の開催方法についての意見が求められた。

関東地区

本島玲子代表より、例年2年に一度総会を開催しているが、昨年度はメールを中心に活動を行ったこと、今年、来年の目処はついていないことが説明された。また、研究室やクラブなどで横の繋がりが

関西地区

強い学年があり、そこをきっかけに参加者を増やすことができる、との意見があった。仲谷ファシリテーターより、10月発行の会報も参考にしながら、総会の開催に向け活動していくよう要請があった。松田通明代表より、幹事の仕組みはあるものの現在は活動が縮小していることや、幹事は必ずしもネットワーク環境が整っているわけではなく、メールを中心としたやり取りになっていることが説明された。

仲谷ファシリテーターより、学友会のZOOMアカウントが活用できることや、地区規約によると会計などは総会の決議事項ではなく報告事項で対応できること、役員の改選は協議事項があるがメール開催が可能なが説明された。また、講演会をZOOMで開催することも検討するよう提案があった。さらに、2年に1度の総会について、学友会ホームページに載せるなど、交流の無い会員にも理解していただけるように工夫する必要があるとの意見があった。

中国地区

池田潔代表より、西日本豪雨で活動が停止したが、11月14日にZOOMで地区同窓会を開催することや、これまではハガキであったが今回はメールで対応すること、前回の研修シールはあまり効果が無く参加者が数名増えた程度であったことが説明された。多くの方に声をかけることが重要であるとの意見があった。仲谷ファシリテーターより、シールは継続することで認知されるため、継続することが大切であるとの意見があった。

四国地区

井上泰秀代表より、これまで継続して参加されている方を中心に、コロナ禍が落ち着いた後に対面での総会開催を目指すことや、若手に対してZOOMでの参加を促すことが説明された。また、懇親会での気持ちの交流を大切にしているため、ZOOMも可能であるが対面を重視する方針が説明された。仲谷ファシリテーターより、コロナ禍であってもメールやZOOMで各県ごとに連携を取り、交流を維持するよう要請があった。

九州・沖縄地区

中山大輔代表より、総会を開催していないことや、今後組織作りを進めていくために実質的に活用できる名簿を作成し、総会の開催を目指すことが説明された。また、総会を開催するためには、学友会に参加する目的やメリットを会員に説明する必要があるとの意見があった。役員同士の会議はZOOMで行い、総会は対面で開催することを考えている旨、説明があった。

静岡地区

岡野幸次理事より、総会は開催されていないことが説明された。

東海地区

前田徹理事より、総会は毎年一回開催してきたが、昨年は開催できず、今年の開催も未定であることが説明された。名簿は揃っているため、学友会のZOOMが使えるのであるならば活用したい、との希望が伝えられた。仲谷ファシリテーターより、ZOOMを使った講演会も十分に開催可能であるため、開催を検討するよう要請があった。

伊藤監事より、学友会が所有するZOOMアカウントについて説明、使い方が不明な場合は事務局に問い合わせるよう周知があった。

本議題については、特に反対意見はなく、承認された。

2. 令和3年度薬学生涯研修講座について（若林監事より説明）

厚労省において、今後の薬剤師の在り方についての検討会が行われていることや、薬剤師が過剰になることへの対策、高度な医療を担う薬剤師育成を目的とした卒業研修の重要性について考えていく必要がある、それらを背景に今年度の薬学生涯研修講座の講演を企画し講演者を検討していく。

賀川理事より、薬学科と薬科学科の両学科の学生にとってバランスを考慮した講座とするよう要請があった。若林監事より、今年は厚労省からの検討案件が大きな課題であったためにこのようになったが、今後は考慮していくことが説明された。

本議題については、特に反対意見はなく、承認された。

3. その他

伊藤監事より、オンラインバンク口座の開設について提案があり、全会一致で承認された。

横倉顧問より地区同窓会の運営について、運営のための役員に若い会員を登用すること、また、地区同窓会は会員数や会の置かれた事情など差があるので、画一的ではなく代表者の考えに沿ったそれぞれの地区に特徴的な形で会を運営することが提案された。

鈴木理事より、学生の頃に支部の繋がりを形成することで、将来の学友会のネットワーク拡大と活性化が期待できる、との意見があった。

一般社団法人静薬学友会 令和3年度第3回理事会報告

日時…令和4年1月8日（土曜日）15:00～17:00

開催場所…本部会議室（安倍会長、高橋副会長を除きZOOMを用いたオンライン
会合により出席、賀川副会長は別会場からオンラインで参加）

出席者…理事19名中出席16名 監事2名、顧問1名

安倍道治、高橋千恵子、賀川義之、秋山欣三、浅井知浩、岩崎年史、大木明代、大澤勝一、岡野幸次、木下俊也、渡邊学、清水広介、仲谷博明、永吉翼、南彰、前田徹（以上理事）

伊藤由彦、若林敬二（以上監事）

横倉輝男（顧問）

鈴木いずみ（事務局）

欠席者：理事3名、顧問1名

近藤隆、鈴木隆、黒羽子孝太（以上理事）

木苗直秀（顧問）

（敬称略）

理事19名中出席16名、欠席3名であり、定員数を満たしているため定款第37条に基づき理事会は成立することが確認された。

議題

【報告事項】

1. 令和3年度薬学生涯研修講座のハイブリット形式での実施について

（若林監事より説明）

日本薬剤師研修センターの単位は会場に参加した方に発行される。現時点での会場参加者は33名、オンラインでの参加が37名。当日のオンラインの設定は伊藤監事と学生3名で行う。コロナの感染拡大が問題となる可能性があり、会場参加者33名に理事を加えると50〜60名となることを考え、会場参加者はこれ以上募集しない。一方でオンライン参加は30名まで可能なのもう少し参加者を募ろうと考えている。

2. 北陸地区同窓会の代表の交代とそれに伴う代議員の就任について

（安倍会長より報告）

村松郁延さんが退任し、益岡尚由さんが新しい地区代表に就任する。それに伴い代議員も交代となる。代表は報告のあった日に交代だが、代議員は、理事会の承認をもって交代の起算点とする。これをもって代議員の交代を承認する。

3. コロナ禍における地区同窓会活動について（仲谷理事より報告）

昨年12月22日（水）17時より1時間、当日参加頂けた地区代表5名と、安倍会長、担当役員によるZoom会合を行った。池田潔中国地区代表より11月14日に行われたZoomによる中国地区総会の報告があり、時短ができるのは大きなメリット、懇親会の無いのはデメリットではないとのことだった。東北地区はメールアドレスのわかる同窓会員に、同窓会への参加意欲や期待することなどのアンケートを送り、集計中とのことだった。集計結果を会報で報告して欲しいと願っている。その他、若い会員の参加促進に同期会を併せて行う等の提案があった。Zoomによる同窓会の開催なども視野に入れ、会員への連絡手段として会

員のメールアドレスの登録を強力に進めていくことにした。10月の会報に向けてメールアドレスの登録を依頼する文書を作成する。

安倍会長：時流でもあり、まずはメールアドレスの登録促進に努めていきたい。

4. 薬学キャリアデザイン近藤寄附講座事業報告（木下理事より報告）

前回の理事会以降講義は行われていないが、3年生を対象とした「薬学と社会」という講義を1月におこなう。現時点では対面を考えているが、Zoomも検討している。

国内外短期留学・学術研究に係る支援についてはコロナ禍の影響により来年に延期ということで行っていない。進路相談会もコロナ禍で延期になった。

5. SYGコーポレーションについて（安倍会長より報告）

6. 静岡県立大学同窓会連合会について（木下理事より報告）

県大同窓会連合会が令和3年11月24日に発足した。各同窓会から理事2名が選出され第1回の理事会が行われた。会長には国際関係学部卒の山田裕嗣氏、副会長に木下俊也氏とおとり会の鈴木明美氏の2名が選任され、顧問として木苗先生と合田先生が委嘱された。これは静岡新聞にも取り上げられ、県民にもアナウンスされた。

【審議事項】

1. 一般社団法人静薬学友会第5回定時総会について（安倍会長より説明）

定時総会を6月19日（日）1時30分から4時40分まで行う予定である。開催方法はコロナの感染状況にもよるが、現在、会場はグランシップを予定している。大学での開催希望は、コロナが収束した折に検討したい。

特に反対意見はなく、承認された。

2. 令和4年度事業計画（案）（安倍会長より説明）

来年度は役員（理事及び監事）の改選時期である。また代議員の改選もある。それらを考慮し、日程を決めた。37名の代議員のうち、学生代議員を除く30名が改選となる。

仲谷理事：静岡がんセンターとの連携はどうなったのか。

安倍会長：レジデントとして県大の卒業生を迎えてもらうことは実施されている。これまで学生研修の受け入れ自体が無かったが、初めて研修の受け入れを行っていただくことになり、昨年度は、2名の学生を受け入れていただいた。がんセンターとは、引き続き連携の可能性について検討していきたい。

特に反対意見はなく、承認された。

3. 令和4年度収支予算（案）（伊藤監事より説明）

特に反対意見はなく、承認された。

特に反対意見はなく、承認された。

4. その他

南理事より、同窓会連合会の内容として県大卒業生のかかわっている業種一覧のような物をホームページにアップできたらどうかとの意見があった。

一般社団法人静薬学友会 令和4年度第1回理事会報告

日時：令和4年5月21日（土曜日）15：00～17：00

開催場所：本部会議室 正副会長を除きZoomを用いたオンライン会合により出席

出席者：理事15名、監事2名、顧問1名

安倍道治、高橋千恵子、賀川義之、浅井知浩、岩崎年史、大木明代、

岡野幸次、木下俊也、黒羽子孝太、清水広介、仲谷博明、永吉翼、

前田徹、南彰、渡邊学（以上理事）

伊藤由彦、若林敬二（以上監事）

横倉輝男（顧問）

鈴木いずみ（事務局）

欠席者：理事4名、顧問1名

秋山欣三、大澤勝一、近藤隆、鈴木隆（以上理事）

木苗直秀（顧問）

本理事会は、Zoomを用いたオンライン会合により行われた。理事の出席15名、欠席4名であり、出席が過半数を超えることから、本理事会が成立する旨、

説明があった。

議題

【報告事項】

1. 一般社団法人静薬学友会第5回定時総会について（安倍会長より説明）

2. 役員（理事・監事）の任期満了に伴う改選について（安倍会長より説明）

理事、監事ともに改選。大澤理事は退任される。瀧祐介様が新たに理事に立候補。19名の立候補届が提出された。理事と代議員はなるべく兼務する方を減らし ていきたいとの発言があった。

3. 令和4年度事業系就職説明会について（仲谷理事より報告）

木下理事：製薬企業については4年生以上の参加のみであった。

渡邊理事：参加が少ない印象のため、機会を増やす等の改善が必要ではないか。

賀川副会長：すべての学年に就職説明会の案内はしているが、低い学年は少な

い参加となってしまう。学生への周知の方法や時期的なものも改

善が必要になってくる。今後の継続を含めて考えなければならぬ。

安倍会長：学友会として就職説明会にどのように協力すべきか検討したい。

4. 令和3年度成績優秀者賞及び岩崎賞の決定について（賀川副会長より報告）

5. 静岡県立大学開学記念行事について（木下理事より報告）

午前に開学記念行事シンポジウム、午後USフォーラム、新入生歓迎会主催の行事が開催された。

黒羽子理事：USフォーラムでは薬学部から3名の発表があった。

6. 薬学キャリアデザイン近藤寄附講座 事業報告、事業計画、会計報告（木下理事より報告）

安倍会長：寄附講座の活動については、一度ワーキンググループで話し合いを

持ち、役員の協力を頂きながら事業をさらに充実させていきたい。

寄附講座の活動を周知させるため、会報やWebページに活動状況を定期的に掲載するようにしたい。

【審議事項】

1. 代議員の任期満了に伴う改選について（安倍会長より説明）

特に反対意見はなく、承認された。

2. 学生代議員の新規就任について（安倍会長より説明）

安倍会長：新たに城泰暉様（薬学部1年）にお願いすることになった。

特に反対意見はなく、承認された。

3. 令和3年度事業報告（安倍会長より説明）

特に反対意見はなく、承認された。

4. 令和3年度決算報告P15-19（伊藤監事より説明）

固定資産として運営管理会社への出資（株式）がある。

岩崎理事：収入が有効活用できるような新たな事業計画が必要ではないか。

令和3年度決算報告については、特に反対意見はなく、承認された。

5. 令和4年度事業計画 前回理事会で承認済

伊藤監事：事務局のPCについては、事務局経費にて更新はある程度の期間で

行っている。また会計ソフト、捺印の電子化など、電子化も進めて

いる。

7. 学生（キャリア）支援ポーター制度（仮称）の創設（伊藤監事より説明）

学生が必要に応じてOB/OG等に様々な相談ができるような体制として、静

薬学友会学生支援ポーター制度を新たに創設することを提案する。今あるWe

b名簿システムを活用し（会員個々でサポーターとしてフラグを立てる）、シス

テムにアクセス・検索することで、OB/OGを見つけることができる。

安倍会長：学生支援のためのサポーターとして会員に登録してもらえれば鍵

となる。

【意見】

・制度について

仲谷理事…誰がいつ何を相談したのかなど、実績管理はできるのか。

伊藤理事…現在のシステムでは実績の把握はできない状態である。

前田理事…大学が有するサポーター制度（就職支援センター）とは異なるものなのか。また「支援」だけでは目的がわかりづらいので、明確化した方がよい。

南理事…OB/OG全員がサポーターになることはできないのだろうか。

永吉理事…果たして学生がこの制度をどこまで利用するのか。学生にとって利用すること自体にハードルが高くなってしまっているのではないかと。事業を行うことに対する費用対効果も気になる。

・制度の活用方法、周知について

木下理事…各研究室で独自に持っているようなネットワークを活用して周知するのも良いのではないかと。

渡邊理事…いわゆる通常のHPなどは今の学生は見ない。SNSが現在是最も有効な情報ツールとなっている。学友会としてもこういったツールを活用してもらいたい。

黒羽子理事…新入生ガイダンスにて、Web名簿システムが薬学系学生キャリアア支援サポーター制度としても活用できるなどの説明が必要。

浅井理事…OB/OG訪問の要望が多かったりするので、それを仲介することができればと思う。

清水理事…学生代議員がいるので、システムの活用方法について学生側からの意見（どのようなものを使いやすいのか）を聞き入れた方がよい。

安倍会長…事業を進めるといふこと自体は賛同いただけただけということで、事業の内容、支援方法について、学生代議員やコラボレーターと協議しながら決めていきたい。

賀川副会長…個人情報を取り扱うので、きちんとした規定を作っておいた方がよい。

特に反対意見はなく、承認された。

一般社団法人静薬学友会 第5回定時社員総会報告

日時…令和4年6月19日（日曜日）13:30～14:30

開催場所…本部会議室（代表理事安倍道治（会長）、理事高橋千恵子（副会長）、理事木下俊也を除きZoomを用いたオンライン会合により出席）

出席者…

代議員（社員）24名…五十嵐千乃、宮国大介、水島教之、三坂真元、

本島玲子、加藤彩香、佐藤泰士、多田義孝、中村和重、松浦大輔、

勝山善彦、益岡尚由、伊藤（石井）めぐみ、内田信也、大木明代、

清水広介、田中喜久夫、松崎雅英、笠井智代、三上栄一、河本光宏、

藤本司、池田潔、井上泰秀

理事15名…安倍道治、高橋千恵子、賀川義之、浅井知浩、岩崎年史、大木明代、

岡野幸次、木下俊也、黒羽子孝太、清水広介、鈴木隆、仲谷博明、

永吉翼、前田徹、南彰

監事2名…伊藤由彦、若林敬二

顧問1名…横倉輝男

理事立候補者…瀧祐介

次期代議員（社員）3名…田中大智、星野有吾、岩崎綾乃

議決権行使書面提出者…

代議員（社員）13名…熊谷拓也、山田遥香、田中夏暉、中村洸友、猪又健吾、

関本征史、深澤由紀子、石原由美、内田貴啓、高橋忠伸、渡邊学、

松田通明、中山大輔

欠席者…

理事4名…近藤隆、大澤勝一、秋山欣三、渡邊学

顧問1名…木苗直秀

開催にあたり、賀川副会長より挨拶があった。

安倍代表理事より、代議員37名のうち24名出席・13名議決権行使書面提出、理事15名出席、監事2名出席、顧問1名出席であり、本総会が成立する旨、説明があった。

総会議題

【報告事項】

1. 代議員の改選について（安倍代表理事より報告）

正会員の代議員（総数30名）については、26名が再任、4名が新しい代議員として選任されたこと、学生代議員（総数7名）については新入生の加入に伴い、1名が選任された旨報告があった。また、退任された代議員5名のこれまでの貢献について会長より謝意が示された。

2. 令和3年度事業報告（安倍代表理事より報告）

3. 令和4年度事業計画（安倍代表理事より報告）

4. 令和4年度収支予算（伊藤監事より報告）

5. 薬学キャリアデザイン近藤寄附講座令和3年度事業報告・令和4年度事業計

- 画・令和3年度会計報告（木下理事より報告）
- 6. 静岡県立大学連合会同窓会の発足について（木下理事より報告）
- 7. 薬学系学生キャリア支援サポーター制度の創設について（伊藤監事より報告）
- 8. その他（安倍代表理事より報告）

東海地区の松崎代議員（地区同窓会代表）より、代議員および東海地区の地区代表として星野有吾様を推薦される旨連絡があった。また、代議員は本総会終了後、地区代表については7月1日より任期開始となる旨説明があった。以上、7つの報告案件はいずれも全会一致で了承された。

【審議事項】

1. 令和3年度決算報告（伊藤監事より報告）

安倍代表理事より、37名全代議員から事前に議決権の行使が行われ、全員の賛同をいただいている旨、報告があった。反対意見は無く、承認された。

2. 役員（理事・監事）の改選について

理事及び監事の全員が定款の規定により本定時社員総会終結の時をもって任期満了となるため改選が行われ、田中喜久夫選挙管理委員長より、役員（理事・監事）選任投票の開票結果が示された。全理事候補者（19名）、および全監事候補者（2名）について、選任に必要な代議員19票以上の承認が得られたことから、全候補者が選任された。

なお、新たに選任された瀧理事を含め、近藤隆、秋山欣三及び渡邊学を除く出席役員全員が席上その就任を承諾した。

【その他】

河本代議員より、運営管理会社の事業の進捗について問い合わせがあった。SYGコーポレーション代表の高橋理事より、現在、運営方針について検討を行っている旨、説明があった。

学生代議員の五十嵐代議員より、学生実習でTAの機会があり、実習費用の負担が研究室によって異なることを知ったため、学友会から負担できないか問い合わせがあった。安倍代表理事より、今後、学生のニーズを的確に把握したうえで、学友会としてどのようなサポートができるかどうか検討していく旨説明があった。閉会にあたり、高橋副会長より挨拶があった。

以上により終始異常なくZoomを用いたオンライン会合による定時社員総会は終了した。

一般社団法人静薬学友会 臨時理事会報告

日時…令和4年6月19日（日曜日）14:35～14:40

開催場所…本部会議室

理事安倍道治（会長）、理事高橋千恵子（副会長）、理事木下俊也を除きZoomを用いたオンライン会合により出席

出席者…理事16名、監事2名、顧問1名

- 安倍道治、高橋千恵子、賀川義之、浅井知浩、岩崎年史、大木明代、岡野幸次、木下俊也、黒羽子孝太、清水広介、鈴木隆、瀧祐介、仲谷博明、永吉翼、前田徹、南彰（以上理事）
- 伊藤由彦、若林敬二（以上監事）
- 横倉輝男（顧問）
- 鈴木いずみ（事務局）

欠席者…理事4名、顧問1名

- 近藤隆、大澤勝一、秋山欣三、渡邊学（以上理事）
- 木苗直秀（顧問）

（敬称略）

木下理事より、一般社団法人静薬学友会の会長及び副会長の選任を目的として臨時理事会の開催が宣言された。理事の出席16名、欠席3名であり、出席が過半数を超えることから、本理事会が成立する旨、説明があった。

臨時理事会議題

【審議事項】

1. 代表理事（会長）及び副会長の選出

木下理事より、会長及び副会長の候補者について、自薦、他薦の案が求められた。

仲谷理事より、現在、進行している事業も複数あることから、これまでの会長、副会長に引き続き就任いただく案が提案された。その結果、全会一致で、会長として安倍道治理事が、副会長として高橋千恵子理事、賀川義之理事が選任された。安倍会長より、今後の挨拶があり、大学支援の在り方を引き続き模索する旨や、寄附講座をさらに充実させていく旨、方針が示された。

なお、安倍理事は席上代表理事の就任を承諾した。

【その他】

安倍会長より、各種委員会の業務については、当面引き続き担当役員が継続され、瀧新理事については、就職説明会を担当していただきたい旨要請があった。また、新たに就任した瀧理事より、着任の挨拶があった。

貸借対照表

一般社団法人 静葉学友会
全事業所[税込] (単位: 円)
令和4年 3月31日 現在

		《資産の部》	
【流動資産】	(現金・預金)		
現 金	9,856		
普通 預金	39,065,553		
現金・預金 計	39,075,409		
流動資産合計		39,075,409	
【固定資産】	(投資その他の資産)		
関係会社株式	8,000,000		
投資その他の資産	8,000,000		
固定資産合計		8,000,000	
資産合計		47,075,409	
		《負債の部》	
【流動負債】			
未 払 金	218,400		
未払法人税等	71,000		
流動負債合計		289,400	
負債合計		289,400	
		《正味財産の部》	
前期繰越正味財産		43,487,791	
当期正味財産増減額		3,298,218	
正味財産合計		46,786,009	
負債及び正味財産合計		47,075,409	

決 算 報 告 書

第 4 期

自 令和3年 4月 1日
至 令和4年 3月31日

一般社団法人 静葉学友会

静岡県静岡市駿河区谷田 5 2 番地 1

財産目録

一般社団法人 静葉学友会
全事業所

《資産の部》

【税込】(単位:円)
令和4年3月31日現在

【流動資産】			
(現金・預金)			
普通預金	9,856		
静葉支店	39,065,553		
静葉銀行 二三人	(7,560,316)		
郵便局	(473,567)		
清水銀行 美術館前	(637,319)		
郵便振替口座	(1,642,644)		
静岡銀行 無利息型	(26,780,540)		
住信SBIネット銀行	(1,971,167)		
現金・預金計	39,075,409		
流動資産合計		39,075,409	
【固定資産】			
(投資その他の資産)			
関係会社株式	8,000,000		
投資その他の資産	8,000,000		
固定資産合計		8,000,000	
資産合計		47,075,409	
《負債の部》			
未払金	218,400		
未払法人税等	71,000		
流動負債合計		289,400	
負債合計		289,400	
正味財産		46,786,009	

正味財産増減計算書

一般社団法人 静葉学友会

【税込】(単位:円)
自 令和3年4月1日 至 令和4年3月31日

	一般会計	近藤基金	災害支援基金	総合計
【経常収益】				
【受取会費】				
正会員受取会費	3,918,000			3,918,000
受取入会金	6,480,000			6,480,000
【受取寄付金】				
受取寄付金				0
【その他収益】				
受取利息	176			182
雑収	110,000			110,000
經常収益計	10,508,176			10,508,182
【経常費用】				
【事業費】				
広報名簿事業費	703,972			703,972
会報発行費	1,430,984			1,430,984
退官記念事業費	200,000			200,000
大学行事援助費	81,264			81,264
生涯学習費	230,945			230,945
就職説明会参加費	60,000			60,000
渉外費	110,055			110,055
会員支援活動費	624,000			624,000
事業費計	3,441,220			3,441,220
【管理費】				
(人件費)				
給料手当	2,667,570			2,667,570
法定福利費	5,081			5,081
人件費計	2,672,651			2,672,651
(その他経費)				
会議費	123,408			123,408
通信運搬費	86,970			86,970
消耗品費	278,104			278,104
水道光熱費	29,117			29,117
地代家賃	3,690			3,690
新聞図書費	8,700			8,700
租税公課	2,000			2,000
支払手数料	493,104			493,104
その他経費計	1,025,093			1,025,093
管理費計	3,697,744			3,697,744
經常費用計	7,138,964			7,138,964
当期經常増減額	3,369,212			3,369,218
【経常外収益】				
經常外収益計	0			0
【経常外費用】				
經常外費用計	0			0
税引前当期正味財産増減額	3,369,212			3,369,218
法人税、住民税及び事業税	71,000			71,000
当期正味財産増減額	3,298,212			3,298,218
前期繰越正味財産額	8,069,388			43,487,791
前期繰越正味財産額	11,367,600	34,781,090	637,313	46,786,009
次期繰越正味財産額		34,781,090	637,319	

叙勲 受章

次の方々が受章されました。

謹んでお喜びを申し上げます。

2021年11月3日

安倍 道治 様 瑞宝小綬章 (昭和46年卒)

曾布川和則 様 旭日双光章 (昭和53年卒)

2022年3月4日

木村 良平 様 正四位瑞宝中綬章 (静岡県立大学名誉教授 昭和36年卒)

2022年4月29日

富田 勲 様 瑞宝中綬章 (静岡県立大学名誉教授)

熊谷 猛 様 旭日双光章 (昭和46年卒)

石川 優子 様 旭日双光章 (昭和49年卒)



静薬学友会で把握できた方のみ掲載しております

叙勲受章の情報がありましたら、静薬学友会までご連絡下さい。

静薬学友会関西地区同窓会総会開催のお知らせ

この度、静薬学友会関西地区同窓会総会を、下記の通り、オンライン方式で開催いたします。対面での総会ができておりませんでした。この機会を利用して、関西地区の幅広い世代間で交流を広げていければと考えています。

皆様、お誘い合わせの上、是非ご参加下さいますようお願い申し上げます。

(予定)

日時：令和5年(2023年)6月4日(日)、10:30~11:45

開催方法：Zoomによるオンライン方式

内容

<総会> 10:30~11:00

「関西地区同窓会代表あいさつ」 関西地区同窓会代表 松田通明 (平成2年卒)

「関西地区同窓会 会計報告」 関西地区同窓会幹事 岩崎綾乃 (平成4年卒)

「静薬学友会会長あいさつ」 一般社団法人静薬学友会会長 安倍道治 (昭和46年卒)

<講演> 11:00~11:30 (薬剤師研修シールの配布はございません。)

演題『保健機能食品の世界

～元気な毎日を過ごすために保健機能食品がお手伝いできること～』

講師 株式会社カネカ 澤下仁子 (平成4年卒)

<懇親企画> 11:30~11:45

会員の近況・メッセージ交換

(お願い) 会員様の近況を、令和5年4月30日(日)までに、関西地区同窓会代表 松田(下記問い合わせ先)までお寄せください。(当日参加できない方からのメッセージも大歓迎です)

<参加対象>

静薬学友会関西地区会員。(Zoomのアクセス数の関係上、関西地区会員様を優先させていただきます。なお、他地区会員様のご参加につきましては、関西地区同窓会代表 松田(下記問い合わせ先)までご相談ください。)

<参加申込方法>

ご参加いただける方は、令和5年4月30日(日)までに、下記の申込先または問い合わせ先のEメール、あるいは静薬学友会ホームページの会員専用サイト「マイページ」よりお申し込み下さい。後日、Zoom参加用のIDとパスコードをお送りいたします。

【申込先】一般社団法人静薬学友会

E-mail: shizuyak@u-shizuoka-ken.ac.jp

静薬学友会ホームページ: <http://shizuyaku.jp>

【問い合わせ先】関西地区同窓会代表 松田 通明

E-mail: shizuyaku.kansai@gmail.com

静薬学友会報への広告掲載について

平素は本会の活動にあたり格別のご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。本会では会員約7,500名を対象に広報誌『静薬学友会報』を毎年発行し、今回で90号となります。

学友会報は、本会の発展と会員間の親睦および相互連携を目的に、学部の現状、支部および同窓会の活動を含めた様々な情報を提供してまいりました。

現在、すでに会員の皆様から広告を掲載していただき、作成費の一部として利用させていただいております。

今後も学友会報を通じて静薬学友会の一層の発展と充実を図るべく努力する所存であります。何卒、広告掲載へのご協力をよろしくお願い申し上げます。

広告掲載原稿募集要項

1. 媒体名称：静薬学友会報（10月1日発行）
2. 掲載資格：静薬学友会員
3. 広告の種類：一般広告
4. 発行部数：約7,500部（A4版）
5. 広告掲載料：

カラー掲載（募集件数：A4版2件）

単発掲載の場合

A4版 1ページ 80,000円（縦255mm, 横178mm）

A4版 1/2ページ 40,000円（縦127mm, 横178mm）

連続掲載の場合（2年以上連続掲載）

A4版 1ページ 70,000円（縦255mm, 横178mm）

A4版 1/2ページ 35,000円（縦127mm, 横178mm）

モノクロ掲載（募集件数：制限なし）

単発掲載の場合

A4版 1ページ 60,000円（縦255mm, 横178mm）

A4版 1/2ページ 30,000円（縦127mm, 横178mm）

連続掲載の場合（2年以上連続掲載）

A4版 1ページ 50,000円（縦255mm, 横178mm）

A4版 1/2ページ 25,000円（縦127mm, 横178mm）

6. 広告原稿の形態：ファイル、または紙焼き（校正は行いませんのでご了承ください）
7. 広告掲載申込先：〒422-8526 静岡市駿河区谷田52-1
静岡県立大学薬学部内 一般社団法人静薬学友会
代表者 会長 安倍 道治
電話 054-265-8763 FAX 054-265-8769（在室10：00～15：00）
8. 広告料振込先：銀行口座：静岡銀行 草薙支店 普通預金0277279
郵便振替：00820-8-19012 名義：一般社団法人静薬学友会

お知らせ（地区同窓会のZoom利用について）

昨年来、新型コロナウイルス感染により対面での活動が困難となり何かと支障をきたしていることと思います。集団免疫獲得が進んでいるとはいえ、コロナ禍の収束の目処が立ちにくい状況が続いていますので、しばらくは、対面での活動に換え、Zoomによるリモートでの地区の活動を、本部で支援させていただくこととしました。

つきましては、各地区総会開催の際にはZoomを積極的に活用いただくとともに、利用をお考えの際には学友会事務局にお問い合わせください。

一般社団法人静薬学友会 会長 安倍道治

一般社団法人静薬学友会 代議員 (37名)

地区別50音順 敬称略
※ 地区代表を兼ねる

氏名	卒業・修了年 (学生は学年)	地区	氏名	卒業・修了年	地区
城 泰暉	学部1年	学生	杉井 邦好 ※	昭和55年	静岡県
熊谷 拓也	学部2年	学生	伊藤めぐみ	平成15年	静岡県
山田 遥香	学部3年	学生	石原 由美	昭和57年	静岡県
秋田 直杜	学部4年	学生	内田 信也	平成5年	静岡県
五十嵐 千乃	博士前期課程	学生	内田 貴啓	平成25年	静岡県
宮国 大介	学部6年	学生	大木 明代	昭和62年	静岡県
猪又 健吾	博士課程	学生	清水 広介	平成13年	静岡県
水島 教之 ※	昭和54年	北海道	高橋 忠伸	平成11年	静岡県
三坂 眞元 ※	平成16年卒	東北	田中 喜久夫	昭和59年	静岡県
本島 玲子 ※	昭和58年	関東	田中 大智	平成28年	静岡県
加藤 彩香	平成26年	関東	星野 有吾 ※	平成13年	東海
佐藤 泰士	平成5年	関東	松崎 雅英	昭和60年	東海
関本 征史	平成8年修了	関東	笠井 智代	平成18年	東海
多田 義孝	平成1年	関東	松田 通明 ※	平成2年	関西
中村 和重	平成4年	関東	河本 光宏	昭和57年	関西
松浦 大輔	平成1年	関東	岩崎 綾乃	平成4年	関西
勝山 善彦 ※	昭和57年	長野県	池田 潔 ※	昭和54年	中国
益岡 尚由 ※	平成15年	北陸	井上 泰秀 ※	昭和59年	四国
			中山 大輔 ※	平成8年	九州・沖縄

一般社団法人静薬学友会 役員 (23名)

50音順 敬称略

氏名	卒業年	役職	氏名	卒業年	役職
安倍 道治	昭和46年	代表理事 会長	清水 広介	平成13年	理事
高橋 千恵子	昭和51年	副会長	鈴木 隆	昭和54年	理事
賀川 義之	昭和58年	副会長	瀧 祐介	平成12年	理事
秋山 欣三	昭和56年	理事	仲谷 博明	昭和45年	理事
浅井 知浩	平成9年	理事	永吉 翼	平成12年	理事
岩崎 年史	昭和46年	理事	前田 徹	昭和61年	理事
大木 明代	昭和62年	理事	南 彰	平成12年	理事
岡野 幸次	昭和57年	理事	渡邊 学	平成7年	理事
木下 俊也	昭和53年	理事	伊藤 由彦	平成14年	監事
黒羽子 孝太	平成8年	理事	若林 敬二	昭和46年	監事
近藤 隆	昭和46年	理事	横倉 輝男	昭和40年	顧問
			木苗 直秀	昭和40年	顧問

集記 編後

編集後記は平成9年卒の浅井知浩が初担当いたしました。私は静岡県立大学薬学部現役の教員です。さて今回の会報には本学出身で信州大学医学部附属病院薬剤部教授の内藤隆文先生、同じく本学出身で和歌山県立医科大学薬学部教授の長野一也先生に記事をご執筆いただきました。本学出身の先生方が様々な大学で活躍されていることは同じく教員をしている私の励みになりますし、本学のプレゼンスの向上に繋がっていると感じる次第です。先生方の益々のご活躍を心より祈念しております。

会報の「大学だより」をご覧いただくと本学の最近の様子がわかりますが、今年度は講義や実習のほとんどが対面で実施されています。研究活動ではオンライン開催の学会が増加傾向にあるなど、一時期よりは直接人と接する機会が増えていきます。コロナでしばらく会わないうちにちよっと老けたかなと思うこともあります（笑）。お互い様ですが、私は、今年の8月に日本核酸医薬学会参加のために東京に出張しましたが、出張で県外に出たのはじつに約3年ぶりでした。このままずっとオンラインのままにして欲しい仕事は正直たくさんありますが、学会はやはりオンライン参加の方が学会の醍醐味を味わうことができます。Zoomなどのオンライン会議で何度もお会いしているのに一度も直接お会いしたことがなかった方とついに対面でお会いして名刺交換ということも増えてきました。

一方、コロナ前とまだまだ大きく異なるのは、大人数での飲み会がまったくないことです。研究室で飲み会はしていませんし、研究室〇〇周年記念会とか送別謝恩会とか一切ありません。私は毎晩、勝手に自宅で缶ビールを飲んでいますが、ジョッキで生ビールを飲む機会が激減したままなのは残念です。ところで平成9年卒は、ワールドカップやオリンピックのように、4年に一度のペースで同窓会を開催してきました。最後に同窓会を開催したのは令和元年なので、次は令和5年、つまり来年の予定です。開催はコロナ次第だと思いますが、同期の方は少し気に留めておいてください。前回から同窓会の連絡はLINEが主体となりました。同期のLINEグループがあるので、まだ加わっていない方はこの機会に是非加わってください。私 (asai@u-shizuoka-ken.ac.jp) に連絡いただければ対応します。最後に編集後記を同期への連絡に使ってしまい、すみません。同窓会関連ということをご容赦いただければ幸いです。

会報編集委員 浅井知浩 (平成9年卒)

訃報

次の方が逝去されました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

太田 正昭 様 (昭和五十七年卒)

令和四年一月七日 逝去

木村 良平 様 (元薬剤学教室教授・昭和三十六年卒)

令和四年三月四日 逝去

溝腰 利男 様 (昭和四十六年卒)

令和四年四月十七日 逝去

会報担当

委員長 黒羽子孝太 (平成8年卒) 理事 薬学部 免疫微生物学分野)

浅井 知浩 (平成9年卒) 理事 薬学部 医薬生命化学分野)

大木 明代 (昭和62年卒) 理事)

南 彰 (平成12年卒) 理事 薬学部 生化学分野)

伊藤 由彦 (平成14年卒) 監事 薬学部 薬食研究推進センター)

安倍 道治 (昭和46年卒) 一般社団法人静薬学友会会長)

静薬学友会報 第90号 令和四年十月一日発行

〒422-8526 静岡市駿河区谷田五二一

TEL 〇五四―二六五―八七六三

TEL 〇五四―二六五―八七六三

FAX 〇五四―二六五―八七六九

メールアドレス shizuyak@u-shizuoka-ken.ac.jp

ホームページアドレス http://shizuyaku.jp

正会員の皆様へ 会費納入のお願い

一般社団法人静薬学友会の運営は皆様の貴重な年会費で賄っております。具体的には、静岡県立大学薬学部の教育研究に対する支援事業、会員の住所管理や HP の運営、生涯研修の実施、会報発行、地区同窓会活動への支援など、多岐にわたる同窓会活動に使用させていただいております。しかしながら、近年納入率が 20% 台にとどまっており、法人といたしましては今後一層事業の拡大を図るためにも、皆様のさらなるご理解とご協力をお願いする次第です。本部としましては、毎年の納付手続きが不要な 10 年会費 や 終身会費 の納入をお勧めいたします。また、寄付金(一般)につきましても、金額の多少にかかわらず、謹んでお受けいたしますので、ご意志のある方は静薬学友会事務局までご連絡下さい。

(問い合わせ先 静薬学友会 事務局 電話 054-265-8763、Eメール shizuyak@u-shizuoka-ken.ac.jp)

【会費の納入方法】

1. クレジットカード決済

静薬学友会ホームページ (<http://shizuyaku.jp>) の「マイページ」(会費支払・各種お申込み) から納入していただけます。

2. 郵便局から振込用紙を利用して納入

同封の振込用紙にて郵便局窓口および郵便 A T M から納入していただけます。

※10 年会費および終身会費は、振込金額を二重線で訂正することにより郵便局窓口にて納入していただけます。

3. コンビニエンスストアから振込用紙を利用して納入

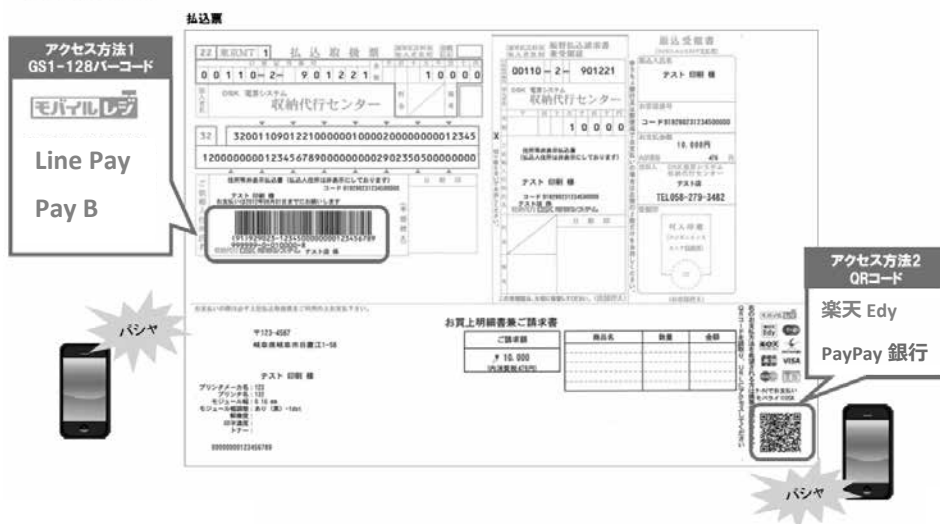
同封の振込用紙にてコンビニエンスストアから年会費を納入していただけます。(納入期限 令和 5 年 3 月 31 日)

4. モバイル決済

同封の振込用紙に印字されたバーコードおよび QR コードにて、年会費を納入していただけます。

(納入期限 令和 5 年 3 月 31 日)

料金収納用バーコードまたは、払込票余白に印刷されたQRコードをスマートフォンで読み取り、決済画面にアクセスします。



		会費の種類		
		年会費 (2,000 円)	10 年会費 (20,000 円)	終身会費 (50,000 円)
納 入 方 法	1. クレジットカード決済	○	○	○
	2. 郵便局	○	○	○
	3. コンビニエンスストア	○	×	×
	4. モバイル決済	○	×	×

令和3年度 会費納入者一覧 (敬称略)

終身：終身会費納入者 10年：10年会費納入者
(修士)：修士修了年 (博士)：博士修了年

昭和20 (1945) 年卒	中村 てる子	10年	洪谷 けい子	犬伏 式生	昭和42 (1967) 年卒	佐藤 しづ子
三村 治子	中村 迪子		鈴木 勇夫	犬伏 三千代	古木 昭夫	佐藤 正基
昭和21 (1946) 年卒	野呂 和子		高木 操	岩本 浩代	味知 恵子	杉山 恭子
児玉 光子	深津 昭		田中 正幸	小沢 敬子	森田 俊夫	鈴木 勝雄
昭和23 (1948) 年卒	福地 康浩		中川 豊子	柿谷 芳宏	山崎 悦孝	武田 隆幸
赤堀 美代子	風里谷 歌子		仲道 述夫	山中 矩子	角 重信	東郷 笑美子
昭和24 (1949) 年卒	古川 卓		中村 阿丈	河原畑 二郎	渡邊 能子	伴 晴江
久保田 田鶴子	堀田 好		中村 孝二	佐野 勝	昭和42 (1967) 年卒	藤井 真
米澤 宜子	前田 祐子		福島 俊郎	左納 通正	上西 明子	溝上 俊之
昭和25 (1950) 年卒	水野 啓子		古田 尚平	鈴木 次郎	内田 隆	宮武 忠司
安間 俊子	村井 晶子		堀井 大治郎	竹上 英男	内田 文代	村上 実
川村 幸子	村井 勉		松永 純一	田中 洋子	興津 馨	10年
平野 祥子	吉田 佳子		丸山 晃	辻 邦郎	奥村 令子	村松 郁延
武藤 幸子	昭和34 (1959) 年卒		丸山 利依子	名倉 猛夫	小澤 久子	望月 笙子
渡辺 喜久代	安藤 圭子		水谷 義美	小澤 伸行	小泉 听也	森本 正信
昭和28 (1953) 年卒	飯島 千穂子		山崎 宏子	林 英文	後藤 正典	山本 栄子
室伏 すみ子	池田 啓子		山崎 雅江	深沢 彰	斉藤 紀恵	昭和45 (1970) 年卒
山田 和子	石和 誠		山下 敏夫	本田 貫十郎	佐倉 直樹	青木 興治
昭和29 (1954) 年卒	逸見 絹代		山本 擴	三浦 勇二	白橋 美智子	有本 博雄
10年	伊藤 典子		有紀 美枝	宮本 正紀	鈴木 和子	市尾 義昌
小野 郁夫	伊藤 玲子		渡辺 亜沙子	八鍬 恭子	鈴木 紳一	伊藤 徳雄
下川 秀子	稲岡 万里	昭和37 (1962) 年卒	石井 漱一	八鍬 恭子	鈴木 孝子	稲葉 藤子
杉本 敬一	太田 英子		大久保 好子	昭和40 (1965) 年卒	芹沢 嘉子	10年
中林 さち子	大村 二三夫		亀井 興	祐山 喜彦	高田 トシ子	浦野 治明
10年	西川 佳代		川合 穎子	足立 一彦	池田 正章	小橋 和彦
平野 信三	神谷 大三郎		河村 信弘	池田 正章	井手吉 範久	田村 八宏
平林 和子	西郷 功		藤本 和彦	岩村 晋	渡辺 吉	大塚 房枝
10年	酒井 光江		蔵本 和彦	大滝 治夫	土屋 久美子	土屋 久美子
10年	柴田 幸子		桑原 伊玖子	大塚 坦造	長島 紀子	長島 紀子
増田 令子	田中 幹晃		小西 一宏	奥村 淑恵	糠谷 ミツル	10年
松永 公良	長倉 久美子		近藤 静男	角 淑子	長谷川 進彦	板東 智恵子
宮城島 達哉	矢沢 光子		鷲澤 貞夫	河合 秀和	板東 智恵子	平野 美恵子
村上 敏子	山口 修		笹田 庸子	岸野 文治	平野 美恵子	平野 美恵子
山下 友子	山本 昭野		佐藤 朝子	木苗 直秀	船山 和彦	船山 和彦
昭和32 (1957) 年卒	吉田 薫子		白井 千恵子	河野 悦子	山本 敏博	山本 敏博
10年	昭和35 (1960) 年卒		鈴木 智彦	五島 綾子	山本 正枝	山本 正枝
青山 健一	市中 洋子	10年	大長 美穂子	小西 みゆき	若宮 忠弘	若宮 忠弘
10年	宇都 宗長		平良 武男	齋 光宏	鷲巢 昭弘	鷲巢 昭弘
稲名 一枝	宇都 仁江		千葉 隆子	佐合 武	仲谷 幸子	仲谷 幸子
梅村 隆久	遠藤 伸江		松岡 千恵子	志村 洋子	渡辺 武明	10年
10年	奥村 太一		松原 民子	鈴木 一市	昭和43 (1968) 年卒	浅岡 公江
開発 邦男	小栗 信彦		山本 俊子	高橋 圭子	10年	安間 勝男
河西 健	尾崎 克子		吉岡 はま	谷澤 久之	岩崎 健一	岩崎 健一
酒見 圭子	角田 藤子		石島 弘明	手塚 勇	中 寿美	中 寿美
10年	金子 暁子	昭和38 (1963) 年卒	上杉 史代	中川 いく子	中川 いく子	中川 いく子
杉浦 暢	金子 治郎		小栗 瑠璃子	長沢 淑子	長沢 淑子	長沢 淑子
須崎 守康	久保田 浩子		川口 和子	中島 欣吾	中島 欣吾	中島 欣吾
辰己 好美	小林 弘子		小泉 恵子	永野 隆夫	永野 隆夫	永野 隆夫
中谷 貴美子	小林 富二男		五島 廉輔	藤井 尚子	藤井 尚子	藤井 尚子
10年	杉山 豊美		佐藤 寛子	本多 洋子	本多 洋子	本多 洋子
平野 昌子	鈴木 澄雄		志村 孝	松浦 美恵子	松浦 美恵子	松浦 美恵子
増井 幸子	鈴木 千枝		鈴木 清	宮本 靖夫	宮本 靖夫	宮本 靖夫
増田 恵美子	鈴木 正子		砂本 勝	村上 みね子	村上 みね子	村上 みね子
10年	百々 紗世子		竹津 秀麿	村山 雄厚	村山 雄厚	村山 雄厚
岡岡 淑子	鳥居 暁		寺田 章康	山口 正代	山口 正代	山口 正代
丸山 晶	中嶋 イチ子		中川 淳	山下 紘子	山下 紘子	山下 紘子
三谷 倫一	銅谷 勤		長倉 裕子	山添 悦子	山添 悦子	山添 悦子
森谷 甫美	10年		野口 英世	藤倉 輝男	藤倉 輝男	藤倉 輝男
10年	山田 とし子		野末 一茂	昭和41 (1966) 年卒	昭和41 (1966) 年卒	昭和41 (1966) 年卒
山内 丈	10年		野呂 忠敬	阿部 千恵子	阿部 千恵子	阿部 千恵子
山村 美智彦	星 由利子		袴田 康允	石上 幸司	石上 幸司	石上 幸司
10年	松永 義明		古畑 喜博	伊藤 嘉隆	伊藤 嘉隆	伊藤 嘉隆
渡辺 規子	宮原 武恒		大塚 信子	稲垣 忠	稲垣 忠	稲垣 忠
昭和33 (1958) 年卒	山下 恒子		山内 道雄	大場 浩	大場 浩	大場 浩
10年	山田 とし子		吉田 信正	片岡 睦	片岡 睦	片岡 睦
青山 仁	昭和36 (1961) 年卒		渡辺 直則	中村 好志	中村 好志	中村 好志
10年	朝木 はる子		森元 邦	成田 愈尚	成田 愈尚	成田 愈尚
縣 貴江	大塚 信子	10年	山内 道雄	新述 慶子	新述 慶子	新述 慶子
石田 佳子	岡 鐵雄		吉田 信正	糠谷 東雄	糠谷 東雄	糠谷 東雄
伊庭 治子	小堤 公子		渡辺 直則	沼田 洋	沼田 洋	沼田 洋
10年	金井 修躬		浅海 英子	野田 弘子	野田 弘子	野田 弘子
右近 洋英	河谷 浩子		新 邦夫	服部 徳子	服部 徳子	服部 徳子
大桑 滋之	木下 幸子		有光 とし子	終身	終身	終身
10年	木村 良平		飯塚 優規子	昭和44 (1969) 年卒	昭和44 (1969) 年卒	昭和44 (1969) 年卒
大坪 千恵子	齊藤 都		石原 さち子	岩城 節子	岩城 節子	岩城 節子
10年	佐藤 美也子		四條 英子	植田 悦子	植田 悦子	植田 悦子
小原 博光	四條 英子			浮島 美之	浮島 美之	浮島 美之
塩谷 勝夫				大石 悦子	大石 悦子	大石 悦子
10年				桐浴 静江	桐浴 静江	桐浴 静江
杉本 多喜子						
谷口 年男						
田村 重継						
辻 永子						
中島 信子						

わかくさ薬局グループ

「良き仕事は良き社員から、
良き社員は良き会社から」

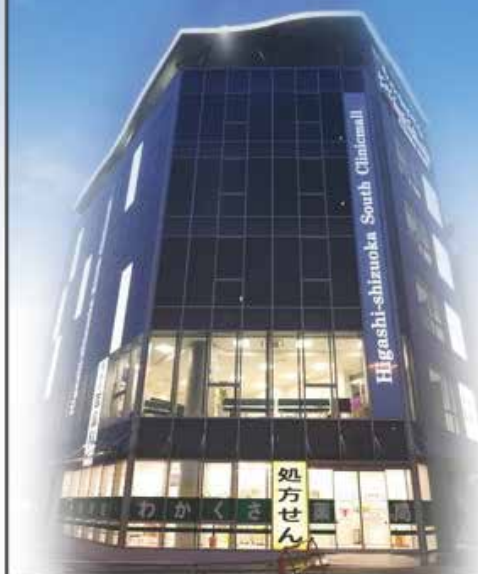
これを信念に、
わかくさ薬局グループでは社員教育に力を注いでいます。

それは職場だけにとどまらず、経験を活かし、己を高め、
自己研鑽が楽しくなるような場の提供をしています。

いつでも、高きを仰ぐ気持ちを忘れずに。
日々を過ごすことに誇りを持ち、実践できるように。

わかくさ薬局グループ
代表 高橋 千恵子

つづきはWebで。
<http://www.stcy.co.jp>



県大卒業生も多数活躍中！

静岡で就職なら
メディスン

静岡市内に薬局 6 店舗
健康食品・OTC 専門店 1 店舗展開

静岡県立大学薬学部連携薬局

株式会社 静岡メディスン

静岡市駿河区宮竹 1 丁目 4 番 5 号
TEL : 054-237-5316
E-mail : soumu@e-medicine.co.jp



令和4年度 薬学生涯研修講座

近年の感染症の実態と、その予防及び治療の課題

—薬学が果たす役割—

主催／一般社団法人静薬学友会・静岡県立大学薬学部

日 時：令和5年1月22日(日) (または令和5年2月19日(日)) 13:00~16:30
開催方法：集合研修及びオンラインでの配信によるハイブリッド方式
会 場：静岡県立大学 小講堂 (または看護学部棟4階13411講義室)
後 援：静岡市薬剤師会、静岡県薬剤師会、静岡県病院薬剤師会 (予定)
共 催：日本薬剤師研修センター (予定)

世界的に感染が拡大した新型コロナウイルスへの対応について、国内でも新たな対策を迫られるフェーズに入りました。そこで今回の研修会では、近年の感染症の実態および、その予防と治療の課題と薬学が果たす役割をテーマに、社会的に問題となっている新型コロナウイルス、サル痘等の、感染ウイルスの動向と、それら感染症の予防と治療について、ウイルス学がご専門の鈴木隆先生より感染性ウイルスの動向とワクチンと治療薬開発について基調講演をいただくとともに、行政、病院薬剤部、保険薬局からの講師による感染症対策の現状について情報をいただきます。

プログラム

【開会挨拶】 13:00 一般社団法人静薬学友会会長 安倍道治
静岡県立大学薬学部長 賀川義之

【講演1】 **基調講演** 13:10~14:20
「感染性ウイルスの動向とワクチンと治療薬開発の実態—新型コロナウイルスを中心に—」
静岡県立大学客員教授 鈴木 隆

【講演2】 **一般講演** 14:30~16:20
「新型コロナウイルスに対応する薬剤師、臨床検査技師の役割」

行政／静岡県健康福祉部感染症対策局新型コロナ対策推進課機動第3班 専門主査 鈴木孝典
臨床検査／修文大学医療科学部教授 涌澤伸哉 (昭和51年卒)
病院薬剤部／静岡県立総合病院薬剤部 須山由佳子 (平成24年卒)
保険薬局／焼津市薬剤師会理事・わかくさ薬局大富店 管理薬剤師 渡邊啓子 (平成7年卒)

【閉会挨拶】 16:20 (16:30終了)

日本薬剤師研修センター研修認定単位：2単位 (予定)

参加費：無料 会員以外もご参加いただけます

参加定員：会場受講者80名 (予定) / オンライン受講者100名 (予定)

(先着順・オンライン受講の方には視聴用URLをお知らせします)

参加申込：静薬学友会ホームページ (<http://shizuyaku.jp>) よりお申し込みください。

令和4年度薬学生涯研修講座運営委員会 委員長 若林敬二

問い合わせ・参加申込／一般社団法人静薬学友会

〒422-8526 静岡県静岡市駿河区谷田52-1 TEL：(054) 265-8763 FAX：(054) 265-8769

Eメール：shizuyak@u-shizuoka-ken.ac.jp 静薬学友会ホームページ<http://shizuyaku.jp>